内外新聞

戊慶應四辰后四月

自壹
至拾七

洋学文庫
文庫8
C 496

不許翻刻

閏四月十七日

内外新聞

第一

第七日目
毎出板

知新館

宮内省圖書寮

41三.6843

勝俣氏寄贈

神戸新聞訳

西洋第五月廿日出
我四月廿八日

○第五月十八日（我四月廿六日）夜中ノ大雨ニヨリテ當地ニ出来セシ堀切ノ不行届ヲ證ス可シ

辺頃美麗（ビレイ）ニ造營（ツクル）シタル米國（アメリカコク）コンシュル名（後）館ノ前面（マエ）ニアル砂濵ハ斯ノ大雨ノ水害ヲ醸（カモ）セリ曩ニ工人堀切ヲ營シ時労煩ヲ尽サザルカ故ナリテキレトル人名社中ノ居館ハ尤モ此水害ヲ受タリ軒（ノキ）下并ニ商店（ミセ）ヘノ通行（カヨイミチ）ホ暴流（ミズ）ノ為ニ大ニ害セラレタリ是日本人ノ建築ノ術ニ疎（ウト）

キカ故也

○大坂コリノ報告ニ云

大日本　皇帝ハ未タ大坂ニ滞在ナリ供奉ノ面々モ多人數輻湊シテ大体市中ニ充滿スルカ故ニ如何ナル小家ト雖借料等非常ニ貴騰(アガリ)セリ茲ニ於テ考フレハ大坂ニ開港セント欲スル人ハ斯ノ如キ借賃ホノ高價ヨシテ畢竟盛ンニ行レシ商法モ漸々衰微ニ傾クノ不幸ニ遇セン

○第五月十七日(我四月廿五日)朝サラミス船ト云フ蒸氣船ハ舳ニ英國公使ハルリーバークス人名ノ旗章ヲ揚ケテ入港セリ時ニヲセーン船名ヨリ定例ノ祝砲ヲ發セリ斯テ暫時ノ後サラミス船ハ大坂ニ出帆シ再ヒ翌日夕ニ至テ歸着セリ

○同日夕ロト子ー船名副將ケツヘル人名ノ旗章ヲ揚テ入港セリ時ニ米國戰艦コルヘツトオナイタ船名ヨリ祝砲ヲ發セリ

○翌十八日（我四月廿六日）朝ゼブラ船ハ英國公使ハルリーパークス名ノ人ノ護衛（マモリ）トシテ兵士卒數名ト海軍士卒ヲ乗セテ大坂ヘ發セリ

○同日ロッツト子ーオセーンノ二艦モ亦大坂ヘ赴ケリ時ニ天保山ノ砲臺（ダイバ）并ニ米利堅（アメリカ）艦コルヘットヨリ祝砲ヲ發セリ

○同日夕ヘルヽン（船名）二百五十人ノ婦人小児ヲ乗セテ江戸ヨリ来着シ報告ヲ陸ニ通ルヤ直チニ豊後洋ニ向テ發セリ此報告ニ依テ左ノ新聞ヲ得タリ

○會津并其外等凡テ廿万五千ノ兵ヲ率テ江戸ヘ向テ發セリ一橋（德川氏也）ノ海軍モ亦海軍奉行某等七隻ノ軍艦ニ將トシテ會津兵ノ應援ヲセンカ為メ昼夜蒸氣ヲ燃（モヤ）シテ江戸海ニ在リ當時江戸城ハ已ニ皇帝ノ所領ニ属セリ且ツ碇泊スル船ハ江戸在ル女人童子ヲ他所ヘ運漕（ウンソウ）スルノ用意ヲナセリ

論者曰是全ク空レキ風説ニシテ信スルニ足ラス
暫ク千五百人ノ兵アリト聞クニ今二十万五千
人ノ兵有リトハ虚説ノ甚シキ者欤

○十八日朝（我四月廿六日）横濱ヘ發セント用意セシ
バルクオレークス（船名）ハ延期（ノバ）シ翌日（我廿七日）出
帆セシ時未タ港口ヲ出サルニ不幸ニシテ
洲ニ乗セタリ時ニ在港ノオセーン（ヒ）船ヨリ
速ニ挽舟ヲ出シタレ圧東風殊ニ甚シクシ
テ挽（ヒ）クヿ能ハス又ストーンチ船ヨリモ挽
舟出シタレ圧亦能ハス後漸（シバラク）アリ満汐（ミチシホ）ノ
時ニ當リテコツクチマヘルト云小軍艦ヲ
以テ挽出タセリオレークス船ハ郵モ損害
ナクシテ横濱ヘ出帆セリ

○香港（地名）ニ在ル英國コンシユル（役名）メトホル
スト（人名）ハ上海ノコンシユル医官ウインチ
エスト（人名）ノ後役ニ任セラレ又メトホル
ストノ後役ハジヨンマルクハム（人名）ヘ命セ

ラレシヲ聞ケリ

○本月十六日（我四月廿四日）ノ後ハ物價相場ノ報告ヲ得ス然レ𪜈木綿糸并ニサハイ服連ハ他日價ノ上騰（ヲカリ）スルヲ待居ルトテ殊ニサワイハ甚タ下直ニシテ買込タル人困却ノ風聞アリ

○津出シ品物ノ中茶ハ殊ノ外好ミ手多シ然シ仕来リシ出港物ハ多生糸煙草ナリトヅ

或人ノ書狀

○来意ノ趣ニ夏中小艇（コブネ）競駈（セリカケ）ノ企コレ有ト實ニ開鬻ノ一トモ相ナリ或ハ適然タラン然リト雖社中人少加之小艇モ亦些少ニ属ス或ハ不可ナランカ余以為ク時々砲發ノ會ヲ催シテ此ニ換ヘハ如何ン費用モ甚少クシテ木的糊紙等モ又勢備ハレリ且ツ地形ヲ撰ミ東方ノ海濱ヲ以テ之ニ充ツ可シ發砲期日ノ如キ毎十四日ニ一度ツヽニテ可ナラン又費用ヲ減省スルカ為ニ一篙ノ粗

的ヲ用ヒレ此挙ハ實ニ社中而已ナラス恐
クハ看官(ミルヒト)モ亦愉快ヲ極ルニ至ラン

近日入港出港船日記

入港ノ分

○第五月十七日サラミス横濱ヨリ着　同日
ロデヲー仝所ヨリ十八日ヘルマレ江戸ヨ
リ

出港ノ分

○第五月十七日ウェレット上海ヘ出帆　十八
日ヘルマン備後洋ヘ仝日オライクス横濱
同日ウェルケン長崎ヘ
兵庫大坂ノ通船

○ストンチ船名ナル蒸氣船日々朝八字ニ我五ツ時
神戸ヨリ大坂ヘ出帆シ午後五字ニ我七ツ半時
大坂ヨリ亦神戸ニ發ス荷物旅人等運輸ス
可シ

以上

支那國

此歳ノ初メ二月頃ヨリ唐国北京地名ト云フ処ニ叛逆人アリレトツ共ユヘンヲ尋ヌルニ元キリシタン宗門ノ徒起ツテ王命ヲ用イツ妄リニ逆意ヲ企ツル力故ニ天子ヨリ或ル大将ニ命シテ之レヲ伐タシムトイヘ共徒黨ノ内ニ外国人四五人モ交リ助クルト云フ然ルニ一人名イトヒ云フ大将イデヽヨリ克ク之レヲ平ラゲシカドモ残兵別レテ帝ヘノ糧道ヲ絶チ専ラ海賊ヲナスヿ故亚京地名之レカタメニ大イニ擾騒スト云フ

集者曰ク舊幕府政權ヲ採ル之時ニ当ツテ肥前ノ国島原ノ村落或ルハ長崎ヨリ二里斗リ離レシ処ロニ浦上ト名附クル村アリ凡ソ三千家モ有リトト云フ処ナトハキリシタン宗門ニ組セシモノ凡ソ合

セテ二千人モ有リシト聞ク夫レニヨツ
テ去年九月コロ尽ク召捕リニナリシ
カドモ如何ナル故カ之レヲ釋ルシ
今ニマダ盛ンナリ我カ宗門ニ敗依ス
ル者ハ皆之レヲ救フノ理ナル故佛人ヨ
リ助ケヲ乞イト云フ然ルニ当節ニ至
リ何ニカ御所置ノタメニ殊ニ御役人
方ノ御配慮トツ実ニ此ノ宗門斗リ
ハ恐ルヽナリ

兵庫新聞

慶應四辰歳壬四月台州兵庫

楠ム廟前高札之写

大政更始ス折柄表忠之盛典ハ彼為　行天
下之忠臣孝子を勧奬被　遊ル為楠賜
正三位中将正成精忠節義其功烈萬世ニ運
真ニ千歳ニ一人臣子之亀鑑ニ故ニ今般
神ロ千城追謚ニ社壇造営ニ被　遊ル異恩ニ依
之金千両　御寄附ニ　出来事

他正行以下一族之者等鞠躬尽力其功方
不小賞之 抜合 紀可有之旨被
仰出事
右之通被 仰出候ハ天下有志之者御手傳
所業洋 去年和 同志願之向有之ものと
辰五月四月
兵庫
裁判所

許者曰
上世民古ヘノ志ヲ孝子愛恤撫育寒義俄
ニ多ク発シ昔之人之ハ如不及近
世ニ而ハ故蓋シ立偉之道技出衆ニシテ衆
相一御志ヲ集者深之深ニ云
○五穀大昇十キ子 疫ハ人間病之子 疫ハ刑九力
故今民所一新之折柄未タ天下平定トモ云レサ
ル中三七八儲民ヲ助ケ二十ヲ第一三要ノ コトヨ
リ之ヲ以ヲ民撫刑祈ノ戸ニヲイテ病院所之立
ル遊ク萬民ノ病ヲ平癒カセント名医ニ集メ
王ヲ 実ニ 乾坤ヲトモナリ云ニヨツテ如件十九

早賊（イヤミキ）者ニシテ病氣ト有レハ速ニ出テ療治ヲ願ヒ出レ
ト云フ事ナリ
此病院所ハ元来方ニ能ク人ハ莫大ナル費天
下有志ノ人ニハ御寄附ヲ願ヒ出ル筈ニ
為シ人ハ志ヲ出セトノ御
二冊出来シ節ハ委敷詳ス
岡東新聞
昨夜東京平定イタセシ故鎮撫総督トシテ
近衛大納言様御出張相成ト云ヘ

戦争記

四月十五日ノ夜兵部卿宮ハ宇都宮ヲ棄テ会津ヲ頼ミ
防クヲアタワス其夜已ニ落城セリコノ事ヲ聞
官軍ハ会来リシ故ニ直ニ官軍ヲ撰出シ二集リ
小山ト申駅ニヨイテ戦ヒ催ス所賊敗ヲシテ
宇都宮城ニ引退キ翌十二日宇都宮藩戦ヒ官軍
大勝利アリシ者ハ賊兵ハ城中ニ地雷火ヲ仕セテ
逃レ去夜官軍ヨリ城ヲ攻ムレ人城ニ知ラ地雷
火発シテ落ル兵一人ヲ丈ケ大ニ驚ク

[illegible]由里之言ヲ以敵兵ヲ見山ニモストイヘドコロニモ出軍
スルヿ叶ワスシテ終ニ會城ヲ逃ル
一信州路ヲ退ミシ敵兵越後田道ニテ松代ヘ迫ム
ヿヨリ上田松平ヨリ加勢トシテ幸人宗指出ス松代ヨリ
松平ハ道路モ遠カニ新ル、ヿニテ火急ニ人数ヲ
揃ヘスヿ多クハ六ツ家キ等ナルニ今卒人ノ兵出サレシ
ヿ尤モ有ルヘシト礼謝シテ市加勢ニ及バズ方ヲ以テ
返ス次ニ上田ハ近國ノヿナカラ僅カニ十人シ兵ヲ出ス
ト云フヿハ只云伏ノ加勢ニシテ夕ノムニ足ラス敵ト共

ニ討ヒルベシト令ヲトスカ故ニ前勢等悉ク依テ
本國ヘ使者ヲ私シ重テ二百騎人ノ援兵ヲ加
ヘテ以テ敵ヲ敗ミニ拙シキ敵遠方ヲ交ヒ敗走
スル処ヲ後ロヨリ高田勢追討シテ殊ニ勝利ア
リシトリ依之コレヲモ留ナ會城ヘ逃ノ籠ルトナン
評ニ曰ク高田勢先ニ一ツヽヘモセス我カ城下ヲ
其後ニ通シ今敵ノ逃ルニ及ヒテ真ニ追討シ
事其意怪ク士道ニ私ラヅトノ風ナリ
依之信越及ヒ関東ハ平穏ノ由風ナリ

ミ戦争ノ中箱根ヲ拠ト云ヘキ者ハ松代勢ト云フ
ナリ上田勢ハノ云ヲ杯ニテハ実ニ強国ト云ヘシ

元新選組
近藤勇事
大和

右ハ先月四日ニヨイテ召捕ラレシ処ノ浪士
ト称スル者ニヨイテ左ノ如ク取置ク所ナリ

近藤勇子
大和

世者義党悪ミ罪有ル処ハ孔明ノ法ニ倣ヒ
ニヨイテ皮軍ニ敵對条大逆有ル今前条
ものく

五月四日

右ミ前級三條川原ニおいて梟ス

西園寺ニ依中將ニ丹鶴侍従ノ御供
走ラシム右ハ大石山ヲ
大石山ヲ白雲ミ

まて法施せしけるまへり
岡田光年右

甲斐猶治にて織の死骸を
見る
無手際動中見えけり
見ぬ姫のまこのこと

依水にて織色をお拂ひし時
良資

宇治川に積る老葉そ流るらし
さは思ふまじ打ちよせけり
香藩
長和

辰三月
於駿府総裁有栖川宮様へ英国公使相届
ニ差許役之身ゟも公使参政途中ニおゐて
之無礼致候ニ付て相君忠御斬遊ハされ候
辰之月五藩ゟ建言
謹而奉申上候南城御陣陣定而御廟幕
も並ニ薩長並ニ奉拝海兵鎗ニ乗引て
相集ニ相成候自死を覚悟来も未だ能ニ届て不能之
御身甲之陣進軍之機會奉存候ニ打捕

英國公使源來京市達し併て書翰義を彼
し結実不相分招き致さ愛　右得社作付
以義を申ち書翰を以報ぜ　富藤に云ふ遠
甲斐近所進軍を為英國公使市度掛
し義を参謀市中高浦を扱社
作付致書翰を又彼かふ法し義市し
以て忠を作御所し新一度浦先ハ書
翰を以平生と相遠軍中し人結所義
高義忠象を以彼意為を生ち義斗世地

要害も不宜扶有事以急速御進軍と為義
叶限一日事態預忠恐惶謹言

辰三月

尾張大納言
筑前宰相
池田信濃守
毛利長門守
稲田九郎左衛門

知新鈔告文

此度我輩とも社中を結ひ日本国中
珎事ハ実なるまゝ書しるすハ御民
あのまゝ免ん世の人ゝに志らせんれ免んなり
されと高らひハあやしく免んまてこのハいきさ
まり海のをし史料録の手出板せしので
けのちうくハひらての家をとまそつゝ絶よ
まのとよみ忘きせんるしを社中一同の為
志しあん云ゝ

十七日朝神戸ニテ一珎事出来セリ神戸住居し
木挽与吉トヤ云菓人大ユフライ人名トヤ老に
斧ヲ以テ切リ付ケシヿハ乍以来木挽イカ
ホドニ働クトモ終ニ金子ヲ渡サダルガ故或ハ
怠リシ者ト見ユル然ルニ菓人ヨリ外ノ木挽備
ヒシニ余程働キシトカ云折フシ十七日朝
右木挽菓人ノ方ヘ行キケルユヘナリ歩コラ
シケル左缶坐ヲ立チ直ニ斧ヲ指系シテ縦
ヘ歩込之主テ頭上ヘ歩込ミシ左半死半生
ノ為辨従ルニ木挽缶坐ヨリ出走スト云ヿ
ニテ今ニ探索ノ内
許日元来式索人ハ平生兇悪為道ニシテ
本國ノ人スラ悪ム処ノ人ト云ヿ日本心
ノ氣貨ニテ堪ルヿ能ワザル所ヨリ茲場
ニ至リシ者手

不許翻刻

閏四月廿四日

内外新聞　第二

第七日目毎二出板

知新館

神戸新聞第五月廿三日
我壬月朔日

英國ス子ラー船名ノ着シテ支那國ニ在ル友人ヨリ左ノ事件ヲ告來レリ今日ハ英國女王ノ誕生日ナル二悲ムヘキ新聞ヲ得タリ上海地名ニアルオーストリヤ地名ノ殖民ドモ彼國ノ太子ノ殺害セラレシヲ聞ケリ此太子曾テ国民ノ移往ヲ見物ノ爲メ恐怖シナガラ上海江來リシ人ナリトソ又アイルランド地名ノ悪黨共至當ノ刑ヲ受ケショシ

今日ドーカラスニテ次ノ新聞ヲ得タリ
デンボルクニ在ル英国ノ太子ヲセド子ー
地名ノ近辺ナルコロンタルフト云フ所ニテ
殺害セントノ企アリシト
又政府ノ傳信機ニテ次ノ新軍ヲ得タリ尚
委シキ事ハ今晩ニ至テ知ラルベシ右ニ記
セシ英太子コロンタルフヲ消遥セシ折一
人ノ乞食鳥銃ヲ以テ太子ヲ發射セシニ此
玉背(セナ)ニ中リ脇骨(アバラボネ)ヲ経テ終ニ胃臓(イヅウ)ノ外ニ落

着ケリ赤タ此玉ヲ脱ク事能ハス患者甚タ
痛ミヲ覚フ然カシ医官ハ未(ダ)死生ヲ弁セズ
ト
タヒ七時半ノ報告ノ趣ニテハ英太子ノ痛ミ
未タ甚タシトイヘドモ漸治療ノ効アリシ
ト再ヒ第五月十二日(我四月十八日)附ノ報文ニテ
次ノ事件ヲ聞得タリ英太子ノ腹中ニアリ
シ銃玉格別ノ痛ミナクシテ脱出シ得タリ
後チ漸快氣シテ再ヒ公務ヲ司ルニ至レリト

佛軍艦ドブリークス船將ヨリ告文

先日船將ボルロックス名人船將ヨリ告文モ大坂川口ノ流勢漸相變シ且堺ニ於テ居留地ヲ撰ム儀ニ付而ハ彼是議論不穩次第モ有之依之先達而堺ノ港内ヲ側リシ通リ天保山ヨリ川口之船路ヲ能吟味シ此ヲ大坂兵庫在留ノ人々江心得サセ候ハヾ可然ト存候在留ノ人々此儀ヲ希望スルニ至ラシメンカ爲メ此一通ヲ大坂兵庫ノ役所ニ

指置ント存候此談事ニ就而ハ仮令一句ノ余モ無難ニシテ経過スト雖忽チ又危難ヲ生スルニ至ルヘキヲ人々江説得スヘキ事過日軍鑑トブリークス名船數日天保山ニ碇泊セシニ數多ノ日本船ノ此辺ニテ難ニ逢シヲ見タリ其時人民ノ溺レシヲ知レリ今日正九ツ時米国軍鑑オナイダ船名中帆柱ニゼオルジ人名ノ旗ヲ揚テ凡四分時ノアイダ大砲廿一發シテ英国女王ノ誕生日ヲ祝セ

リ英ノコンシユルル館ハ勿論米國コンシユル館其余居留地方々ヽ且港中碇泊ノ船ホモ尽ク祝旗ヲ揚タリ英國ノ政ヲ執ル人々ハ今日女王誕生日ニ就テ益國威ヲ輝ンコトヲ欲ルナルベシ

今朝英國軍鑑セルペント（船名）著シ第三月十三日附ノ本國ヨリノ書翰且本月廿一日附ノ横濱ヨリノ書翰ヲ持來レリ

横濱ヨリノ新冥ハ江戸ニ於テ強勢ナル會津取沙汰ノ外他事ナシトソ

先日或人ヨリ書面ヲ以テ小舟競（ヒリアイ）ノ儀ヲ企シト雖ライフル競（ヒリヤ）發ノ儀ヲ一紋同意セリ當地ノ穩カナラサルニ就而ハ我々一同常ニ砲器ヲ所持スルヲ管要ト存ス從其術ヲ知ラサレハ忽不用ニ附スベシ其修業方ニ就而ハタ刻冥暇ノ時ヲ得テ試（ヒラミ）ミナバ暫（シバラク）ニシテ得ラルベシ然ル上ハ大ナル快樂ノ一器トモナルベシ

當地水害甚シクシテ大雨ノ爲ニ墓地近傍ノ砂土ヲ流シ辺カ故ニ政府ニ於テ木石ノ類ヲ以テ段ヲ築キ居留地東方ニ有川ヲ堰セントノ企アル由ヲ或人ヨリ冐ケリ此儀ハ甚タ大切ノ事ニシテ速ニ是ヲ取行ンコトヲ願フ所ナリ若シ猶豫シテ雨降リノ時ニ至ラハ暴雨ノ爲ニ墓地ヲアバカレ近頃葬リシ死体ヲ衆人ニ濕スニ至ランカト甚タ心痛セリ

昨廿二日夕五時半頃ヨリ輕気球ヲ揚ケタリ當地ノ人々甚タ是ヲ驚キ感セリ然ルニ惜イカナ夜迫持チ堪ヘザリシヲ

入港物

此頃次第減セリ來ル九十月頃迄ハ格別盛ニ成ル間ジク毛織物類縮緬類ホヲ好ム大ニ減セリト云ベシ併シ可ナリニ賣レル物ハ黒サワイ。毛織ヘンシイ。トルコ赤木綿并木綿糸ナリ此木綿糸ハ好ム人モ有リ又價

モ上レリ蒐色木綿ハ此頃日本人ノ向ニハ
悪シケレトモ外國人ハ米国飛脚船コスタ
リカノ風冨ニテ三ドル余ノ價ニテ買入シ

出港物相庭

生糸　百斤ニ付價
奥州中品　四百三拾両ヨリ四百四十両迄
同　上品　五百両ヨリ五百廿両迄
飯田上品　六百両ヨリ六百十両迄
越前　五百両ヨリ五百廿両迄

第五月廿三日　我壬月朔日　迄ニ出港セシ高凡
二百箇斗

茶

横濱ニテ買込タル共上中下三等併セ凡四
万斤斗次第時候切迫セシ故外國人古茶ヲ
囲マントスルノ趣アリ
新茶ハ先ツ第六月中旬トノ見込也

並茶　百斤ニ付價
拾両ヨリ拾両二歩迄

中茶　拾七両ヨリ拾七両二歩迄
上茶　卅二両ヨリ卅三両迄
右下茶ハ當時大ニ直下リセリ新茶ノ極下
茶ハ當時賣物ニ有ト雖價高ケレハ未買入
人ナシ

生蠟

百斤ニ付十二両一歩ヨリ十二両三歩迄ノ
價ニテ凡二万斤斗買込タリ當時未タ買入
サル僅ノ生蠟アリ

冥東より北ヘ発　先月廿四日
廿三日緘徒押領し宇都宮城攻撃のため壬
生城より朝六ツ時六番隊并大砲三挺白砲
短筒二挺大山弥助指引にて豆腐し隊右江
指添發軍引續き大垣藩一中隊大砲一挺両
藩都合二百人にて進軍致し所四ツ時分宇
都宮城邊はて押詰る彼方緘兵防禦之ため
左し城下町江陸塹場築立大砲一門并小銃
隊にて防戰致し得共間なく攻落し城際ま

て押寄せ八ツ時頃内外ゟ砲戰嚴ゑ手負死
人別紙ゟ通りに百姓は勿論敵方にて千五
百人余も有之不容易捕捉勿論に屋敷迄に
至り絨兵裏道より操出し最初業落せし臺
場江乘入り壬生より返り路お絶別して
苦戰一同相働い右ゟ通り絨兵後をゑり切
りに付分隊位宛差出し戰爭いさしいれた
弾藥兵粮殆にお成り且運送ゟ路をお絶
陳てゑ不お活ゆ故一端繰引いたし兩藩共

引揚け町口ゟ臺場絨兵相固め居いを散々
お破りお傷居い折柄五番小隊長州一中
隊大垣も同断にて本街道より惹陳即刻仕
寄せ發砲お始む勿所因州藩一中隊にて壬
生城より応援として呂陳返路相開き夫よ
り一度押詰め絶にた七ツ半時分落城大勝利
にお成絨徒歩取百人余ゑ負二百人余とお
見へい得共未取り調出来兼い付逐々申越
い趣にて破い右につき多残戮死人數ゟ獎

ハツ
髮ホモ居候ハヽ御國許江ハ指出ハ儀何分ニ
ハ計ラ下ス方ニ我死ス墓所ニ義ヲ当城下に
報恩寺ヒ中寺ヘ取りきたる置ハ右形行申
上ハヽ上

五番隊

戦死 上田友輔
川崎兵十郎
河野伊兵衛

手負 美代藤之丞
大廻新八郎

六番隊

戦死 川北六左衛門
永山覚太郎
加納次左衛門
築地宗二郎
松井左兵衛
鵜木吉二郎

同隊手負

野澤七次
上原八郎

戦死 岩城平右衛門
西田要之丞
伊地知助五郎
岩切彦二郎
佐藤彦五郎

抗不龍右衛門
菱刈七之助

有川陽之助　松元清右衛門
横山勇　藏　安田仲右衛門
緣先喜之助　伊藤正二郎
平成彦右衛門　宇岩彦之丞
山下喜之助　日髙郷右衛門
伊集院小藤二　矢野八二郎
同隊深手
廻深五左衛門　川上彦八郎
鎌田喜之助

戦死　井上伊右衛門　足輕隊
手負　宇都宮岩太郎　戦死　内藤金二
本営手負
鳥津式部　有馬藤太
種子田左門
外僕一人

右ハ宇都宮報知如此ハ以
四月廿八日関東よりし手紙之写

前略江戸丈ハ賊徒鎮撫ニ相成候得共官軍
着前ニ処去リ候徳會之賊徒并ニ新撰組ト
唱ヘ候浪士江戸ヲ脱走シテ野州宇都宮并
ニ結城壬生近國所々ヲ押領致居イニ付宇
都宮應援トシテ彦根藩差越候処初メ流山
ト申所ニ浪士都合二百人余伏勢有之候ニ
依テ及戦候所賊徒近藤勇致降伏器械ホモ
取揚ケ勝ニ乗テ宇都宮マテ押寄セ居候処
賊徒ヨリ狭歩ニ出逢ヒ大ニ敗走致味方死

人数多有之候然ル所因州土州應援トシテ
向イ候所壬生ニテ賊ト相戦イシニ是モ同
ク狭歩ニ逢ヒ敗走ニテ弾薬ホモ賊手ニ取
ラレ死人モ数多御座候時ニ長州藩一小隊
大垣藩二十人余薩州五番小隊共一ツト成
應援トシテ出陣ス去ル廿日野州ノ内岩井
村ト申処ニテ賊兵七百人余ト出合相戦候
処官軍ハ勝歩取首三十余級大砲三挺小銃
数多騎馬三足右分取ニ仕候然ル処去ル

廿三日岩井村之殘徒五百人余千住ト申宿マテ押寄セルニ付佐戸原一小隊薩州一小隊早速繰出シル所降伏之ノ心ニテ敵セザルガ故ニ應接ニ及ル処弥降伏イタシ候ニ付所持ノ大小砲數多騎馬三疋鎗四十本斗リ取上ケ右ノ内二百人余ハ佐戸原預リニ相成外三百人余ハ備前藩冥係ニ相成申ル

薩藩六番一小隊大垣藩一小隊又々宇都宮江押寄ル

右戰ノ次第入江以來ヨリ今日迄ノ所置荒々侍殺知如此御座ル以上

月日　中村某

右同人ヨリ或友人ノ方江贈リシ書状ノ写ナリ近頃妄説流行ニ付此實正ノ手紙ヲ以テ浪人ノ疑惑ヲ情サン爲ノナリ他日諸君實正ノ事ヲ得玉ハゞ速カニ知新館マテ御報知ヲ希フ直チニ彫刻シテ萬民安堵ノ一助トセン

先ニ庄根軍門江降伏セシ板倉父子ヲ下總結城ノ城中ニ於テ斬首セシトノ風評也

過日秋田侯ヨリ羽州庄内江使者ヲ指向ケ討會ノ論ヲ立テシニ庄内ニ於ハ會ヲ討ツヘキユヘンナシト答フ依テ当時秋田侯ニ千三百人余ノ兵ヲ以テ庄内入口鳥海山ト云処迫押詰メラレシ夫レニヨツテ羽州亀田岩城左京太夫殿只本庄六郷兵庫頭殿共其勢合セテ三千人ヲ出張ストノ風評

大坂ノ新聞

○本月十七日薩刕鳳瑞丸ト云フ軍船ニテ大監察使トシテ三條大納言殿副トシテ萬里小路辨殿東下セラレシ陪從ニハ西郷吉之助林玖十郎小笠原唯ハ江藤新平等十リ守衛トシテ阿州之兵二百人ヲ御供ナリト云

○回幕府ヨリ亞国江注文ニナリシ鉄船ハ已ニ先頃横濱ニ着シタルヨシ今度三條殿御下向ノ上右船御取入レニ成筈ノヨシ

○大坂鎮臺醍醐大納言殿兵庫江御下向アリ
シ乃チ岩下佐次右衛門陪從セント云フ
○今度大坂運上処ニテ大坂ト横濱トノ間ヲ
通行スル飛脚船浪花丸ト云フヲ取立ラレタリ乗
組人ハ多分英人之由尤取締(シマリ)トシテ薩藩肥
後七左エ門ト云人乗組ヲ命ゼラレ來廿五
六日ニハ兵粮米千石余モ積デ江戸江下ル
由便船トシテ外國事務判事大隈八太郎并
海軍先鋒參謀島團右エ門ト力云人モ東下
スト云フ〻ナリ
右ノ飛脚船ヘ便船ヲ願フカ又ハ荷物ノ
運送ヲ願フ人有ラバ川口運上所カ或ハ
内平野町松屋町江戸屋平右エ門 津国屋重右エ門 両家ノ
者江申出セトノ事ナリ

告文

私儀大坂御運上所ノ傍ラニテ借馬屋ヲ始由良彌太二
ル二付各々様御用被仰下度尤馬具儀ハ和
洋共相備居候間御好ミニ應シ可申且馬賃

買モ仕候条此段布告仕候以上

知新館告文

此社中ニ於テハ珎事并ニ諸相庭物ホヲ記スノ本意也又館外ノ人タリ𪜈功能有事ヲ衆人ニ示サンカ或ハ書籍ホヲ彫刻セント欲セラル、片ハ此社中ヘ御示談アラバ速カニ發掉可致候者也

以上

慶應四年戊辰五月朔日

内外新聞 第三

第七日目毎ニ出板

知新館

今日ハ英國女王ノ誕生日ナリ本國ニ於テハ諸人如何ナル愉快(コヽロヨキ)ヲ盡シテ賀祝スルヤ例年期日ニハ上下一紗兒童(コドモ)ノ如ク滑稽(オド)ケテ之ヲ賀セリ又夕景ニ至レハ老幼ノ別ナク郊外(カヘノソト)ヘ出テ快樂(タノシミ)ヲ極ムルナルベシト彼是想像(オモヒヤル)セリ

第千八百卅七年女王即位ノ後ハ能ク民ノ心ヲ取リ能ク國政ニ心ヲ用ヒラレタリ或日女王自ラセキセコボルク及ヒゴサ地名ノ太子アルベルト人名ヲ賀トシテ以テ婚姻セントノ企ヲ布告セシキ國人太タ安堵ノ思ヒヲナシ大ニ是ヲ觀ベリ此婚ヲ結ヒシ後ハアルベルトノ盛名漸々四方ヘ雷鳴セリ

公自ラ諸術ニ達セルカ故ニ是ヲ國民ニ教示スルノ權ヲ取
レリ又窮民ヲ恵マントト欲シ第千八百五十年ニ自ニ費用
ヲ調シテ府中ニ在ル貧民救千ヲ任マシムルノ大室ヲ營メ
リ又千八百五十一年ノ博覧會ハ公ノ企ニ出タリ又千八百六
十二年ノ再度ノ博覧會ニハ公大ニ利益ヲ得タリ
女王ノ日記ヲ閲スルニ婚ヲ結ヒシ後ハ総テ幸福多カリシト
公在世中敢テ政事ノ一派ニモ係ラスト雖モ常ニ政府ニ
就テ女王ト國事ヲ謀レリ嗚呼公ノ死スル實ニ國家ノ為
メ惜ムヘキノ機ニシテ女王ニ於テモ大ナル不幸ニシテ愁
傷亦云ヘカラス後女王欝々トシテ不豫故ニ種々ノ流言

巷中ニ偏子シ然トイヘトモ近来ノ報告ニテ之ヲ見ルニ漸
ニ女王快気シ客殿ニ出テ客ヲ莚見スルノ由ヲ知リ大ニ歓
喜ノ思ヲナス是ニ基キテ萬支前日ニ復スルヿヲ願フ処
ナリ
爰ニ於テ女王ノ功德ヲ賛美スルニ公ヲ以テ是ヲ賞セハ張々
國王ノ任ニ當レリ又私ニ是ヲ賞セハ貞節ノ婦人ト云ヘシ
故賀アルベルトノ後嗣太子アルフレッドハ當年廿七才ナリ此公モ亦
公ノ如ク才能ヲ以テ天下ニ有名ナランヿヲ願フ処ナリ此公
第千八百六十三年ニデ子一ルカ國王ノ女アレキサンドラ名ヲ
娶レリ此女モ亦容貌美ニシテ生レ付秀才ナリ女王死去

ノ後ハ後嗣トナル可キノ賢女ナリト

方今太子アルフレットハガラテート云船ニテ日本并ニ支那ヘノ旅中ナル可シ余等(ワレラ)當港ニテ太子ニ遭遇(デアヒ)ス可キヲ恐ル

當時全權公使ハルリーパークス名人海軍副総督ヘンリーケツペルハ大坂ニ在留ナリ此時ニ當リテ軍艦尽々(コトゴ)ク當港ニ在ラス女王ノ誕生日ニ當リテ責メテ一隻(ソウ)ノ船アラハト思フ僅只女王ノ國民ニ慈悲アル難有ヲ想像スルナリ

神戸新聞 西洋第六月十日 我国四月十九日

昨夕(我十四月十九日)藝州矣小舟ニ乗リ外二艘ノ小舟疑フラクハ或ト共ニ大坂ヨリ来リ居留地ヲ距(ダツ)ル凡小大名ナラン五十間ノ処ニシテ行列ヲ整(トヽノ)ヘ米國コンシユル館ニデ来レリ

先日中夥シク當港所々ノ揚場ヘ運ヒ来レリ是ハ定メシボントヲ造営スルノ用ナルベシ

大坂ヨリ出帆シタル多クノ軍艦ハ未タ北方ヨリ皈ラサリキ 解曰洋人ヨリ官軍ヲ南方ト唱ヘ賊軍ヲ北方ト唱フ以下同之

先日疫ヲ受ケシフライナル者ハ次第ニ快気ノ由ニ

倅シ未タ傷ミハ強ク寒熱アルトナリ瘢ヲ付シ日本人ハ今ニ行衛知レズト雖モ捕人ノ者頻リニ探索スル赴ニテ犯人ノ母ト妻ハ既ニ囚レト成レリ（犯人ノ子ハ第一ニ出セリ）

横濱ヨリ左ノ新聞ヲ得タリ

江戸城ハ再ヒ北方ノ手ニ入リシト且又横濱新聞ニ委シク記シタリシ先般東下アリシ勅使某モ既ニ害セラル由又遠カラズシテ京都近傍ニ於テ再ヒ戰爭起ルベシ會兵ノ漸々ニ近ツクニ依テ豫メ備ヘヲセル趣ニテハ斯クアランヿヲ信用セリ

スチラー船名ナル小軍艦ハ第六月八日（我國四月十七日）大坂ヨリ来リ昨夕出帆セリ

本月六日ノ後ハ價ヲ知ルベキ報告ヲ得ズ入港ノ品物ハ價高キガ故ニ日本ノ商人嫌フテ買ハズ又出港モノハ生糸ト茶ノミ商ヒアリ

或報告ニ依テ次ノ事件ヲ聞得タリ

過日英太子アルフレッド人名ヲ殺害セント謀リシオフーレル名人ハ既ニ死刑ニ處セラレシト

アビッシニー國ノ征伐モ既ニ終リ當時英兵凱陣ノ途上ナリ然ルニ生捕千余ヲ引卒スルヿニ就キ憂動ヲ生セシ欲未タ帰國セズ

或ル報告ヨリ左ノ事件ヲ拔萃セリ

龍動（地名）第四月十五日バロック（人名）ノ話ノ趣ニテハアビシニー國王和義（ワボグ）ヲ乞ヒシトモ又再ヒ復讐ノ兵ヲ起ストノ信シガタキ風説アリ

第四月廿日ウオルス（國名）ノ英太子アルフレット夫婦共ニドフリン（地名）ニ到着アリシト

此前日太子ナイト（官名）ノ官ニ任セシト

第四月廿二日英國トオーストリヤト通商ノ條約ヲ取替セリ（カヘ）ヘニーン人ニ人捕ヘラレシト是疑フラクハボキンハム（地名）ノ宮室ヲ燒ンノ企ニ依テナルベシ

神戸病院

第一巻ヨ記セ〻如く病院のヨハ已ヨ趣旨を立られなり乃ち左の如し

病院購金錄

神戸　外國事務役所　判

病院ハ人命を保助し人種を蕃培し貧民の病て医薬と得さる者を救助をる道なれハ國家ヨ欠べ〻〻ぢる要務ナり今茲ヨ神戸ヨ於て官許を請け一院を設け貴賤の區別なく有病の者ハ来て治療を得さしめ貧民ヨ医薬を施し聊救助の一端とせんヨを欲を我

と志と同する者不管多少納金たゝんゝを希望
とする者なり

病院御用掛り

辰四月

森　龍玄
遠藤　謹助

前書ゝ通りなれハ若し有志の人あゝは神戸運上所を
或ハ大坂北江戸堀一丁目會所神戸外國事務掛り出張
所陸奥陽之助方を持参ス有とのこと
一醍醐大納言殿有馬へ御出途之事
一神戸警衛柳川侯の跡津山侯より警固なり

四月六日関東風聞

一徳川氏慶喜四月十日水戸へ発途の由にて供方左之通

梅澤孫三郎
遊撃隊
精銃隊

此度被仰渡候箇條の内城内住居の家臣廓外へ出
ずべき旨　御沙汰に付此度参謀へ御聞合相成候処
全く曲輪中而已にて半蔵御門より櫻田、馬場先、和
田倉内平川御門を去るべき旨なり其余御構ひ
無之由

一静寛院宮様天障院様へ増上寺へ御開きの支と好り
其余婦人方も右ハ準し申へきとの支なり
一軍器引渡の支ハ目録を以て督府へ御渡しと相成し
品々ハ其侭と成り有る由
一北陸道より進ミ〻官軍ハ四月二日浅草東本願寺へ
操込と成るゝ処寺内手狭なて滞留あるすして同
六日同処西福寺へ引移るる成りし趣なり
但し本願寺本陣ハ惣勢千二百人余と云
一肥前の兵隊ハ粮米塩味噌十分の由なり
一肥後の兵隊ハ四月三日白銀の邸へ着を惣勢凡五百
人程あり内三分の一ハ甲州路へ發行の趣且ツ役々の
名前左と記を

惣督　清水数馬　目附　財津源之丞
勘定奉行　浅井新九郎
勘定方頭取　才士弥一郎
勘定方　水谷才助　物書キ　大森吉之助
一藤堂家人数五百人余乃ち左と記を
惣師　藤堂仁右衛門　副師　藤堂隼人
謀師　藤堂監物　番頭者頭百九人
司令炮手　三十九人　乗馬　七疋

兵粮者頭　三百八十人　砲馬　四疋

一四月三日肥後勢八百人計り千住へ着内四百人計へ士分ゝて器械本迄銃兵ゝて兵勢壮んなり

とゝ云其外藝州二百人若州四百人と聞也

水戸より奥州若松迄先觸寫

人足二百二十人　馬九疋

右ハ水戸殿家来市川三左衛門佐藤図書朝比奈弥太郎等年来奸悪ノ所業有之今般依　朝命厳罰可申付候如多人数引連奥州會津筋へ脱走ノ赴相聞候ニ付右為追捕水戸殿人数千二百人余罷越候

条前書人馬無遅滞差出ー可申候以上

月　日　　水戸殿　目附方

常州徳田より

奥州若松迄驛々問屋中

一水戸家々来鈴木石見の儀ハ江戸市中ゝて酒賣ゝ成ゝて居ゝを官軍へ召捕ゝなり千住ゝゝ所ゝて獄門ゝ仰付ゝられゝ也

羽州の風聞

一當時秋田侯の領分ゝゝ庄内征討のゝゝゝ津軽。南部。仙臺米澤其外亀田。本庄等の藩九ノ九家の兵隊亀

集せりと聞ゆ

一仙臺并薩長の兵船ハ庄内の沖ゟ碇泊(テイハク)するとゝ云ふなことも此ゟ未ゝ詳らかゝらず

一四月廿五日秋田の軍勢庄内を征せんと最上(モカミ)川の岸ゟ出で兵隊を進む庄内ゟも之ゟを拒ん為謀師松平権十郎ゟ命じて同じく川岸へ出張して空く對陣せり秋田の謀師渋江内膳急ゟ一計を廻らし樹木ゟ旗を縛(ハリ)ゟ関(トキ)の声を發後軍の大勢加りたる如くゟ見せ勢をなして日の暮るを待ツ庄内勢ハ頓(ヒキ)ゟ兵を増し川端を守る支先(キ)ゟ倍を渋江

内膳敵の動静を察し其後ゟを襲ひ一挙して庄内を取らんと兵隊を分ち間(カン)道を回ゟ嶮難をわけて進ミ行路程遠く且ツ嶮(ケン)なるゞ故ゟ行軍意ゟ任せゞ半途ゟして暁ゟ至ゟ故庄内の陣ゟも其謀(ハカリ)ゴト)を知ゟく兵を割くゝ之れを迎へんとせしゟ渋江ゟ軍策図を外(ハヅ)せりと此策内膳ゞ計ゟ如く行ゟゝ庄内を取ゟ支掌を反ゟの易きゟあらしを遺憾の至ゟりと聞ゆ

一庄内の領地六万石計りの地ハ既ゟ縮(チヂ)めらるゝとゝ云ふ

又同領酒田と云ふる地ハ商人婦人等ゟて何方へ行しゟ

一人も居らぬと云フ

奥羽の戦争巷説區々にして人心騒擾せり

とも此新聞ハ秋田より告来る所にて他日其後の報を聞得なハ随て見たまへ〳〵浮説盲談に惑の旗況恤て爰に贅せ

北越の風聞

閏四月十一日薩州長州加州の監軍越後高田に至り不審の事件を詰問に及ひ〳〵如陳謝粗相立〳〵と云先達て高田より出し置る細作賊市川黨の為に生捕られ信州越中辺の事を賊より尋糺し故官軍追々軍を纏めこうと巻へ〳〵去らハ其隙ハ高田城を乗取るべしと賊軍支度の騒ぎ紛と彼の細作ハ縛られ遁て高田に帰るに敵の情態を報告せ高田藩こゝを此注進を得て米山峠の要害ハ賊に取られなハ取返し難しと軍議を決し同日夕を限りふ兵隊を操出せ薩長両藩の兵も越中岩海浦より乗船して越後今町に上陸し米山峠へ應援の手筈なりとそ

新潟と賊に取られてハ難義なりと薩長肥前等の軍鑑同所へ進發せきの令あるし由なり

因に曰今町ハ高田城の北辺に在りて越中富山より

内外新聞 第四

慶應四年戊辰五月八日

知新館

船路壱里と云又米山峠ハ越後頸城郡刈羽郡の境又
しゝ高田の東北長岡共板への半途よりて柏崎の
南方又當るとゝ〳〵
櫻雲主人曰近来外國人ヨリ種々ノ珎説新聞
ヲ神戸長崎横濱函館ノ聞ニ傳觸スルハ畢竟臨
時ニ器械貨物ヲ賣沽シテ此擧ニ乘シ大利ヲ
射ランヿヲ唱希シテ然ルナリ右ノ件々ノ説モ
信ズルニ足ラズト雖モ今茲ニ出セルハ尚此上ニモ妄
説狂言ヲ諸方ヨリ拾ヒ集メ取捨斟酌シテ讀者
ノ為メニ知見ヲ開カント欲ス識者幸ニ了解セヨ

神戸新聞ノ譯

○先頃米國帆前商船デスパッチ船船主ジョンス人名ト日本運上所船改ノ士官共トノ際ニ起リシ事件ニ付先月廿九日裁断アリシ訳ハ過日出版セシ新聞紙上ニ告知セリ

船改士官共免状無キ荷物ヲ取押ヘルタメニコンシュル外国商正ノ官名ヘ届ケズシテ彼ノデスパッチ船ヘ押テ行シコトハ米國ノ國旗ヘ對シ不敬ニ當ルト云フヲ米國コンシュルノ云立シニヨリ奉行[illegible]ノ命ヲ以テ右ノ士官共

ヲデスパッチ船へ差越タリ

右ノ如キ事件ハ西洋文明各國ニ於テハ甚ダ不法ノ事ニテ有ルトソ

然ルニ船主ジョンスヨリ兼テ申立シ同人配下ノ乗組水主等ノ損失償金トシテ洋銀三万枚ヲ請取ント望ミシ一ハ右裁判ノ時ニハ如何ノ所置ニ相ナリシヤ更ニ知レズ此償金儀ニ付テハ横濱裁判所ニ於テ如何所置アルベクヤ計リ難シトイヘ共至東地府ノ裁断所ニ帰リテ申立トイヘ又如何トモ成リ難キ支ナリ

○太政御一新ノ後ハ徳川御征討ノ事ニ付テハ種々ノ珍事多シ此事ハ度々我等カ會合ノ時ニ當ツテ一奇話トモナルベシ

○過月ヨリノ政事ハ總テ國中ヲ利スルノ外ハ他事ナク日本ヲシテ西東洋大東洋大西洋ノ世界中トコカ如シ各國ト推ヲ等ウスル事ノ存念ナリ且ツ國民ヲ開化セシメ能ク外國ノ事情ヲ知ラシメ我等英国人ノ初メテ日本ヘ来リシ時ヨリノ旧弊ヲ改革セントノ企

○過日ヨリ交際ノ一ニ至テハ我カ英國ニ深切ヲ尽ス

而已ナラズ且各國ニモ益信情ヲ以テ交レリ

○當月二日 我閏四月十一日 西洋第六月二日 ヘルマン船ノ到着ニヨツテ或ル新聞ヲ得タリ此事イヨく實ナラバ我々カ願ヒノ如ク成ルベシ

譯者云此ノ事件イマタ詳カナラズ後日的然ノ新聞ヲ得ルヿアラハ其子細ヲ告知スベシ

○先月中浪士二人市中ニ潜伏シ居ル由諸藩邸ヘ布告アリ此者共ハ旧幕府ニテ身柄ノ者ニテ有シカ今零落スルトイヘトモ萬一諸侯ヘ對シ遺恨ヲ晴スヿジキモノニモアラズ

因茲本月第一日 我三月十日 西洋第六月一日 居留地 外国人ヨリ神戸ヲサシテ云 入口毎ニ警固番所ヲ建テ無用ノ者ハ一切ニ入ルヿナラズ夫故両三日ハ遊參見物人等是迫ノ様ニ来ルヿヲ得ザリシ此警固ノ番所ヲ建シ事日本人ハ諸人ヲ猥リニ入レヌ為ナリト云ヘトモ我々英人ノ推考ニテハ右ノ浪士ヲ防ク為ニ設ケシモノナラン諸人ヲ猥リニ入レヌ為ナラハ番所毎一番人一個ツヽニテ十分ナルベシ

譯者按ズルニ此二人ノ浪士ト云ハ水戸脱走ノ内鈴木朝比奈等ヲ探索ノ布令ナルベシ外國人ハ先年品

川東漸寺ノ變事ナトヲ思ヒ出テ斯ク云ナラン

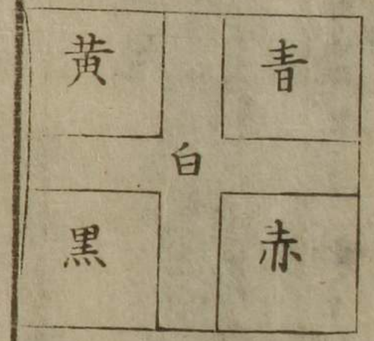
○本月當月ト云ヒシ第二日ノ事ニテ有シ士一人居留地ニ徘徊セシ処或外國人ニ突當リ直ニ腰刀ヲ拔掛タリ外國人モ短銃ピストルヲ出シ覘ヒシカバ士ハ逃去タリ外國人モ發ハッスニハ及バヌ跡ヲ追テ間近キ番所ニ至リ此次第ヲ報知セリ纔ニ二三間距離ノ處ニテ起リシ事ナレ𪜈番人共ハ一向知ラザリシ如此事出来セハ已後ハ西洋人短銃ヲ持タスシテ外出ハ決シテナラジ二三度モ皮様ノ士ヲ打留タラバ少シハ止ムモアラン乎

兵庫新聞

○アディリヤン名高社の蒸気船ラーサカ纔閏四月廿四日午前十一字西洋ノ時刻ハ我カ昼ノ四ツ半時ト同ジカラ来港せり此船ハ肥前侯鍋嶋より雇ひなりし士官兵卒凡五百人計乗組より迫く横濱へ出帆の由

大坂之新聞

○此度朝廷ニ於て浪花丸と云ふ河船出来せしを第二編ニ布告せり如江戸通行の便利とと為拵ふ河船



如図五色なり

日本金剛の人物すんばらぐ

かゝらぐるの事なり

○大坂生玉の社地ハ真言宗の寺十坊あり知五月二日急ぎ立退き彼 御付即日佛具手道具ホ引払ひ畳建具ハ其儘ニ捨置去つゝ由く此事件ハ今殷市一新く折柄高野山く倍倍朝命を彼是とヤ臣ハ依く彼宗徒い居くく右く通りニ

ケしくく耳也

○南都興福寺ハ是とい寺中三十坊あて二万石斗の寺領ケしくく山変一坊ニ十石ツとなりく郡合三百石と減せられくる由ニ

○閏四月下旬よりの霖雨ニて淀川筋殊く外の満水りて五月朔日ニハ当地より上京の私三四艘も震ひて其内一艘ハ私子寺人幸らビく助ヲ宗ハ尼く溺死せる由外の二艘ハ繋組し人ハ多分助くると耳也

○尼ケ崎より大坂の通私一艘ニも同様出水の為ニ震る

余経死人あること

洋行せし 外国へ行ハル 猶業師寅吉の風聞

○早竹寅吉事い昨丁卯年外国人に雇ひ家族大勢
と連て横濱と出帆し追て各国を廻り同年の暮頃に
亜国 サンフランスコ地名へ着し夫より他の国へ渡らんとする
時元方初め寅吉を雇ひ人を紹介主のごとく
雑費少からざる両三人と連て余い日本へ送り返さん
と寅吉言へるに元来本国に於て家族等に別離と
約を定さるに今更約と変ずるの義當惑せるに

此迷言に依て外に人も驚し居るが主て出帆
の時いろ仕さるや寅吉及び要用の人而已と私せ
余い其侭に残し置洋中へ出るより寅吉このことを
知り大に憤り刀を抜て彼の偽りし外国人を切害せんと
働くを見て君に私中騒動し他の乗組恐怖する故
私も迷惑の余りに寅吉及び元方の外国人ともに
或る島へ上陸せしめ私い遠く過ぎんと欲其後寅吉
の生死を知る能ず他日を待て消息を得い者告ぐ
○肥前長崎迄そキリシタンの宗門を帰依せし者共九

二子人家石捕られ諸藩へ分配して御預ケとなる由
五月朔日の頃大坂と引きとの事くさくさ又奥事こ
乾く外国より扱ひを入れらるる説あり

京都く新聞

○京都裁判所事　京都府とれ改めこれ成

京都府　府知事　長谷宰相
同　判事　青山小三郎
同　判事　松田正人

○丹及山家谷大招免京師変いきりつくしの山家洛西
西院村より行く原鋪を得られたる
○摂及地黄の外を雑穀日向守も柳生藩後小藩の面と
原変を変遷らるの支度あり
○閏月下旬よりの大雨にて桂川出水所く橋落流下
さう淀伏見の町にも押水来りて舟を以て往来せり
○霖雨のため麦菜種等泥水に浸り蕃く芽を吹
人々ども彼之農人等大に憂悲せり
又島尾姉小路の人家裏町の地形低きゆえ故に地境こと
に間斗り石垣を築上ケ三条より小路島尾表番所の
地境を低あるゆえ家毎に門ケ上げ

去年を遠わたり〜如此節の大雨にて石垣崩れ古家へ忽
ち倒れ裏町の地尾よりー小家を押潰せり幸ひく
して怪傷の人を無りけるとぞ人々の家作堅固なること
を付づき事なり依て因て布告するなり

○去二月廿日大和大納言世人縄を垂るの迄て外国人参
朝の時英人に對ー双傷に及びー林田貞賢に遺骸を
洛東宮寺の面なる仏産霊寺とゆる寺に埋葬あり
就最有志の者ハ此寺に玉を死を洪ど小を向る事を
ーが此節に至り日本の東なる美山に改葬するなり

和蘭表戦争の新聞

○閏四月三日の暁下総玉中山八幡辺に集せー紙吳ハ
藤堂後和須幸の二手ー畠械と後ー帰陣をづき旨と
述ぶる拙生共も奥者もふ知るのちんばふ辺に戦争ても成就
と存候の人数より流和蕃の宿陣所両国回向院へ報知あり
依之同所より総督府達ー密直に先陣百余人を繰出
し秋徳に名陣を後陣も続くー出張して是又百人余て
行徳川と隔て新野村に陣を張万一敵軍船渡と思て
江戸表へ引入るるもいかんと迎辺の村々へ探索ーもあり

を成し兵粮を含しなり此時に當りて砲声遥に聞こえて既に先手戦争に及ぶ流義の兵隊五百程村を發し行徳より薩及勢と一手になりて八幡中山さして進軍せり薩兵い中山迄より引引き上て村を吟味して家を進む流義の兵隊ハ未く中刻松戸宿に着陣せしとも彼古原の兵隊流義の先手ハ三軍戦争終りて俗三手一同に松戸宿陣をとる

此日先手の戦争ハ小迫合なり流義の先手小勢にて押行し処彼兵ら突出し敵合計十名内外その

砲戦なるを故流兵い野戦砲二丈打出し火門を乱打二門とも打抜き小筒をもつて敵味方とも撤兵と成て迫合なり流義の先手の討死流士壱人小者二人負九人彼兵い彼倉街道大和田宿より方山へ引退さるとも

此日官軍の討死ハ五人負ハ未だ慥成を聞

聖四日薩及勢彼土原勢小人数にて水更津の方へ兵を出す流義勢も義接の命を受る故に続て進軍せざる時い先陣の二番を打殺しなる程に流義藩の恥辱人に塞ぐべくと兵衆大に憤激せらるべき中実

御守衛の命を蒙るる故猥りに進み難しと隊長に
ことを諭し一ト先兵隊と引纏め中ゝ刻こゝに引揚
へ引揚甚だ迫進に及び同所に帰陣ごーとの
命を受くる後の御下知待居るしころや
野戸常次郎通ふ私以の影を写て下給ひ
同四月四日の日付にて京都小松屋来状に写
八幡宿出張ゝ官軍稲田藩より河原町
後藤にて有之候ゝ外百人斗り二ケ所に私隊
集りは東軍に合流ゝ薩長武州藩ゝ
イヤとも外ゝ破裂ゝ
より八幡陣中切迫市川に追撃ゝ
方ゝ夫と一たゝに大合戦ゝ
て散ゝ逃去り南風大烈
焼失ゝの大砲四挺小筒数十挺
外ゝ又此三日私より
百人程三隊行進ゝ私
外ゝ内海と私て
此金侯の人数東ゝ加勢
四日ゝ出張ゝ
又ゝの夏ゝ

ところより船橋西の方へ出て双方分捷に討こして東軍大勝
利大小砲数十挺鏃ホとに致し云ふ事ともに於て此所ニも
陣ヲ堂塔ニ構へ中ニも二番手ハ六十余人ニテ西橋ハ出張ニ仕一里も
手前ニ於て陣ニ有る間又合ふ所振子ニ於て皆東軍
殺亦ニテ取られ北を放ちて船ニ乗るも西海端をも於て陣ハ逃ル東軍
ニ至り市川駅ニ方へ逃去ると余ふりかり又土州勢と八幡
向のヲ、村とやら三日夜出張致居り夫よ今四日西橋ニ攻
寄り中ニも市川ニ方も出兵家ハ人数を所て放出張し
振子行徳ヲ皆船橋駅ハ焼残ル町法ニ在り東軍宮ノ山より

取ニ三千十人幕と張居て大軍の行方ニ気ちかふりて先ヅ一切
引上ケと成今四日八九百人串行徳町通り明日江戸ニ出張攻撃
ともかくして皆く居方ハ猟兵ニ至る也世又六人泊り是も一同
ころも致方無しニ至る事でも仕掛られて大変と大ひに死
仕居て其ニ於て陣ハ荷物焼討ケ及建て入捕呼家
二三於ても板橋風大烈強中にて市川海邦分船橋四ツ
ケ船分黒烟り立る里余り立て面火と立り市川ハ鴻ノ台ニ方上
立る黒烟りを中ハ大小砲の音頻りとドウくと響き恐ろしく
数町川手前ハ西面ニ焼出て向笠井ニハ安軍陣場の落武者

一本ノ下
平面ナルヘシ

こゝかしこに迯て籠るを招行歟中火を放て焼ければ三日燃て煙
こゝかしこ一揆ども和て籠が風下に雨降先々是を迯て一安心
後和又て後安宅こゝ泊りこゝ陣こゝ泊ども京
を今日はごろ〳〵森さこの斗り扨こゝ武者をうたれあれ多
常なり又吐噶八ヶ所迄松戸駅も焼上り是を合戦なりトヤ
ゆ是へ来住成祝おろり戸安軍勢江戸、繰出一方中を
てもイヤガリ進こゝ戸と名を和没人こゝ働こゝ敵こゝ切
揮振扨又こゝ方敵別来れ来の敵こゝ揮こゝ敵人こゝ出こゝ

右同断又日記こゝ字

又日四ヶ所長ヶ浜家ヶ人数百人家ヶ九で霹風半りて船揚こゝ方、
ヶ繰出こゝ成ヶ船ヶこゝ和ヶ吐皆船揚表ヶ沼原水戸へ来ざ繰
出こゝ戸ヶ〇四日是七ヶ所ヶ船来家ヶ人数上下四千人家ヶ方江
泊こゝ成ヶ一統こゝ陣こゝ敵こゝ和こゝ行ヶ中
ヶ深こ居ヶ日数九ヶ所こゝ舶四こゝ舶こゝ敵こゝ敵こゝ
扨波立こゝ亜ヶ外ヶ人こゝ陣系和侯こゝ敵こゝ敵こゝ
行こゝ止宿こゝ陣こゝ成こゝ是ヶ所ヶ荷れ成ヶ所ヶ今こゝ
評曰前二度の書状ハ日又日と如ヶ中こゝ第一同こゝ送こゝ
書ヶ毎こゝ官ヶ大政の招こゝ徳こゝ事情不雑ヶ扨ヶ家の

結び関を而已なるべし今伴東方古民徳川氏二百年の治澤と世
じて国幕尤祖偏倚の情態より出る書面数間一二の実を
有り多くは信ぜざるべかざるを如何加之作金陵の東字加芳世孫
のみ或は又紙方偽刻の流言もあるべし予号今稼て紀をりの人
関東人情指考の一つもなれらしと宜く読者幸に充もる弁すべし

江戸表閏四月七日出る書抜中抜出

一茶文に通じ間も市川行徳八幡辺に戦争連日励
安江戸より僅に四又里位に里程有遂に炮声お雷キ夜
分に小船の方角天色赤くして兵火の金に兵火
村に数に焼失致しれるる実に驚く安を拾に
一当地治人凡千五百人程に組に成大将八福安八郎右
ゟ若る右組に間に追に外分深浪伴に者寄に集る
二千人程にも成る由関東地に深浪兵勢殊に外
ゟ成は上に八何て御軍中に容易に鎮静ともに
何も恐入る外に
一江戸表の反軍日に下結地に繰出に出張に成に下結
丑人民に対る江戸に逃来に城に市中混雑人気殊に外
騒安に成恐入る

一上野宮様当十九日ニ農輿ニて京師へ御帰ニ成
ル　御ふれ御ふれ百姓始メ江戸下谷町人共一同ニ帰
京ス　止ノ歎願書出ス日ニ成混雑ス　当時當
御城ハ江戸人ニ上日又　宮様御ふれ
大変ニて江戸中騒ク変事ニ成ル
一張紙或ハ暗殺の音ヲ聞ク毎日諸方ニ
人ハ共混雑の中ニて七月ニ成ル市中町人共
立ル出ル　流言蜚語等の事
一水戸藩ハ本石見共同水戸城下ニ集ル藩論決ス

外ニ人ニ紙ニ書ク人ハ市中ニ居ル
人ハ先日城後ニ従ヒ帰ル　ほの国
ニ居ル　ほの国
論者曰先日ハ本石見江戸市中潜伏ス居ル
官家ハ捕ヘ千住駅ニ於テ梟首ス
風雲ヲ待ツ而て今ハ右ハ風雲ヲ待ツ
前日の風雲ハ霊ナリ或ハ今日の風聞
其日の風雲信ス　何ぞ信ハ霊いまだ其
確説ヲ得ズ

又一通江戸表ヨリ十日出シ中扶書

一上野宮様ヲ事ニ来ル十九日ニ岩倉卿幾輿ヲ為系ル 御出
シ被遊御祭ヲ百姓ヲ止メシ歎願ニ義ヲ立テ十人ヲ
面ヲ一同執ヲ上ル出ル上聖ヲ五ヶ所及ル江戸中
町方ヲ根歎願ヲ書沢山出ル由今日八下町一同
ヲ根歎願ヲ出ル由ヲ付ヲ延引ニ成ル
ヲ京都ヲ留ヲ長役岩井左馬ヲ出ル
ヲ後京ヲ近ヲ故ヲ由ヲ
一沼津金津軍艦ヲ白ヲ城借ヲ交渉ヲ

ヲ去ル六日ヲ同ヲ早三挺江戸ヲ来ヲ
ヲ甲府ヲ沼津ヲ来ヲ支ヲ江戸ヲ来ヲ早打ヲ
ヲ猶ヲ知ヲ

一此頃ヲ駿ヲ中ヲ会津ヲ小田原、無合法判ヲ上箱根所
関所ヲ受ヲ成ル性ヲ来絶切ヲ
ヲ通ヲ大久保家ヲ去ル六日ヲ成ル中ヲ
一去ル七日旧幕旗本ヲ沼津ヲ税ヲ合セヲ来ル
一同日油屋町ヲ張紙ヲ通
ヲ来ル十九日ヲ戸ヲ時ヲ攻ル者

こゝに書を
論者曰上野宮の御後系を立て止り新出の人の
情態或ハ実なるなるべし」沼津軍艦四隻城借り清と
及び小田原、浜判箱根仕来絶切と今〻虚説なるべ
雪紙とのべども此不條理の極動ハ殺さべうべ形義
信説なるべ東海樞要の郷道三日を出でゝして確
報京師に達とゞ〻に金津来る字艦を持しと
ふ旧幕府分もこれと借り文をるふ迄日数
中ハ大に騒静なり旧幕府何ぞ此勢あるべ

池掛町予等来る町名も少及ぶ或ハ強字を張
紙〻文何そ不来なる蓋〻実なるべ拾て深暴
者の示唆国より要〻沼津に下
の救説行のまも憑虚の説安を信るべ
閏四月廿七日就後高田迄出て戦争あり
予等当月又日其新宅を得る
○旧幕府説之人其家濱浜綾波地名に下る屯集強
左り官軍をお拒ミ付閏四月廿六日夜半る長州参
孫来加州出張監軍に明廿七日暁人数繰出方示談

あり別廿七日早天加州勢こそ高田勢と引縄ひかかい
隊長水上隊砲隊隊長与畠隊隊長枚幸隊卍小隊
鎌波より出ずして千斗〻〻敵中で繰出し砲撃を及ぶ
浪人方も奮戦双方発砲激烈後程加及勢を
自薩出勢が鎌波を焼打波〻敵四丈丁斗引退き
官軍勢遂に追撃を頻りに及攻撃を度敵
の山を続き松原の切和に潜伏し大小砲打立ひ付加勢
姫宮隊打進て彼の山の下タ小高き所積藁を揚り
小流激戦打立ひ付浮浪輩右松原の切を和と繰〻

ふ引打去りて彼の山を離れ〻彼を加州姫輩〻隊
吹立追〻山上に進〻水上隊〻浪人方に
打出し大砲を打立て進〻薩長及び高田勢も和〻
進撃し〻官軍勝利乗〻繰出〻て敵
打〻入〻賊首級数多有れと未だ慢〻官軍も
多負傷多くれど何まも格別手負も無〻よ〻
敵加州兵の者弱の世評もわるし〻今殺初め〻戦争
に兵士の進退聚散各其列を乱〻大勝利の天運
を陽に奏〻人員を整〻り其彼の一番乗後の汚名と

雪ぐるまを送りとゝのふ

猶内外の新聞を紀さんと欲とれを生板の終日のまゝ第五

之亦若もとゞ〳〵

同二日先發行せし新聞の第一を見るに粗酒のことのゆり

絶板してもよかるべし〳〵拙と謬誤ある由なり是不得麁を逐て

獺師山をとる見とゝる緣を等しく新聞の紙字なる所以と

知るべきの緣顛の海なり粗酒を厭ハとゝ紙新聞の正論と

失ふるの所の向後とゝも粗酒杜撰の事件なきこの能はざる

所〳〵是等の微〳〵たる事ハ知識の尤めざる所なるべし故ふ

集者も又敢て之を止めず

不許翻刻

慶應四年戊辰五月十五日

内外新聞 第五

知新館

内外新聞第五

神戸新聞譯　第六月廿日　我五月四日

○方今ニ至リテハ當地ニ居留スル人民稍蕃殖セリ然ルニ余等甚ダ病ル如ハ當地ノ路傍ニ并溝中等諸所ニ不潔ノ物塵芥多ク此為ニ頃日流行セルコレラ病追々傳染シテ速カニ減スヽジク就テハ早速政府ニ再願シテ不潔ノ物ヲ取除カンヿヲ欲ス

土地ノ氣候ニ馴レザレバ万事配意スヘシ先日ヨ

リ雇ヒシ不浄物掃除ノ番人ハ甚懶惰ニシテカヲ用ヒズ尚精出スベキヲ諭サント欲ス堀切ニ埋レ辺ミタル塵芥及ヒ屑石土砂等ヲ掃除シ是ヲ海辺ニ置ザル様ニ若此類湿氣ト暑気ト混シナバ更ニ悪臭ヲ生ジ大暑ノ時分人身疾疫ノ害ヲ為サン

大坂ヨリノ報告

○當方居留地ハ政府ノ監察出張シテ多勢ノ雇夫ヲ指揮シ大ニカヲ尽セリ此趣ニテハ遠カラズ成就スベシ

○外國人市中雑居ノ免許アリシ上ハ政府ニ於テ高價ニテ地所ヲ買上ベカラザルヿヲ察セリ

○過シ二ケ月ノ頃銅銭二倍ニ騰貴セリ以前十二文久銭ヲ以テ天保一文ニ換シニ今六文ヲ以テ一文ニ替ユル先年来多分ノ銅銭ヲ支那ニ運送セシモ爰ニ於テ止ルベシ

賣買物相場　入港物

○諸品相場ハ先日ヨリ変リナシ頃日連日ノ

雨天ニテ日本商人品物引取等ニ大ニ困リ入リ居レリ當節賣品ハ黒呉呂并ニ短キライフル銃ノ外注文更ニナシ

出港物

チタ十ムレンソダイノ生糸少々先日ノ價ヲ以テ買入レシ當時賣品甚ダ少ク殊ニ望ミニ應ゼズ次第ニ新糸ノ時節ニ至リ今廿日余ヲ過ギナバ新糸入来ルベシト余等頻ニ此ヲ待テリ

奥州百斤ニ付五百廿両ヨリ五百卅五両マテ

ソダイ　四百五十両ヨリ四百七十両マテ

越前　四百十両ヨリ四百廿五両マテ

茶モ遠カラズ新茶入来ルベシ當時ノ新茶ハ古葉ヲ交ヘ又ハ見カケ見苦シケレバ甚ダ此ヲ嫌ヘリ此見カケノ悪シキユヘンハ急速ニ仕出シセントシテ製法行届カザルガ故ナリ

前日買込タル新茶ノ價ハ甚ダ不相應ナレバ今爰ニ茶ノ價ヲ記サズ

○薩長ノ兵隊新潟エ着ノ由ヲ聞リ此ヿ實ニシ

テ且勝利ヲ得ルニ至ラバ外國人ヲシテ彼地ニ移任スルコトヲ得ベシ既ニ彼地居留場ノ用意セラレシ由ヲ聞リ此後ヨキ報告ヲ得バ或商人ヨ伴テ速ニ彼所ニ赴クベシ

○第六月廿四日 我五月五日 今朝テスパッチ着ニ依テ本月十七日 我閏四月ノ新聞紙ヲ得テ左ノ事件ヲ抜萃セリ 昨日数多ノ兵隊ヲ乗セテカヾノカミ船名江戸ヨリ来リ港中ニ碇泊シ南方ニ運送スル人数并

糧料等ヲ積込タリ米國全權公使ハ同國イロクオイス船名ノ船將ト一致シテ小舟ヲ以テ水師ヲ送レリ

○三條大納言殿ハ先ニ徳川家トノ間ニ起リタル大難事件ヲ裁断スルノ全權ヲ蒙ラレ京師ヨリ発シ水曜日江戸ニ着セラレシ

○第六月廿五日 我五月六日 米國飛脚船コスタリカ船名横濱ヨリ長崎上海エソ便ニ當月廿日 我五月十一日 當港ニ着一昼夜碇泊スベシ旅人并荷物等

有ラバ神戸スミヤヘベークル社中ヘデ申来ルベシ

○長サ二十六尺ノ小舟一隻帆柁共日覆等備リタルモノヲ賣拂ンコトヲ欲ス若買ント欲セバ神戸ジーテカルロル社中ヘデ申來ルベシ

以上

四月下旬越後より信州路を經て京師へ來る張紙の物語

○脱走の歩兵多飯山の城下に來り隊長古屋佐久左衛門より城門に言送りしるい樂是より松代表に立越度い故此昔當藩より松代に應接又及びもいるとの儀なり依て飯山藩より鈴木素士を松代に遣し交渉に及ぶ松代藩ふ於ては説之人共を城下ふ在留せしめらるる事より大議論と成るふ

鈴木亦を対気なる由を沢弟を飯山より吉岳、
返答あるべしとても今一度使判いつ〳〵呉度く旨
織方強く申さるゝ使者を松代に送つるべし
松代藩より返答なるも不及使者残引止メ至直ち
軍勢を繰出し飯山に発行を計事飯山へ
えけるべ屯集の歩兵を飯山藩と合し
千曲川を隔て防戦に及ぶ然るに松代勢より
織隊に打掛る流砲に怪我人いれども飯山勢に
打出を防ぐ人と換る相ふたゝび又飯山の兵隊合

松代勢に発砲なる時も同様なり爰に於て織兵号
不審と出し潜に飯山の陣を窺せしに果して
双方より空砲にて打合居ると依之織軍初めて繰
計に沿入るを暁て大に怒り忽ち飯山の兵隊に
砲撃し戦争に及ぶとい〳〵ども双方より打立られ
終に敗北し飯山城下真宗寺と云寺院に逃込
こゝ松代勢引続き押寄せ大砲を打込さまざま
此所も遂に彩く城下の民家へ火を放ち焼尽
きて乱妨狼藉を働きて越後路に敗走を松代飯山

兵を合して追討し大に勝利を収くる由
併に因幡前松代より終本系を討ち悉も
再度の彼者を止めしも西藩内侵の残計
して城を欺きたりしてのうしとぞ
右の歩兵多へ初め高田へ帰り荒井村と云所に
集せり内に数隊又百人〳〵内百三四十人飯山来
援又追〳〵荒井村より飯山へ援の為に繰出し
一時に敵軍して再び荒井村に進集せしも度
高田藩及ひ信州勢に打立る長岡藩長特称

打撃を散乱して退きたり隊長吉屋統久左衛
へ落行中彼源〳〵を云者ハ討死し由

上州権田表年定の況

○旧幕府旗本より外国奉行たりしを云小栗
上野介へ上州松井田駅より三里ばかりなる権田と云
る僻地に引籠り居るの処に猛志人屯集
せる由其聞へあるこ国四月上旬高崎藩安中藩
外一藩不詳多に対する命を蒙り彼地へ発向し検判
及ひ上野介等伏器械を官軍に請五事故

すく平定せりとぞ

又説に閏四月七日高崎安中二藩より人数を出

向上野に及び嫡子亦一郎を擒錮して同九日

岩倉殿の御陣武器忍に送せりと

二説大同小異何れも実なるを知る能はず

両説を記して世人の辨別を待つ

京都新軍

○迫日江州大津裁判所を大津勧定所と改ら

れしより義兵藩系同所を左勤なりと

○防長岩国吉川侯と靖藩の列に加はらんと願ふ

武徳を紋章を記して迫く農兵を出

○五月十日薩兵の兵隊東方に繰出せり

月下旬に国元より糾千余人の新手上京の

風聞あり

○同九日夕七ツ時比四条通祇園町にて馬上

の士に斬りかけたる狼藉者あり拙者近来

る馬なる故打外し馬の尻を切付しに彼の

馬驚あげたる時に狼藉者を蹴倒しまた

まことうかがはしなりや其末由を聞うべ
他日発表の新軍記をべし
○若州小浜志州鳥羽の二藩は前より互て御ふ
審の廉御免なりしと云
○閏四月下旬議定職の諸侯に官位宣下ありて
作出度越前侯及ヒ肥前侯すいに辞退被成
ひ由幼尤く書付ハ越前侯より或方様に其辞
退れ被セ御使者のに上る
○今般議定職作付ハ又従二位権中納言
宣下ありて作官位ハ儀ハ辞退れ被成
ハ 聞召れ被ハ以使者ハ仰ハ

五月三日

越前宰相使者　山野澤二

○京師下立賣通妙心寺門前何系の家に
天気快晴の時とゝ雨降洗米大豆等のその
何ようとする知らを降り来る由当地沙汰
もなく怪異絶増是亦家内に熨斗絶今沙

土器を拵解菓子燭紙墨筆すみ精魚の食
物菓等の緒品陳列を来る年今より止見ハ金
く其家よりある弦守稲荷の奇瑞なりとて此頃
まるこく社を乗建して尚霊験あるゆと冥
論者曰昨年冬京坂及び諸国より神符を
降し金銭諸物を降し精怪異あり
右の怪説も同日の談にして敢て奇とするに
足らず又信ずべきもあらざるべし然り
とすれども童幼婦女子として恐るるものの

見聞を惑はしめ人狐狸の為に
欺かるるの患あるを深く人と愛に紙を
江戸町人共歌歌書の写
作恐に書付を歌歌は
一私共義下賤に兎を以恐をふ顔を歌歌
メ儀ハ是ハ幸恐入ク人共是上敬事来業
平に却忍澤に浴しいも全く
天朝并徳川家の
こに市場合下賤に目に更に事あれ義に

各は直ち人を追ひ所奉行所より市中に
觸出さるべき書付の趣きを以て恐東叡
山に謹慎罪を請ひ諸人の苦
を救ひ給ふ御慈悲思召し程如何とも
難き事恐入涙流し歎き悲ル事
追ッ 市先鋒は御繰人お成ひに付市中
一同騒敵を高を恐編て立人何も
慶大に其悲を訴ふ者共を安
心仕り様に慷慨し市井騒成下逗人
拾一同事形上ひ

四月又日

連名
九十四人

右ハ市先鋒に宿所に差出人歎願書を
豹巴巣鴨 小石川 音羽 大塚 谷中 本郷
筍坂辺に町人数代加判に書面なり
越後鯨波戦争第一の報告ハ既に
第四編に載せ今又第二の報告
を得たり左の如し

○閏四月廿七日絲波の絨徒共加州藩砂長砂
高田勢は押詰られ敗走す則官軍透さず
追打進み如右絨徒共城山砂の松原に屯集
し深浪紫と一勢となり半途より引返し
大に勢を張り官軍を拒き大小砲打出し敢
官軍一同攻撃猛烈なる戦争なれ共内敵
の奇計に付味方打ト一同高喜れ喰い牙
鋒を弛せし間道に廻し人数を有る者
数ヶと打方止ノ濱より引揚遂に敗
敵よりい尚頻りに敗走し及敗敵の策なる
と雖も直に取向激戦せり就中加砂の大砲い
絨軍の応要めなる所に打出して多分の死傷
もあり絨勢弱りに付砲丈も引遠ておく当
追撃て殺さるなる参謀折田平内が言ふ
日暮ること未だ殊に手負を担ぎ今日い休兵て後
と指図に及へり加州後陣二小隊繰出同所に
遠メ光輝名本陣青海村に引揚い敵い旧
幕歩兵組及び素名猟番凡千人斗もあり中

柏崎に迫り落葉りは体を為さず戦争城迫
死傷多しと雖も要害を援り弾薬も多し
又〻義安打立官軍も負多く為す
〻。彰撓まず猛烈を極め加州先鋒の陽
長物以高畠猪吉夫洗登を進め組統士を励
し兎右の肩を打貫き負を又も引揚
を始終組ると指探し金く勝利を得る大
地分隊司令指揮一〻進も格別を働し云
道に進し加州勢物以杉本美和助組統

手の内下八九人歩を覗打〻何も歩
一人ツ対五人中を外
〻〻も変細分り兼ん由

社中より布告二編

○神戸新聞譯中に曰く如くコレラ病流行せんとする由去月こは来の急候に彼の地を
ふ限伝染流行すなど紀を世人早く
獲保全あるべし甚大概を左に紀す
蕎菜を家内にて蓄べし 但し猴菜に用ゆる蕎麦蕎菜と云て求むべし

又 杜仲子 小豆の屑を煮もちゐ
右三味共に煎じ具衣類を含む雨湿の気を
拂ふ 服薬こんの
大紫胡湯 人参の生質にして茅朔 石膏 名
升麻葛根湯 加減あるべし
右の類を用ひて飛門にある雨湿の気を拂ひ
一絶食大酒消和あるべき物肉食ホ用控るべ
一元を労し元気を損ずる時は
右い病をひきうる用ひあり薬い医療に同べきく

三蟲油 金瘡の妙薬
一雞卵 皮を去る 一蛞蚓 其まま
一蝸牛 殼を去る
右一種宛別々搗たぐらし 銅器の中に
猪油の如く丈武火にかけ膏をとり
濾して後三種を合して器に入れ貯ふ
度し用ゆる時は其まま疵に流し上を
木綿にて醍と光墨とを和め何程の深疵
なりとも奇妙に治する由世の好士閑暇の時

製し紙を世に経験あるんを希ふ

膏を取図

汁の管の末中、両方
より結び火にかけるべし

管をかけ
生牛をもよし

小により高く上るべし

上方をよき位に上るべし

器へとるべ

古金元巻小割書

一朱金	百両代	二百二十七両一分三朱
	一両代	二支一分ト永二十四文三七五
	一朱代	二朱ト永十七文一四八四三七五
二朱金	百両代	二百六十支三朱
	一両代	二支二分一朱ト永三十九文三七五
	二朱代	一分一朱ト永十二文七三四三七五
保字金 小割共	百両代	三百九十六支二分一朱
	一両代	三支三分三朱ト永九八文一二五
	一分代	三分三朱ト永五十三文九〇六二五

安政
二分判　百両代百六十一ヶ三朱
一両代一ヶ二分一朱ト永四十九文三七五
二分代三分ト永五十五文九三七五

正字金　百両代三百十七ヶ一分
一両代三ヶ二朱ト永四十七文五
一分代三分ト永四十三文一二五

右の永銭と時の弥ね増をかゝて永何文の代弥何百何十何文とゝゝを知るなり

内外新聞第六

神戸新聞譯　第六月廿五日　我五月六日

○今度神戸ニ於テ病院御取建ニ相成候上ハ居留ノ外國人モ亦差支ナク療養ヲ許スベキ旨ヲ役人ヨリ通セリ

○病院御取建地所ハ外國人墓所ノ東方ニ當リテ其四方ニ垣ヲ圍ルベシ尚委細ハ追々示スベシ

○米國軍艦ヒスカタクユー船名水師提督ロアン人名乗組當月十九日長崎ニ碇泊シテ不日横濱エ赴クベキ由也

○此頃墓所邊ヲ徘徊セシニ當春大坂港口ニテ米國軍艦ハルトホルド船乗組溺死セシ數名ノ墳墓奇麗ニ出来セシヲ見タリ

商用告知

○入港品物先日ヨリ惣テ相カハラズ日本商人ハ當時大坂ニ居リ先日ヨリノ霖雨ニテ運送物等コレナシ

○金巾價ハ横濱ニ於テハ相カハラズ相場書先日ノ如シ

○武器ハ當時北方追々鎮静ニ成シ故注文類モ沙汰ナシ

○生糸大約二千五百斤丈ケ先日ノ價ヨリハ少々下直ニテ買込ノ約定セリ併當港持込ノ品ハ霖雨ニ至テ僅ナリ又未ダ買手無之僅ノ品物アリ

○茶ハ大坂ニテ新茶ヲ貯ルノ風聞アリ

○先日ヨリ僅ノ茶トイヘドモ高價ニテ買込タリ且或人ヨリ二万斤ノ賣茶アルヨシヲ聞得タリ

○新茶賣人コノ間ヨリ追々當地ニ着セリ併價高キ

ユヘ買人未タ返答セス當地ニテノ相場ハ横濱ヨリト
ハ高シ横濱ニ於テ極上新茶百斤ニ付二十七ドルヨ
リ三十ドル迄ナリ
○當時賣買ナケレバ諸色相場書名目バカリナリ
○不日蠶卵紙賣買ノ時ニ至レリ先ツ青卵一枚ニ付
價一両ヨリ一両一分ニテ約束セリ但シ其紙数高ノ半
ハ金ヲ以テ買ヒ半ハ品物ト交易スベキナリ
同第六月廿七日
我五月八日
○過シ六ケ月ノ間ハ内地不穏種々ノ珍事件多シ今

其大畧ヲ記ス
○大坂兵庫開港ノ儀ハ其以前衆人期限ヲ疑惑セシ
ト雖モ終ニ開港ヲ世界ニ布告セリ
○両港開ケシ以前第一月一日ノ條約期限ニ違ハシ事
ヲ疑ヒ政府ヲ責ントノ企ニテ密ニ英米二國ノ軍艦数多
神戸ノ港ニ来リシニ幸ニシテ難ナク港ノ初メテ開ケシ
ヲ右ノ軍艦ヨリ廿一発ヅヽ砲発シテ祝セリ又陸地ニ
テモ各國コンシユル館ヨリ國旗ヲ揚テ祝セリ
○後程ナクシテ大政大変革ノ時トナリ一橋徳川ハ

将軍職ヲ返上シテ大坂城ニ引取レリ続テ戦争ニ及ビ終ニ敗北シテ江戸ニ帰府スルニ及ブ

○日本大皇帝ハ自ラ政権ヲ執ノ令ヲ全國ニ布告セラレ太政官ヲ営ミレ又開港地ニハ夫々官舎ヲ取建ラレリ且又此時條約取結ビシ各國ニ

敵愾ノ趣ヲ布告セラレシ

○當時政府ニ於テ大坂港口ノ船路綿密ニ結搆ナキニヨリ第一月十一日米國ノ豪雄ナル水師提督其兵十人ノ水夫等此川口ニ於テ波浪ノ為ニ舟ヲ覆没シ終ニ非命ノ死ヲ遂タリ爰ニ於テ外國人一紡其不幸ノ災害ヲ哀傷セリ

○続テ又京坂不穏ヨリシテ大坂在留ノ外國人ハ盡ク逃去レリ

○北方軍艦ハ兵庫港ニテ南方軍艦ヲ取囲メリ德川軍艦ヨリ薩州ノ軍艦ニ発砲セシヲ云ナラン

○南方軍艦ハ逃去リ北方軍艦ハ江戸ニ出帆セリ

○第二月四日備前兵隊ト英兵ト大坂街道ニ於テ争ヒアリシ

○英米二國ノ兵ヲ以テ神戸ヲ固メレヿ

○京師ヨリ當港エ　勅使着ノヿ続テ鎮定セレヿ

○森山某旧幕ノ臣カ并ニ從士等江戸エ出立ノヿ

○第三月二日備前兵隊司令士池田伊勢刎頸ノ事奴人司令官トシテ外國人エ砲発スベキノ令ヲ下セル召ニ依テナリ

○同十五日外國人再ビ大坂官舎ニ立戻レリ

○後又堺港ニ於テ外國人ヲ暴殺セレヿ

○京都ニ於テ

大皇帝エ并謁セント参内ノ途中浪人共警固ノ士エ乱暴ニ及ヒシヿ

○英國全権公使ハルリーパークス江戸エ出立ノヿ

○大政復古ノ初ノ頃雑ニテ諸人通商スルヿ能ハズ其後稍鎮静シテ商船等モ来着セレヲ報知セリ

○ハルリーパークスヨリ大皇帝エ存書ヲ建白セリ此ハ日本人ハ勿論外國人ニテモ甚ダ懇親ノ至リナリト云

○余等大坂兵庫ノ両港此後ノ勢ヲ考ルニ大坂ハ交易

第一ノ場所ト成ベシ唯願クハ日本人追々外國人ト馴合ヒ旧習ノ悪風ヲ改メ盛ニ通商ノ行レンヿヲ

○大政變革等ニ就キ暫時ノ間万機廢絶セシカ故ニ無據居留地今以テ成就セザルヲ筆記スルハ余等甚ダ悲痛ノ思ヒヲ成セリ此後ハ一日モ早ク成就シ且兼テ歎息セシ支件ノ恢復ヲ見ンヿヲ頻リニ願フ所ナリ

○後六ケ月ハ万事宜キニ赴キ過シ六ケ月ノ憂慮ニ平均センヿヲ願フ

○頃日外國人ノ家作且日本人ノ開店等聰テ改革ノ赴ヲ見レバ粗後来ノ有様ハ推察セラレリ

○余等今當港ト上海ノ間ヲ往来シ長崎ニ立寄ルベキ蒸氣船ヲ製センヿヲ企居レリ

以上

大坂新聞

○旧幕府軍艦の内富士山と唱ゆる船ハ当五月九日神戸表に着船せー由余の軍艦開陽廻天丸二艘斗ハ徳川氏に社下置余ハ尽く朝廷ヱ附属せー由の風聞

○今般政体職制御改付

大坂裁判所総督御免　醍醐大納言

大坂府知事　仰付　岩下佐次右衛門

同判事　長谷川仁左衛門

摂河泉播五ケ国郡村支配兼帯

同判事　小河弥左衛門

同判事　堺在勤　筑所長左衛門

同　摂判事　伊丹在京大進

摂河泉播五ケ国郡代免　内海多次郎

○和田初次郎吉本堂義ニ坊舎十五六軒殆ク町家ハ大半流失せる由大和ヶ瀬辺ル人の話なり

京都新聞

○第四編ヲ布告せ〳〵五月朔日淀川筋難船の時紙幣の内ヲ中京ヲ任める人なるゞ金子六百両而持して大坂より此船ヲ祭りしゞ兼て不審乃用心せ〳〵ゝ携くゝる紙の内に金子四百両を入れ縄ヲ堅と結り除の縄を長くして袂体ヲ結ひ付殊る二百両金子ハ胴巻ヲ納め疾く衣類も脱

べき支度して私の義なるや否や張る大河を渉
ぎて陸に這上りける時乗組の者溺るゝもの数人
ありて付くる者三人とを救ひ上る内水練をなさ
ぬ故なるべくれ共心操の良き人命四ツと金
子六百両を金くせゝに高運の人なり是程と名ハ
世にかくれなし
○洛東祇園社牛頭天王の神号古称止て左の
通てゝ以前祇園令祭式の事ハ就て小舎人雑色
より氏子の町々に通達せり

神速素盞嗚尊
八柱御子命 男三女八柱命
櫛稲田媛命

○去月十日奥羽仙台表より羽州庄内征討義
向指探て役方総督府より古達に対し玄参藩
大山格之助會津方に義林左馬左弟并に薩長共
隊卒て市三郎様共に十二日仙台発陸同
庄内滞陸十四日同

和田発途是より羽黒郷屋田夜村田に宿陣十又日
延谷に宿陣此和奥羽表国こ地表こに中に十六日
新山宿国猪寺に宿陣十七日山形城下に至
水野 上ノ山藩 井 伊豆守 に宿陣十八九日に和に滞陣
牛庵長姫諸藩徒兵に見こ参候十九日天童織田兵部
大 清に宿陣 廿日 廿一日に滞在 廿二日尾花沢に宿陣
廿三日新庄表に宿陣
右に先日より庄内の賊徒を紅葉清水口に八百人
清川ノ出張所
繰出兵防戦こ相成厳重あこ敵お守に付同夕

薩長兵隊手立に出に抜下之
直こ清川表に繰出し 右 行旗奉行こ 熊川
上野 安士源 押出に 知 廿四日未明より戦争相成
に敵大畏左こ
最初大に村こ先こ山上ヨ賊軍屯に知ヲ
討退ケふ殘清川に引退キ厳重防戦の揚ふる同
知 玉こ要害こ地すて最上川羽黒川こ狭り杉林ヒ
小揖又元り此林中こ進退掛引こ賊徒矢坂
宜敷地理に ふ便利 て弱苦戦こ知右羽黒川を

渡り城屯集く後ノ山より馳登りて知城使ハ尚杉
林に隠れ居る近出渡自在に弦引官軍接戦決定
進く和進ノ知右林中より発砲如雨此時伏候系
を繰死傷出来内四人ハ直に療治致し居る迫日
全快い事と紙業ハ右後日砲戦して敵軍一ト先
繰上ケ同夜中進く新庄表に帰陣と相成ハ多細
中上交く不別る日紀も五ツ時に退き一ト先
荒増左く後右に付夜三日陣屋と岩ひ上清家
應接会談促致ハ知進ム小藩陣に不練く会故

に鬼角同循遅延致車ハ知星四月四日衣城使ハ百
餘人天幕表に不会に押出ハ知城市中共に焼
燬と相成中に玄同不隊出系多勢又七人も討死
致ハ右焼拂出に山形に押寄ハ由て退く此事
陣迫くに和進に相岡に廻りハに付又日紀藩出会
隊繰出し繰新庄人数も繰出し尾花沢と
山会双方対陣致車ハ此節も上州流旗奉行と
して致戦ハ昨日小条交又弟と交代致人拙ル知
味方ハ五百人数四人清家接会相成ハ内藩此日

岩城く人数到着き後陣所勢二千又百程南
紙も出会てみく仙台表よりも山形を深く筑
前兵隊も此方へ到着山形も出兵大く参綜麿
又成中は酒田港へ軍艦到着く風軍越後へ
加賀姫ノ清蔭兵討入い由右風説そは日吹が横浜
尾花沢出張く城後退く散乱く粕谷く山形へ
こそく庄内へ討入る遠と思考仕い様く後に
庄内へ安心て成下いに以今尾花沢より報知之
城軍一同逃去て紙も無牛田迄進庄内

小越風聞

○閏四月廿七日の報告と既に本新聞に載い
き後桂さまる報知を待ちを風軍ゆゑ廿七日
後も引続き戦争の変城方到愛阿戦つて官
軍清蔭大こを苦く戦ちと云然と大彷
利て遂小城の巣窟柏崎も奪ち城後八潟く
此方へ落退さいよす
○尤の事件い常月六日夜彼の地よりの報告
とつゝ来ぐを待するを以ど

拍子近四郎と表集の賊徒追討のため椎谷に
に高田勢彦根勢妙法寺口の方に加賀勢
三方に分配して翌六日彼の所を引取
繰出せば椎谷の賊徒彦根勢多数攻戦賊
徒敗走する由進撃して椎谷四方を押詰る内
妙法寺口の方ハ敵村を幸営として三徒
分進撃し賊徒討拂ふ変弾丸雨戦と称
賊徒堅塞を敗走せり多数戦争まさ
らずして長岡の方に敗走す妙法寺近四ハ一人

の賊も漏り洩ず殘りなく引退き官軍勢を例
又張て彷利の働を奏せしと

関東風聞

○徳川慶喜恭順の実効如歟是人故を家祖
先よりの勤労も不浅為接寛大く市正家を以
て家名お続格孫城地も追く市川法社作出べ
き如回復下及奥羽及四国新の徒共深き
御仁恤の朝意も多辱遺して祝走し不
又屯集

王命に対し抗し奉る大総督府より
仰出ける条も恐れ入る由
○右説之儀派出張の為ノ京都より鳥丸様
ゟ新町様将様把後長岡様阿波様等人数引纏
早速下向致　仰出ける
○薩州様及市来家渋谷様把前庄内様等
人数引連早速下向致　仰出ける又追々
出張致す筈
○五月廿七日より会津追討として越前様ゟ出
馬致　仰付る人数小隊道ゟ出張致す筈ゟ由
○筑前様備前様等当又場人数引下向致　仰出
是も追々出発遂に相成る
論者曰板倉伊賀父子拠一度八官軍に抗し
既に降服せし上八月九日弾劾を受ひ
刑も不免歟旧孫を徳川侯に預け
死せしめ旧外を侯に
御仁意なりと関東の人情称賞遠ひより遠国百
万生霊の塗炭に及ん哀と歎ケ哀るなり

彼〻に早く右宛大の御紙意を諭し遣はしこのかた○先月下旬に相模国箱根関所に旧幕
強卒 [illegible] 二百人程も上陸し吏より通ず
甲府に闖入せし如き由にて甲府取締方沼津水戸
家中の者共制変もなく知る内通せし故今殺
水野家へ急変 御仙法に強もあるいよ
叔父東兎徒今以強静なるより上ゝ甲府迄
もケ程の事出来るべき変 御多事の折
柄言語図新恐縮の次第なり 冀くは大小

度伯能〻尋ねき
朝意を家中外内士民一統に申上なるべき事又
厳重仰付遣なるべき旨布告あり
悚然〻も丹性の憂ひ慎ず恭望奉る如し

上海に滞在の友人より報知

○上海にては昨年コレラ病大流行して死人多し
快勢にて来る日本の地にも伝染せんかと恐怖の
至りに全く不養生よりして伝染する故食禁忌
生法を左に記し送るものなり

扨一我家を掃除して清浄なるを肝要と故して
風の毒る様こして我体も成丈奇麗ほどゝ義を
病の忌ざ〳〵うゝ亜こ後と足を温め衣具を着て十分
汗を出静こして思を省くべゝ 拵物第一度る
人多〳〵集る所立寄る食拵ふ油ごき物 熟せざる菓物
熟る卵を拵る魚色青き魚 鰯 鯖 鰹 鯨 鱈 蛤 鰒 櫻
西瓜 まくわ きうり 柿 梨 此等の所に変る食物
〳〵以何にも弘て腐りるもの例こ立寄るなれ
右の大概第又記事後〳〵再ひ載

内外新聞第七

神戸新聞譯 洋暦第七月一日 皇暦五月十二日

○過シ日曜日我五月九日 或ル外國人等布引ノ滝ヘ行キ
水ヲ試ミシニ其中ノ一人ハ游ヲ好マズ只水淄エ入テ彼
是セシニ水勢劇シクシテ誤テ深水ヘ溺レ込タリシニ
漸々岩石ニ拵リ付大声ヲ揚テ助人ヲ乞ヘリ時ニ茶
店ニ休息セシ友人等走リ来リ直ニ水中ヘ飛入リ棒
縄等ヲ投テ以テ彼ノ溺シ人ヲ引上タリ
此溺人水中ニ於テ能ク注意セルナラバ斯ル過失ハ有マ

ジキモノナリ余等察スルニ此後ハ水ヲ嫌フナルベシ

○甚ダ愛憐深キ余等ノ支配人ハ今度兵庫大坂神戸ノ全権ヲ命ゼラレ國王ヨリ改テ印章ヲタマハリシト余等此事ヲ聞テ太ダ喜悦ノ思ヒヲナセリ

大坂ヨリノ新聞

○前月廿三日我五月四日ノ夜十人計ノ強盗双刀ヲ帯ヒ居留所近辺ノ日本人家ヘ入リ金子二千両ヲ奪取リシト

○米國飛脚船コスタリカ名ノ来着ニ依テ前月三日

ヽデノサンフランシスコノ記事ヲ得タリ

○日本軍艦富士山ハ今度大坂ヘ来レリ侃シ持主ハ前日ニ違ヘリ碇泊場所ハ當春南方ヲ襲ヒシ時碇泊セシ処ナリ

第七月二日
我五月十三日

○米國飛脚船ノ着ニ依テ尤ノ重大事件ヲ聞得タリ」合衆國大紗領ションソン人名ハ勤務ノ過失アリテ放官サレシト是ニ依テ争端モ開ク可キヲイエムスタントン人名尽力シテ止ミタリト

大紗領後嗣ハ評議役ノ撰挙ニ依テゼ子ラル官名スチヨ
ヒールド人名ニ決定セリ
共和政治社中ノ撰挙ハゼ子ラル官名ガラント人名ヲ以テ大
紗領ニ充テコルフアックス人名ヲ以テ副紗領トセント欲ス
之ニ依テ来ル第七月四日ニ大會合アルベシ
大紗領ノ大任ニ充ランコヲ希望スル人々ハ裁判役総
督ニテチヤス人名并ニセーモール人名等也此ノチヤス人名
ナル者ハ當時國中ニテノ有名ナル豪傑ナレハ或ハ
大権ノ帰ス可キヲ察セリ

右人撰ノ大會合アラバ恐クハ戦争ヲ開クベキ機會
ニ至ランコヲ思ヘリ
○頃日双カヲ帯タル日本人ポルトカル人ジヨゼフ一スカ
ラナ人名ノ酒店ヘ入リ酒ヲ与ヘンコヲ乞シガ既ニ酩酊
ノ体ナレバ主人是ヲ肯ンセザリシニ頻リニ丐フニ依
テ一瓶ヲ与ヘケリ暫時ニ飲ミ終リ再ビ丐シカドモ
今ハ主人与ヘザリケレバ彼ノ日本人大ニ怒リカニ手ヲ
掛ケ已ニ抜ントスルヲ見テ主人ジヨゼフ人名早クモ飛カ
ヽリ刀ヲ奪取リ大音ヲ挙テ加勢人ヲ呼立ケルニ幸ヒ

此時日本取締リノ役人通行ノ折ニシテ速ニソノカヲ奪取リ此乱暴人ヲ捕ヘ行ケリ

時ニポルトガルコンシユルハ在留ナキニ依テ主人ジヨゼフヨリ米國コンシユルエ此由ヲ訴出タリ

米國コンシユルハ右ノ裁判ニ就テハ彼ノ日本人ニカヲ帯ルヿヲ禁ジ縁人トシテ永ク是ヲ使ヒ後チ生涯追放ス可キ旨ヲ或人〻デ申出タリ後日此日本人相當ノ刑ニ處セラレバ余等悦ヲ其事ヲ記ス可シ

日本士官ハ公務ノ外ハ常ニ帯ル所ノ双刀ヲ脱却スルノ時節ヲ余等頻ニ待ナリ

○佛國全権公使リオンロチエス名ハ轉任シテ本月廿六日我五月七日ゼオランド船名ナル砲艦ニテ當港ヘ着シ翌日ドプリークス船名軍艦ニテ大坂エ行キ今日帰港セリ

同月廿九日我五月十日月曜日朝九字我五ツ半時長崎出帆セリ此時港内ノ軍艦ハ尽ク祝砲ヲ発セリリオンロチエスノ日本ヲ去ルハ実ニ在留ノ佛人ニ於テ大ナル不幸ト云ベシ

第六月廿九日ゼオラン船名横濱ヨリ同廿七日オーサカ船名同上

来船

同　廿九日　キヤホガ船名　同上　同　廿日　オルカン船名　同上

第七月一日　コスタリカ船名　同上

去船（キヨハク デフネ）

第六月廿九日　ソレライス船名　横濱エ　同　ゼオラン船名　長崎エ

同　オーサカ船名　長崎上海エ　同　廿日　オルカン船名　横濱エ

同　廿日　テスパッチ船名　横濱エ　第七月二日　コスタリカ船名　上海エ

以上

大坂新聞

○五月廿日南本町二丁目八百屋町小八信濃屋之家ニ旅宿せし小田馬之助と云る士を召捕らんと拔刀の孫答ゑ向ひ来るふ馬之助い疾逃去る余輩二人と召捕ゑなるし

就ニ日比小田馬之助と云る元藝孫四の々士ニて唐寺清士陵武隊と云隊長なるしが故ありて生役を放さ是ニ於ては隊中へ送るを金穀拒ニ遺恨を晴さんと せし由なる近頃い立流ゑ著し

家来ハ又人も石を引き妾とも抱へ乗馬と引うせく
強来せし故盗賊ありてあるゝ孫と風婢をれども
全く左よあらざるを
○過日より紀及田丑沖より東方の軍艦一二艘碇泊
世子との風聞あるゝ大坂府より役人方ハ出張乃
由巷説も色々あり拙ろ小紀及小の手紙の写しをう
とて多へ入るまゝ左よ紀を
前号十三日の和寄出張ハ大和小和二艘着
亦ハ昨十又日夕前大和着又百人乗組石蘆

土把後藩く弦陸より二大隊半り乗りハ
様子見ハ川支りて山ハ四ニ逗留く嗚致居
ハ大将ハ判変局く様子一番合点乗りふ戸ハ
少及ちくハ内くちゆ城ゝ乗下ハ
論者曰右の書面の信否ハ知らされとよ乗入
ゝる姑く爰ハ載て報告の慌るを待つ
○第四編ハ紀せし短業師寅吉ハ始末を慥なる書
面を抜萃して左ハ挙ぐ
此夜八月十八日アメリカ国の名所サンフランシスコ着し

奥行せしこと日く故障あるく初日より金子の外五人
程く難儀を云掛ける　夫ハ第四ニ家族八人の扶ちく上
サンフランシスコ迄ゼ地名ゼトクトンに渡り夫
より サクラメントに渡りるふ尚又人数減し居る中を含
まより云うけしうべ寅吉大こ立腹し厳密迄答に及と
くれば金子もサンフランシスコ弾し垂し家族と山林医
をべく或ハ鉄砲にて打つさ拐と争論なり神風楼の
横濱の 検挙して同人及ひ以上四人ハ日本へ送り金余
花女郎
ハニウヨルクへ渡るべきよ 林蔵し十月六日桑港せし

よ私中にて又騒動よ及ぶ第四に依て元の旅宿へ戻り
横濱住人八百庄唐物商人名の扱ひにて俺蛇文を表て渡
和蘭し同十六日迄の船よ乗十二月三日子方とこの名女子
私中に死を同七日ニウヨルクへ着し正月元日ハ真行
せしよ二日三日ハ寅吉発病して同十六日終に病死
を見より金子の外五人名換金の賞として子役乃
者を彼方に残るべきを云掛或ハ荷物を残るべし
と程くの事起りて家族の男女難儀に及ぶる由へ
或人第に編を見く難じて日寅吉ハ元京師二条新地

伏稲荷とゝ〻る僑に小家を造り住居して親を
大吉と云共ふ古町誓願寺の境内にて手妻稽業を
なし見物の人よ一銭二銭と乞ふる動く下賤の者あり
天保の末淫業師山本小鶴が孔板後り竹沢後の増
多猶樂者を云似く左夫早竹寅吉と号し所く稽
淫業と真似を拙き者を知りる人い寅吉が
左支と称し哥舞妓役者の如く自ら婦人なると悪
ひものも多くなり知る下弟の支配を死載なる
多新軍紙の名を下さんなを憂ふと

論者曰拙り我業の思ふ所又違へり彼の洋行
の始終を記して外国人の情態をも察知せべく
己来三思を加へ考して漫るに外国へ渡り過て忠雖
と懐成し甚変を亟く内外国るも開係なるふ
及ぶやうさふ非と泛きるを寅吉元下賤の者
とゝ〻ども義を以て教人の抹梁と成るも又き乃こ
拙き一己の豪傑なり功名ハ君子の欲ぜざる所盈呉
い天地の定理寅吉名利の二ツを欲して外国の鬼と
なるゝ是又一ツの教戒なるべし

○五月十六日横濱と出帆して大坂に着せしと云
人の結ふ日南月十又日夜丑の刻江戸表市中上野
辺より火の手上り西北に伸び出でこれ兵火
と中風説せりと云

京都新聞

○小松帯刀丹羽淳次郎大村益次郎小原仁兵衛土肥
謙蔵山田市左衛門陸原悟左衛門新田三郎本村三郎
松平洋之助坂田左馬助土方大一郎佐野伯内小笠原拾六
江夜新平長田拾次郎小川虎之助右等の方々
江戸府の職掌を分け作付追々に東下これ成由
○富岡浅高の旅奇と云
植木店廣店建営に付御志を俗
まうて後に又店廣俗まる弱
きこと丁度に君に仕へ天津日比
光りてあるに奴いさもそうんゆ
り付く夫の方と法せしうとて
ちこせ乃後ちうあるとら色
国四月廿日出信及岩光与五郎と出快申と云

○甲府の方も又〻俄徒寄り集い騒おびゝ人付吐二十
四日松代より兵隊二小隊大砲二門司令砲手弁
附属士三百人程出張ゐゝ由日〻八方より兵隊通
行仰付ゝ猶〻發浮うゝと日を暮しい今年松
代侯分京都甲州栽後手弁諸所出張い騒敷ゐ
こ付費用も又不かるとゝ奈い信濃ハ松代侯を
一ト力こ致し只管下民こ迄りいるゝ神の如くこ戴
い横手ゐゝい松代侯兵隊通行と見れば士民共往
来こ平伏手を合せ拜こ居ヤい実ゝ歟ゝ晴を得又

能〻國勢こ心を用ゐるべし〻

関東の風聞

○閏四月十九日江戸常盤橋内城兼炎〻郭こ陣
左陣ゐ金原四条殿古寺清〻内湯殿の人数凡一
大隊平り横濱い繰出しこ相成同所より急飛ゐて
羽根庄内い発向ゐうとぞ
右行軍中こ薩藩〻士四人土藩二人加りんい陸軍ま
ふんをと云號隊の内二小隊平りい大號護清〻短
號を携〻手余いふ弼士號元也號を携〻大號三挺

内武挺い元列ざる大炮元也三斤位の長サ砲之一門に
四斤 施條砲玉薬箭と おろく二人持ち 弱り箭大凡
八九十 竹長持 揺ち 長箭 三四人持四五十とろくに也
○同廿二日 彼林氏左城ち 安岩倉殿大名小弥四
及郎に市着氏寺湾い 周及藩 加納藩ち 横子藩長
大垣 高桐の兵隊い 彼林氏に殘しの由
○同日夕方上総大田毒ち 左隊の 御原殿に 幕府
高桐郎に 入へち 知同 衣美ち 弁氏 右氏隊 営に 西小
ち方か 何者の 所為ち 大砲三發 打也 知幸 こして

破裂せず 玉い長箭弾 して 焼玉と ろく 由 市中湾
の濱 松野より 及時 探索せち 出しうども 終と 曲者を
見 海めさる 由 大の砲声 弘坂辺 を 吹へしと
○越前郎 市左隊ち 高倉殿 四条殿 明廿四日 横濱、
市 蒙 途 同 所 廿八日 亜墨利加の 蒸気 船る 戦後 宮 因
然 今郎 に 乃 乗出 し 市 子 合ち 由
○安房上下 総及 常陸ち 四ケ玉 先ッ 鎮静の 横子 て
土浦 藩い 勤王 との 風 弾 ち
○柳原殿 最初 佐倉に 着 城外 学 挽 て 三日 に 左

陳大田垂に迫軍大田垂藩を捉い佐倉藩に引渡ケ
陣屋い本家なる吉田長の家臣に引渡ケとなる

下総国猿静の始末

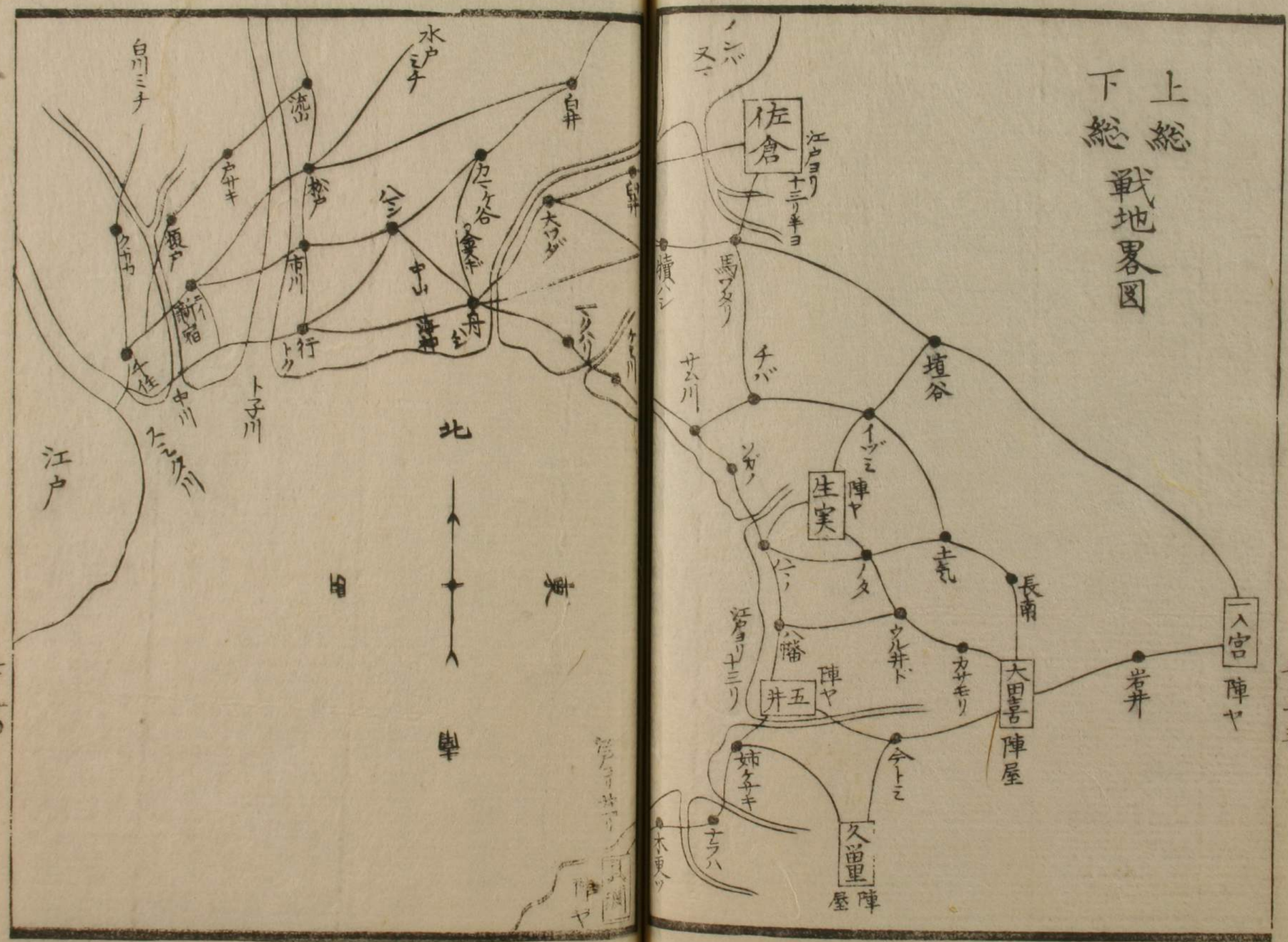
○四月廿三日下総玉流山屯集の彰徳江戸より入こん
と千住迄へ押来る皆へあり 後前勢佐古原勢出張の
彰徳押来る様子なり
同廿四日 松戸駅より彰徳へ府せんとする由故来りが
両藩の兵隊新宿へ方へ陣を張を一弾の彰松戸と
なる彰徳判くと兵器を官軍へ交換後前勢引

これを獲る強るを又一弾の彰松戸の間乃ようを任
る掛至るを佐古原藩引返してこれを止ノ共彰を
も伏従せしめ薩兵の兵と共に捕獲し五揚る所乃
兵器い 大総督府、差出し翌廿五日應援の薩兵
い江戸へ引返同廿六日付の彰徳い田安のを引渡
しを成東小の彰徳猿静を
閏四月朔日木更津に屯集の彰徳押来る時を
須本藩渡場出張なり彰ハ松檜駅に屯を佐古原藩
應援として松戸か八幡に移る彰徳ホ例羅の青を述ると

種も兵器い液をあゞとゝ云募るふ依く落着ふ為
同二日乗馬を結の殊判と旅八幡に後ゝ勢貝塚村い
義堂勢行徒に筑前勢彌ゞ谷に佐古原勢と多分を
定めく城の宿陣私格く仕寄せこれ成し由
同二日未明八幡後前多貝塚義堂ふく城後ふ迄押
寄戦争と成孫ゝ谷迄ゝ佐古原多と合戦を始む
是ゝ二方の戦ひ官軍先陣若戦ちり此日佐古原
勢奮戦して私格宿く押寄せ同所に放火し城内を
追掃ゝ薩兵二小隊熊撫として愛よ到ると云

同四日佐津両家の兵格見川迄出張
同五日佐倉に進軍く私格後迄の城後木更津方里
谷迄陣をる由ゝあり
同六日千葉宿に進軍せり此日先日よりの戦城勢強
大くゝあるく依く副総督出馬と成先陣薩長義
大村藩の来舎を
同七日城軍上総丸八幡迄押出し又井川と要害と
て防戦を城又後迄ちり官軍婦ヶ崎迄追討又井の
陣屋を奪ふ

上総 下総 戦地畧図


佐倉
江戸ヨリ十三リ半ヨ
馬ヅタリ
チバ
埴谷
イヅミ
陣ヤ
生実
長南
大田喜
陣屋
岩井
一入宮
陣ヤ
五井
陣ヤ
姉崎
久留里
陣屋
木更ヅ
ナラハ
陣ヤ
水戸ミチ
臼井
大ウダ
中山
海神
舟
行
市川
松戸
流
江戸
北
東
西
南

同八日官軍本更津ニ里谷ニ押寄ル賊ハ早くも
海陸より逃去ル一ト先ハ静ニ及ブ
同十日より官軍進ム江戸表ニ凱陣ト成ル由
説ニ曰上総下総四ヶ所ニ彼幕の小藩多くハ戦
ふ敗走せり　賊徒多貝湾辺より乗船して相模
ニ移ル　横須賀ニ上陸し支より甲府ニ模行せり
すんと移る　洋説と聞得たる第八編ニ布
告ス〻

内外新聞第八

海外新聞譯

○商法報知ハ前日ニ異ラザルガ故ニ今コレヲ記載セズ

卵紙ハ此頃ヨリ賣出セリ極上品ニテハ一枚ニ付二両一分
ヨリ二両マデニ賣ンコトヲ日本商人願フ
日本商人蠶卵紙ヲ賣ントシタル者ハ莫大ノ損分ニ成
リシトゾ
タコウホルモサ地名ニ在ルホワイト人名ヨリ
申来リシ彼地ノ事情
○此國土人ハ稍開化シタルト関ケザルトノ二種ニ分チ未

ダ開ケザル徒ハ支那人ト交接シテ婚ヲ結ビ稍彼ノ風俗ヲ慣ヘリ併自國ノ言語ヲ用ヒシ故兼テ定メ置シ場所ニテタイカウヨリ東北四十五里ノ地ニ住スル土人ト支那人ト八日毎ニ會合シテ通商セル通弁ヲ為セリ此所ニ於テ支那人富饒ノ島人エ鐵塩麻煙草薩摩芋等ノ諸品ヲ商賣セリ斯ノ如ク互ニ高用相通スルトイヘトモ支那人ノ内地ニ入ヲ許サズ島人モ又イマダ此ノ境ヲ出ズ若シ犯シテ境内ニ入者アレバ直ニ之ヲ殺害スルノ悪風習アリ斯ノ如ク夷俗ノ甚シキ徒トイヘトモ外國人エハ甚ダ慇懃厚情ヲ以待遇シ且境ニ出入スルコトヲ許セリ右土人ノ人種ハ皮膚黒色ニシテ容貌美シク毛髪ハ黒ク目モ又黒シトイヘトモ大キクシテ且丸ク稍支那人トハ違ヘリ其土人人毎ニ弓矢并ニ銃ヲ能使用セリ又國境ハ甚ダ嶮シクシテ攻襲人ノ為ニ別ニ備ヘヲ要セザルノ地形ナリ此土人ノ起原ヲ論スルニ至テハ如何ヲ知ラズ記スベカラズト雖モ事ト支那人トハ稍違ヒ寧マレト地名人ニ相似タリ此國ノ土風甚遊戯ノ道ヲ好メリ余此國ニ就キ將来ノ事ヲ案ズルニ支那人彼ノ狡黠ヲ以内地ノ貴品良物ヲ經シ終ニ圖國ノ支那ニ屬スベキヲ察セリ

去年戰爭ノ後再復戰ヒニ及ビシカド幸ニ勝利ヲ得シ

一ハ全ク魯斯耶ノ應援ニヨッテナルベシト案ス今彼

地ヨリ報告セシ書面ノ一ヲ以テ其大旨ヲ示ス

朝鮮ヨリ来状ノ寫

一筆致啓上候先便奉入御意候異船来冦ノ一件任官呼下返詞ヲ以テ尋問之趣意内々聞取候處去月十八日京畿道ノ屬領永宗ト申島ニ大美國ノ船一艘到来イタシ人數百余人上陸姦慢猖獗スルヲ以水官ノ者ヨリ申出則永宗ノ僉使孝哲ト申人單騎ニシテ馳趣竊ニ伺ヒ直ニ引返シ密ニ軍令ヲ下シ伏兵ヲ設ケ賊ヲ要地ニ誘出シ断然及接戦候所賊軍大ニ敗走竟ニ巨魁者二人ヲ斬從率者凡八十人許討殺殘徒脚船飛乗リ或ハ溺没或ハ漸漸ニ本船ヘ逃帰候無程同所出帆ノ由ニ付委細ノ儀ハ未不相知候得共此節之一戦我邦ノ人民死傷一人モ無之候由此後トテモ渠賊幾度窺ヒ来候共同様之事ト被存候青德氏申出候尤大美國ハ何國ニ候哉ト相尋候處矢張一昨秋来船ノ佛夷ノ由返詞来候右争戦ノ次第今般疾外國ヨリ宦聽エ奉スヘキ折柄吉封幸右衛門歸國申渡候ニ付書余者同人ヘ申含置候条御兼知下サレ官邊御屆向キ殿様御旅館エ御注進可然仰上被下度奉希候恐惶謹言

閏四月十五日

御支配御連名

長岡合戦七八日頃ヨリ毎日戦争ニテ双方打合ニ相成川満水
ニテ川向ト川手前ト打合毎日ニ御坐候
今日迫ニ九日斗戦争ニ御坐山ノ手口妙見ト申処尾州之藩松
代之藩信州大名所々藩川手前ニハ薩長之人数高田人数御本
藩御人数入代リ々々打合ニテ毎日怪我死人七八人斗宛有之
候由川ハ丹波嶋ノ下モニテ大川也川幅半里斗有之由誠ニ洪
水故渡舟等モ六ケ敷ニ付川ヲ挾ミ合戦ニ御坐候上坂田ヨリ
十七日ニ長岡口宮市ト申駅エ繰出シニ相成宮本ヨリ川迫ニ
星斗リ有之ニ付大砲ノ音雨ノ降候様相聞申候今ニ長岡ノ城
ハ落城無之追々官軍之方繰出シニ相成一刻モ長岡落城相待

申候
長岡戦争之処官軍方勝利ニテ信濃川ヲ打渡レ一番ニハ舩二
艘ニテ昨夜御本藩御人数中之島ヘ相渡リ夜ニ入向ヘ渡リ込
二番ニハ薩長之人数打渡リ候日数十日之間川ヲ挾ミ大砲等
打合ニ御坐候長岡城下ヲ三四ケ所ヨリ大砲ニテ焼拂大敗軍
之様子ニ御坐候昨日見物合戦場半里斗リ手前ニテ長峯ト申
小高キ処ヘ嚴越打合ノ処目覚敷次第ニ御坐候味方怪我死人
未タ相訳リ不申昨日迫惣人数之内十五六人モ有之其内死人
四人有之由今十九日四ツ時頃長岡城焼拂ニ相成官軍不殘川
ヲ渡リ長岡城下所々大砲ニテ焼拂ニ相成味方大勝利ニ御坐

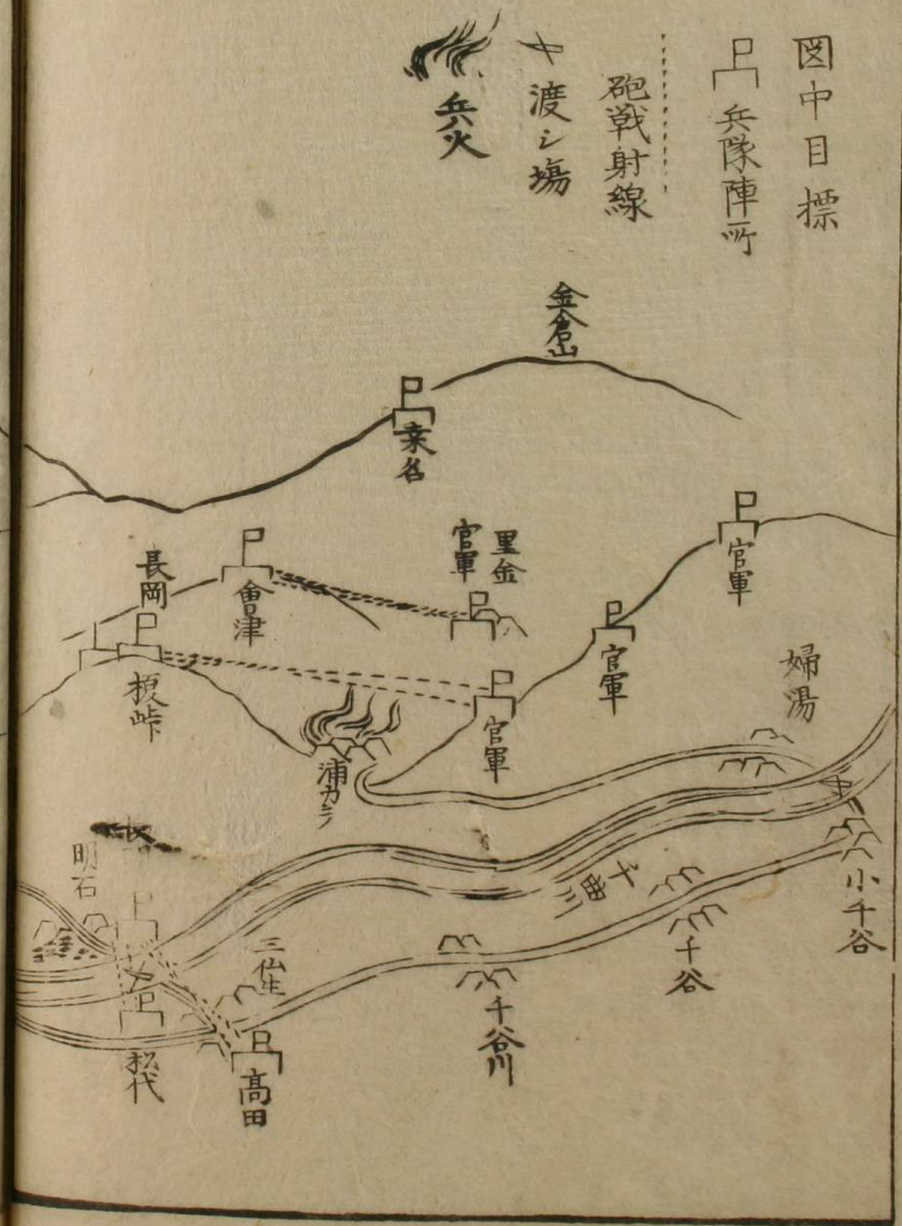
図中目標

兵隊陣所

砲戦射線

渡し場

兵火



候事

右北越ヨリ持歸リシト云戰地之圖ノ写

論者曰右文中前後或ハ重言ニ成リタル処等アレトモ強テ不改傳写ノ伜ヲ記ス讀人怪シム事ナカレ

或人之説

○先ニ布告セシ信濃飯山ヱ乱入セシ賊軍ノ隊長タル古屋佐久左衛門モ何レノ戰争ニヤ長濃之戰士ト組討ノ勝負ニテ戰殁セリト古屋カ所持ノ胴乱ナリトテ大キナル胴乱ヲ分捕セシ由ヲ語リテ見セラレシ由

京都ヨリノ報知

○先頃ヨリ上京アリシ旧幕府旗本ノ面々朝廷ヱ歸順ノ輩本領安堵之旨被仰出當六月廿七日不殘参内御礼相濟追々在所ヱ可引取トノ御事ナリト右ノ面々高千石ニ付二百両宛金子可差出儀ヲ被仰付其内播州地黄ノ領主能勢氏ハ徳川氏ノ時ヨリ京師日ノ岡御警衛ヲ勤メラレ當春ノ騒乱ニモ始終同所ヲ警衛アリ幕府左祖ノ色ナク同四月迫警衛無滞勤メラレシ切ニヨリ右出金之儀ヲ差免サレシト是モ又規模ノ事也ト沙汰ス

○五月下旬仙臺藩京詰之人々屋舗ヲ召上ラレ江刕ノ領地ヱ

引退キ夫ヨリ婦女子等ヲ駕籠ニ乗セ宿送リニテ奥羽エ下リタルヲ見タル由東國ヨリ上京セシ旅人物語レリト

○慶應四戊辰乃ゝ二月十四日東伐の軍ゆゑ引しりて都城出るとゝ

土藩　岡本暁馬搗寧信　二十七

かぎりなきいろいろのふねゝあらゝく吹きまさる風乃俤ゆゑと家ゐる

梓乃ゆくさきかくさ〳〵大丈夫乃つゆの命をもいのびそへ

右和哥ニそ京師生まれし知己ニ送め並後巳月廿三日野辺

今市敗争戦〳〵砌戦死

内外新聞第九

神戸新聞訳

○今般神戸ニオイテ海軍所御取立ニ相成追々海軍御開キ可被成御趣意ニテ日々調練有之水夫小頭始水夫ニ至迄巳ニ百人余モ集候由

海軍撰判事試補　白峯駿馬　外一人

○橋本久太夫ト云人御軍艦乗組將帥被出来次第海軍ニ有志ノ者追々御扶持ニ相成支量ニヨリ夫々至當ノ職ヲ命セラルヘキ事　仰付尚御軍艦

○七月十二日大政官ヨリ東西本願寺ノ門主ヲ　勅命ヲ以テ召ス其御趣意ハ此度大坂本願寺掛所　朝廷ニ被借召度トノ御沙汰恐兼シテ歸山ス翌日使僧ヲ岩倉殿ヘ遣シ　帝御在坂中　玉座如何致シ候哉本堂ハ日夜万民ノ渴望礼拜スル処ナレハ御憐愍ヲ垂レ給ヒ其儘差シ置セラレタシト歎願ス然レハ　玉座ハ暫時幕ヲ以テ囲ヒ本堂ハ大坂府裁判所ノ處置ニ任スヘキヲ即大坂掛所ノ役僧右之趣ヲ裁判所ヘ訟フ然ルニ此節大坂府ノ知事他行ニヨリテ未タ何タル御沙汰ノ有ルヘキヤヲ不知確トシタルヲハ十篇ニ出スヘシ

評日或人曰両御堂ヲ豫メ御用意ノアル事ハ全ク奥羽ノ賊徒威焔イヨ〳〵盛ニシテ追々賊軍京畿ニ逼ルユヘ　主上ノ御立遁キ場所ノ御意抔ト申ス者アリ是全ク好事ノ者ノ説乎或ハ姦商共人氣ヲ動揺サセ武器類ヲ大ニ賣ントノ策ナラン又曰英佛人追々渡来已ニ冨島辺立ノキ仰セ出サレタリ彼地モ夷館ト成ル故全ク英佛ノ大將分ノ館ト成シヨフ乎未タ確説ヲ得ズ七月廿七日頃久我大納言殿東北遊撃隊ノ將帥トナツテ東御堂ニ着シヨフ兵隊ハ秋田及ヒ薩劦ノ由近々東北御發向有之候

○當春已来肥前浦上辺処々ノ者多人數耶蘇天主教ニ被誘引候ニ付急度嚴科ニモ可被處ナレモ此外ニ悪事モナク畢竟ハ利欲ニテヨヒ又ハ怪異ニオビヤカサレ候愚民ノ常情不便ニ被思召近辺諸宗ノ寺院エ教諭向被仰付候得共彼邪毒膏肓ニ入リ一向改心不致候ニ付テハ往々刑罪ニ相成候者モ有之尚殘ノ人數讃劦高松侯ヘ御預ケニ相成頂ロ京都ニオイテ両本願寺御門主真正寺御門主等ヘ教諭可致旨被仰出ニ付夫々使僧讃劦ヘ發向ト申ス事也此等ノ事件及ヒ春来御一新ノ御時節万端御談合旁分沉已来二百余年ノ今日東西真正寺共和親相成御門主モ互ニ御往来御誓約相成候由

○北越一揆ノ者多人數官軍ニ相抗シ候事全ク　朝廷ノ御趣意ヲ謬傳イタシ候事ヨリ起候北越ハ元来真宗本願寺門徒多ク質朴鈍實ニテ兼テ佛法信仰ノ処御一新之御趣意ハ畢竟廃佛可被遊ト心得遠候事ニテ　朝廷ニモ深ク御配心被為在以　勅命東西門主始真正寺佛光寺ニ至ル迄被召呼早速下向教諭鎮静可致被仰付候内畢竟廃佛ハ両部ノ分ノミ被為廃候事分然ニ相成動乱鎮静ステニ仁和寺ノ宮様大旆ヲ向ケサセラレタリ

○七月朔越後杤久保村杉津村両所ニテ戦争有之

官軍大垣人數左之通

討死　種村文之進組　田中千藏

深手　加藤格之助

同　山田祐造

薄手　田辺三津次

分家淡路守家来

即死　淺羽守雄

右之外委細報知ヲ得ハ早々別記ニ出スヘシ

六月廿一日羽刕庄内ヨリ當地商家ヘ差越候書狀取意ノ寫

○當四月中旬ヨリ大混雜ニテ同十九日最上表大戦有之其後小戦ハ処々ニ有之閏四月中旬庄内勢最上ヘ出張諸方ニオイテ戦争其後秋田勢五千人余當國境ヘ押来リ候ニ付庄内ニモ手當有之人數操出シ官軍死傷多ク秋田勢引候間遂ニ秋田ヘ押寄互ニ勝敗有之稍ク此頃ニ至リ庄内引取當分ハ先平安ニテ人氣モ宜敷角力芝居等追々賑行モ出来候様相成候テ大ニ繁昌ニ候ヘトモ長々通船往来無之旅人モ出入モ差留ラレ候故諸品拂底諸相庭共飛騰漸ク四五日前往来モ出来候様相成候間品書差上候御地

モ定テ御用金被仰出可有之ト察上候當國ニハ御聞及之本間氏莫大之金子一手ニテ急速ニ調達致シ候ニ付外々ヘハ不被申付大ニ喜ヒ居候古金捧金砂金等モ有之候由越後路ヘモ官軍御押寄ニ相成候間會津米沢越後小大名衆名最上等庄内ヨリモ出勢イタシ日々大争戦之由勝敗ハ中々急ニ附不申トノ事△當年ノ儀植附後雨天續ニテ土用中モ雨天勝ニテ大ニ案居候処當六月中旬ヨリ晴天打續キ大ニ宜敷相成申候秋成ハ不悪ト存候

評者曰右書狀ハ庄内人ヨリ差越候事故自然自國ノ強勢ヲ賞スルヤ必然スヘカラス

○先般朝鮮佛國ト争戦之節近海ニ米國商船碇泊致居候処右争戦不時ニ差起リ候ニ付碇切捨退船致シ對劣矣ヘ右注進ニ及ヒ碇借用致歸帆ニ及ヒ今般右借用ノ碇ヲ對州ノ添翰持參ニテ大坂ノ藏屋敷ニ返濟ニ来シトク

横濱ノ新聞

○此頃蝦夷地ヘ鄂羅斯(ヲロシヤ)軍艦渡来多人數上陸ス是イカナル事件ニヤ分リ不申候ニ付佛英ノ軍艦ヲヤリテ来故ヲ問シヽ由事分明ヲ得ハ次篇ニ出スヘシ

○奥州ノ商人無印鑑ニテ蠶卵紙生絲等諸品賣買ニ来ル者アリ横濱ノ吏探索ヲ四十人ヲ追捕ス東軍ノ細作ナラ

ンカ

八月六日浪華橋ヘ張紙有之候写

濱ニテ切付置候　津ノ國屋伊右衛門

一此者義數年来萬民之苦ヲモ考ヘズ米穀ヲ買シメ候
此罪ニヨリテ如是天誅ヲ加ルモノ也
此外ノ者共數々カクノ如キ聞及ヒ改心不致候時ハ
同罪ニ可致者也外ニ名前此以後タシカニ記ス出ス
者也

○八月八日早天久我殿天保山ヨリ蒸氣船御發行ノ事

○八月四日大坂府兵隊歸向後浪花隊ト可称御申渡有之
○同　五日加州ヨリ歸リシ人持歸候戦死ノ人ノ詩

恰遇男児得意秋肥驄嘶櫪劍鳴韝微臣有死君恩報恢復誰
為舊　帝州

哀鴻朝度雪峰驛寒馬夜嘶千曲濱縱有微軀期馬革忠魂不
死護　楓宸

作者姓名未詳

右後作ニテ見レハ長岡戦争ノ時討亡ノ詩乎

弘通所

大坂心斎橋南一丁目　敦賀屋九兵衛
同　同　安土町　河内屋和助
同　同　北久太郎町北　河内屋喜兵衛
同　北久太郎町四丁メ　河内屋新次郎
同　心斎橋本町北入　河内屋忠七
同　北久太郎町四丁メ　河内屋清七
京都寺町姉小路上ル　錢屋惣四郎
同　三条御幸町角　吉野屋仁兵衛
同　御幸町姉小路上ル　菱屋孫兵衛
同　三条寺町西へ入　吉野屋甚助
同　冨小路四条上ル　丁子屋榮助
同　四条河原町西へ入　山城屋勘助

○當春正月德川氏浪花開城後軍艦ニテ江府エ退走ノ事件日本在留ノ外國人ハ大概此ヲ知トイヘトモ其節ハ外國ヘハ巨細ニイヒタ通セサリシ故カヲテ德川氏ヨリ米國ヘ誂ヘオキシ軍艦全成功ニ付其節横濱エ渡シ来ル尓ル處横濱警衛ノ肥前ノ兵隊ヨリ此ヲ分捕セントス其故ハ今般渡来ノ軍艦ニ米自國ノ船印ヲ不用德川氏依用ノ船印ヲ相用ヒ来ル故也右段々應接ニ及シカ共米人兼引不致何分此方ニテ德川氏ヨリ誂ヘニテ渡来セシ故當德川氏ノ船印ヲ用ヒ也トイヒ〳〵相拒ミ議論紛々タリ

シ処此頃ニ稍々　朝廷ヱ属セシト
○先ニ第四編ニ布告シタル當生玉社附真言宗ノ寺十坊
共仔細アリテ早々立退可申被　仰付即日佛具等引拂立
退キ其後追々歎願シタテマツリシ由聞シカ近日安堵如
元被　仰付シトソ
但シ是迄ハ社領ハ生玉ヨリ支配セシカ今般改テ司農
局ノ御支配トナリシト也
○八月上旬久我殿御發行後ヱ中御門殿御着同十一日貨
幣局御巡検有之御用モ有之ヤ委細聞知セハ後編ニ出ス
但シ貨幣局ハ近来當浪華鰻谷一丁目ヘ御開ニ相成去

ル七月朔日ヨリ御吹立ニ相成候
已下ノ事件ハ前来已ニ聞知アランカナレトモ其誤謬渦
失モ又多シ今般確實ノ明拠ヲ得候ヲ以テ是ヲ記載ス
讀者陳腐ヲ咎ルナカレ

雪峠芋坂戦争記

○後四月廿六日夘ノ刻官軍越後國魚沼郡千手駅ヲ發シ
同郡小千谷駅ヱ進軍セントス前日我諜者報ノ云ク小千
谷ヨリ二里前ニ當リテ雪峠芋坂ト云所アリ頗ル險難ノ
由賊兵此巖邑ニヨリテ假ニ砲臺ヲ設ケ防戦ノ備ヲナス
由ナリ此故ニ前夕具ニ進撃ノ分配ヲナス先陣高田二陣

尾州三陣松本四陣松代後陣監軍附飯田松代ノ兵トス又
十日町ニ在ル上田須坂六川ノ三藩ノ兵ヲ以テ別ニ信濃
川ノ東芋坂ノ傍ヲ岩沢ノ渡口ヨリ進軍セシム賊兵モアラ
カジメ此ヲ知リ通船渡船ヲ破リ通路ヲ断アル由コノ故
尾州藩ヨリ千手辺ノ諸船ヲ引テ本道ノ軍ト共三里下真
人村渡口ヘ下シム是芋坂戦酣之時岩沢ニ會シ川東ノ官
軍ヲ渡シ賊ノ後ヲ撃シメン策ナリ當日雨天ニテ道路泥
濘午時真人村ヘ着陣雨晴ル先陣高田ノ兵石名坂ト云処
ニ在左傍山上賊兵ノ在ヲ報ス乃高田尾州分隊ノ山ニノ
ボル前路スデニ砲声アリ斥候報シニ去ル三十丁先ニ賊

兵屯ス砲聲ハ松代斥候士ヨリ發砲ノ聲也ト即尅進軍松
本ノ兵ノミ遅緩不進賊軍カ子テ設置処ノ假砲臺ニヨリ
大小砲ヲ以テ狙撃ス官軍大ニ苦戦ス或云賊川ヲ渡シ東
岸ヨリ發砲スト衆心競々タリ仍テ先ニ真人渡口ヘ下セ
シ舟ニ松代一小隊ヲ分テ松本兵ヲ假シ川東ニ渡ラシメ
衆心ヲ安ンス且又高田ノ兵本道ノ右川岸ヲ進ミ賊ノ側
面ヲ撃シメ松代勢ハ左ノ山上ニ回リ賊ノ後ニ出シム監
軍附飯田松代ノ兵モ山谷ノ間ヲ進行賊軍雪峠ノ半腹ニ
テ大小砲ヲ發下ス彈丸裂逆勢ヒ猛然ナリ官軍不屈側面
ノ山ニノボリ砲撃ス四面齊ク攻ム時巳ニ申ノ半尅ナリ

賊兵俄然ト潰散ス是松代勢カ賊ノ右側ヲ砲撃スル故也
仍テ本道ノ兵モ一時大敲シテ進ム賊兵狼狽敗走ス追撃
シテ雪峠麓芋坂茶店ノ前ニ至ル遂ニ雪峠ヲ奪ヒ池ノ原
村ニ至ル時已ニ昏黒追撃不便兵士モ亦労ス仍テ今夜ハ
此処ニ宿陣ス諸隊追々着ス各分配シテ警備ノ居上田須
坂六川ノ兵モ朔ニ後レテ着ス今夜宿陣ノ池ノ原村ハ小
千谷ヲ距ル事一里半賊ノ根拠也仍テ粮食等多分取今日
賊勢二百五十人余大砲二挺アリ翌廿七日小千谷ヘ進軍
前夕賊兵陣営ヲ棄テ川ヲ渡リ長岡妙見村ヘ逃走ナス由
今暁昨日川東ヘ回リシ松代ノ兵松代ノ兵ヲ従テ先ノ賊

ノ空営ニ入リ惣軍ノ至ルヲ待今日暁天ヨリ小出島合戦
拍寄ル官軍大勝利ノ趣追々報知ヲ得タリ

片貝村戦争ノ記事

○五月二日夜賊兵脱ノ町ヨリ関原路ヲ経テ片貝（小千谷ヨリ二里半リ）
ニ来ルト報知ス仍テ官軍ニモ畧（ホボ）分配先陣高田惣勢二陣
尾劔正氣隊後陣松代戦士一隊小銃一小隊并ニ大砲二門
序次ヲ以テ発ス高田尾州期ニオクレテ松代ノ兵ノミ進
テ幸田村（小千谷ヨリ半道半リ）ヲ経テ下山屋村堤上ニ陣ス（小千谷ヨリ一里）同
三日早暁惣軍ヲ片貝ニ進メ斥候ヲ以テ賊情ヲ探ル途中
賊ノ斥候ニ逢フ互ニ砲発メ軍ヲ下山屋村ノ左ニ進ム賊

営片貝村ニ在忽我軍ヘ大砲ヲ發ス我軍モ亦大砲ヲ以テ
相應ス乃チ兵ヲ二道ニ分ツ高田分隊ニ松代ノ兵ヲ加ヘ
正隊トシ本道ヨリ進メ又高田ノ分隊ニ尾州正氣隊ヲ加
ヘ奇隊トシ片貝ノ左鴻巣ヨリ進時ニ已ノ尅ナリ此辺ス
ヘテ平原ナレモ林木翳欝彼我ノ進退ヲ不弁本道ノ兵下
山屋村ニ砲擊ス賊モ又本営ヲ離レテ小溝ノ内ニ潜伏メ
吾ヲ拒ク我奇隊同時ニ鴻巣ニ至ル賊ノ伏兵ニ會ス互ニ
砲戦アリ遂ニ賊ヲヤフリ鴻巣ニ入烽火ヲ以テ兵勢ヲ張
ル當村ノ左二丁斗リ隔テ聯連タル小山アリ山腹ニ小千
谷ヨリ片貝ヘ渉ル間道アリ此処ニ人ノ屯スルヲハイア

リ始出勢前我應援ノ兵此道ヨリ進ムヲ告ク故山中ノ響
彼我不明ニヨリテ高田ノ兵ヲ分テ是ニイヨ〳〵進テ本
営ニ迫リ攻ム時ニ山腹ヨリ秘烈トノ我ヲ横擊スヤムヲ
不得退ク事二丁斗リ林叢ニヨリテ賊勢ヲ拒ク賊兵代リ
テ鴻巣ニ入烽火ヲ揚テ兵勢ヲ助ク鴻巣ヨリ二丁斗リ南
坪尾村アリ我兵ヲ此ニ分テ背腹敵陣ヲ突ントス先ニ山
腹ノ兵渉猟ノタメ出セシ高田勢モ退テコヽニアリ我分
隊トアハセテ後鴻巣ニ迫ル賊腹背ノ襲擊ニ苦ミ片貝ヱ
走ル我鴻巣ノ兵機ニ乗テ片貝ニ進ム後ニ賊アリ山腹ノ
賊兵ト我ヲ打事急也我軍鴻巣ヲ出テ旁ノ小堤ニヨリテ

能防戦ス賊兵復鴻巣ニ入リ燧ヲ挙ク時ニ我本道ノ正兵隊始砲戦数尅頗ル賊兵敗形ヲ見ル松代先陣ニアリ高田勢如何シケン我備ル処ノ大銃隊ヲ誤リ賊兵我後ヲ断ナリト見テ忽チ砲ヲ我大銃隊ヘ発ス我繃重是カタメニ恐レテ逡巡ス是ニ至テ高田猶我兵ノ賊ヲ敗ル、ト疑ヒ自潰テ本道ヲ退ク賊兵機ヲ得テ数道来リ追我ヲ包撃セントス不得已我惣軍退ク松代勢殿シテ下山屋ヲ去七八丁叢莽ニ兵ヲ伏セ賊兵ヲ拒トス賊モ亦コレヲ慮リシヤ燧ヲ挙ヲ不進實ニ一時ノ苦戦ナリ然ハ処援兵トシテ松代ノ別隊上田飯山ノ兵比ニ至ルヨリ上田飯山ノ両勢林叢ニ入賊ヲ探索シ松代ノ兵進テ本道ヲ突加之薩長ノ應援陸続トメ至ルニ會ス直ニ進テ山屋村ニ攻撃松代是ニ次テ砲戦敵復敗レテ片貝ニ走ル茲ニ尾劔ノ兵應援ノタメ先ニ敵勢屯集ノ鴻巣左山腹ノ道ニ出横ニ片貝ヲ撃同一時本道薩長松代ノ兵烈戦大ニ賊軍ヲ敗リ片貝ヲ取賊軍遠走ル先ニ退シ高田尾州ノ兵モ来會セリ諸隊分取不可投拳當日戦争已ノ刻ニ始リ申ノ尅ニ終ル會藩ハ九四百人余ナリト

同日藥師峠戦聞十一篇ニ出ス

上劔辺ヱ被仰出候

○近日一種之強黨等所々屯會シ良民ヲ欺キ盗意暴行候趣不レ畏二天威一言語同断之所業ニ候條右之徒其支配所ヘ入込候ハヽ悉召捕置可二訴出一候萬一多人數手ニ余リ候得ハ近隣之各藩申合急速ニ撃取万民安堵ニ可レ為致候事

東海道鎮撫府總督印

同　副將印

藥師峠争戦記

○前同日同討監軍附松代飯田ノ二小隊片貝村ヘ進軍セントス途中上山谷村ニ至ニ及テ大砲小銃連発ス時前面ヨリ尾劔ノ斥候来リ報ノ云當所ヨリ柏寄街道塚山村ヘ越ハ山アリ藥師峠ト云賊ステニ右山ヲ越来數十丁ノ近ニアリト報ス是ハ片貝ヘ襲ヒ来ル賊兵分隊ノ我軍後ニ出片貝酣戦之時ニ来テ小千谷ヲ侵入セントスル策也我兵ノ此道ニ備ツ者尾劔千賀隊也然ル処行逮ニテ前記聞ニ在シ鴻巣ノ脇坪ノ尾村ヘ通ル監軍自松代飯田ノ二小

隊ノミヲ率テ右藥師峠ノ山坂ニ進向スル事七八丁賊是ノ山坂ヨリ押下ルニ逢相去ル事二丁許ナリ賊兵ハ地理宜キヲ得我兵ハ下ニアリ地理不宜トイヘドモ不得已飯田ノ兵ヲ道ノ右傍ニ列シ松代ハ左傍ニ列ス左右共砲擊メ進賊松ノ大樹ヲ揹ニ取或ノ道ノ凹所ニ在テ其形ヲ不露如雨砲發ス我兵大ニ苦戰ス加之我兵大砲無之候得共勇氣益不撓監軍ノ一大喝ニヨリ右傍ノ飯田勢進攻於是賊兵少々乱左傍松代ノ兵モ亦進擊ス時中央監軍隨從ノ士五六輩突進砲擊委々大ニ進賊軍大ニ敗走二三丁山上ニ退キ大小ノ砲銃連發雨下ス我兵奮激飯田ノ兵左傍ヨリ賊ノ側面ヲ擊賊駭然トシテ又走ル左右及ヒ尾跡ノ兵モ十許人發聲疾攻ム賊処々防戰スレ雖遂ニ支ヘガタク峠ヲステ、敗走吾軍代ツテ山上ヨリ砲擊ス賊兵大ニ潰エ山谷ノ間ニ奔ル者不傷ハ少シ大砲及ヒ弾丸器械兵粮棄テ、途上ニ狼藉タリ片貝深澤ヘ逃ル者アリ塚ノ山ヨリ川ヲ渡リ北條ヘ走ルアリ右川ヲ渡ル時塚ノ山村ニ放火メ我追兵ヲ支フ我兵山中ノ賊ヲ驅テ塚ノ山村ヘ着申ノ刻當日泥途ノ上險坂之戰ニテ兵士頗ル勞ス殊ニ根枫小千谷ヲ距ル二里半孤軍深入事亦難シ兵粮ヲ喫シ近辺鎮撫軍ヲオサメテ小千谷エ凱旋夾ノ刻ニ近シ

八月ノ七日京都ヨリ来狀ノ寫

○七月廿四日暁長岡城官軍固守之処賊兵風雨ニ乘シテ玉藥倉庫ヘ火ヲ懸ソレヲ期トメ賊徒諸方ヨリ打寄官軍ニモ必死防戦候得共何分藥倉之火四面ヘ散シ處々火ノ手上リ候ニ付難踏堪遂ニ賊兵ノ方エ取カエサレ候官軍ニモ死傷多分有之由其内加州勢死傷ノ者四五十人許有之候トノ事也廿五日ニハ官軍御進軍ノ筈ニ候処賊兵ニ先セラレ遺憾此上無之候ヘ共官軍卒伍ニ至ル迫念争ノ勢前日ニ倍イタシ候間孰ハ近々御取カエシニ可相成事顯然ノ趣ニ兼リ申候

尚前書狀相認置早々差出可申候処彼此忽忙延引ノ内今日傳兼仕候ニ付添書申上候長岡城義一端賊兵ニ乘取レ候ヘ共同廿七日又々官軍ヘ御取返シニ相成候由并ニ莊内新潟等ヘ追々官軍御操込ニ相成近々奥羽路御取カヘリノ樣ヲ兼リ候是非々々今明月中ニハ御平定可被成御軍議ニ御坐候

○年々國内ニ用来候暦之儀是迄京伊勢等ニ出板之処今後右伊勢暦等御廢止被ニ仰出暦史官一手ニ相成候趣ナリト

○先頃明石近辺ニ於テ耶蘇宗信仰之者不少候ニ付嚴數

追捕被　仰付人ノ軽重ニヨリ罪科被　仰付タリ右信仰ノ者多クハ貧困人身軽ノ者トモ利欲ニ迷ヒ候ヨリ起リ候事尓ル二士分モ少々相交リ候由可歎事也

論者云外國人居留ニ付テハ右耶蘇天主ノ教厳禁タリトイヘドモ是非々々内々弘通可致春来長崎浦上已来右明石ニ至ル迫支々厳科ニ處セラレ候者ヽコトニ可憐ナリ併愚民ハ格別士人ニ追々信仰ノ輩出来候テハ困入事也中古モ高山右近太支小西摂津守等右頭人トメ士分ニモ往々惑レシ人有之小西ハ去モタラス候ヘドモ高山抓ハ一時之雄豪支スラ如此當時一般ノ利世界上タル人ニ追々右信仰ノ人多成候ヘハ孰レ其弊下民ニ可及可歎事也

○先来ヨリ隠岐國ヘ流刑ニ相成候者共今般大赦被　仰出候ニ付其罪ヲ被　免支々帰國被　仰付八月九日凡八十人斗リ駕ニテ兵庫ヘ着致候

○八月八日賊徒細作大阪市中ニテ乞食体ニ相成居候ヲ大阪府ヨリ八人斗リ追捕相成候由火薬抓モ持居候由

○已亥以来長藩憤死殉死之輩并ニ當春ヨリ戦死ノ藩士墓碑當浪花茶臼山ヘ御取建ニ相成候由

○當浪花勤進相撰ハ例年六七月ノ間ニアリ尤近年不経

済ニ付江戸力者ハ不来京坂中相摸ニテ與行致来候処関東當今ノ時勢ニヨリ當浪花ヘ歸来レ力者モ多ク當年ヨリハ万事復古シテ場所モ南地可然談合出来久々大相摸與行之心ニテ右大阪府ヘ願上候ヘトモ今以御免許ノ御沙汰無之追々延引之趣ナリ

或云上ヨリ御免許延引ノ次第ハ京師力者ハ御旗御用相勤居候東京力者トテモ吏々御用兼リ居候由只當地力者ノミ素殖ニシテ加ル二平日猛威ヲ張リ下民ヲ苦メ候者モ不少由カヲテ御聞込ニ相成候故トカ

○加陽宮御事御不審之次第有之春来参　朝御差止ヘ相成御塾居有之候処今般藝州浅野侯ヘ御預ケ被仰付同家兵隊ヲ以警衛當地西本願寺拠所ヘ御着頃テ藝州表ヘ御下向トノ事ナリ

但シ警衛ハ藝劔侯ノ兵隊ノ上浪花隊ヲ御差添右御旅舘四面ノ辻々警衛イト厳重ニノ尤モ夜中ハ往来ノ者ヲ御改ニ相成トノ事

○崇徳天皇御神霊今般御還幸被為　在候ニ付當八月十九日御迎　勅使御下向讃州高松邸御一泊ニテ直様御發向トノ事ナリ

但シ　宣命御幣物有之候趣

○當浪花東堀濱地ニ有之候商人所持之土藏御入用ニ付
早々明渡シ可申御沙汰有之候趣也其故ハ今般商法會所
御取開ニ相成諸産物等御收納ニ相成候為ナラン欤尤先
般已来中ノ島山崎ヨリ西江淀屋橋通迄立退被仰付其
跡江右商法會所御用土藏御新造可有之由御決定之処右
ハ暫時御延引ニ相成候由左候ヘハ東堀土藏御入用ハ暫
ノ間ノ事ニテ追々土地御見繕之上御築造ニ相成候事ニ
ヤ

○今天滿川崎舊幕府破損ノ奉行宅地跡ニテ錢貨局御開
ニ相成冨國ノタメ益錢貨御鑄立トノ事也今般スナハチ

寛文通用錢并ニ白銅錢等新鑄被仰付候由

○八月中旬大阪府ヨリ博徒共嚴敷追捕被仰付タリ近
年當地所々ニオイテ宮堂上諸侯方御用所或ハ人足屯所
ト唱博奕ヲ業ト致シ候モノ多ク有之候ニ付御一新後モ
度々御觸渡モ有之諸侯邸内ノ外人足屯所等コトヽク
禁止被仰付候ヘハ今以内々悪行ノ者アル由故今般右
頭人追捕ニ相成候

副啓

今般新聞紙日々上梓ニ付廣莫ノ事故社中ノ〻ニテハ視聽共ニ脫落ノ多カラン事ヲ歎ス希クハ好事ノ君子新ニ聞見ノ事アラハ早々弘通所河内屋忠七河内屋清七ノ両家ヘ報知アレカシト尤モ内外共上下ノ得失珎奇ニ至ル迄虛妄無之情實ハ早速上梓メ天下ニ告セン併暴說虛誕ノ分ハ撰者此ヲ擯出スヘシ右早ク報知ヲ得ハ左之通

十枚ニ付　金三分

一行ニ付　銅錢貳穴

一枚ニ付　金壹朱

右礼謝トメ進呈セン

内外新聞第十二

海外新聞譯

○過シ日英國龍動府ノ新聞ヲ閲スルニ一事件アリ其故ハ英國ノ北ニアタリテヱビシニヤ地名ト名付ル獨立ノ國アリ先年以来シバ〻定約ヲ設ケテ我　皇國ノゴトク貿易ヲナシマコトニ和親ナリシ処近ゴロ英國ヨリ戰艦ヲ相向ケ遂ニヱビシニヤト戰爭ニ及ブ由ソノ次第ハ一時何ノユヘニヤ英國ヨリ公使某ヲヱビシニヤヘ遣ハセシ処其公使ヲ殺害ニ及ビタリ尓レドモ英國ヨリハ一言モ不出重ヲテマタ公使ヲ遣ハセシニ復コレヲ殺害

ナス於此英ノ大ニ忿激ヲナシ數万ノ軍兵ヲ卒シテ竟ニ右エビシニヤヲ取リ其國王ヲ殺シ其太子ヲトリコニシテ歸ルト元来コノエビシニヤハ大國ニシテ且産物モ多ク至テ富饒ナル國ナリ公使ヲ殺害セシハ何ゾ子細モアラン後日委細報知ヲ得ハ速ニ布告スヘシ

清朝新聞訳

○此頃不良ノ者アリテ中國ノ婦人四十人ヲ拐シテ金山ト云所ヘ誘キ出テ娼妓ノ類ニ賣ント謀リシ処右金山ニ不斗在留セシ中國ノ商民共大ニイカリテ官ニ訴ヘ厳断ヲ請フ官府ヨリ双方呼出セシ処婦人四十人ハミナ年少ニシテ美人斗リナリ官吏婦人輩ニ問云其方共ハカ子テ娼妓ノ類ニ賣ルヽ事ヲ兼知シテ此ニ到ルヤト婦人ノ云決シテ右様ノ事ハ存不申只我輩ヲ誘候者云金山ハ女工ノ價甚貴シテ中國ノ一年分金山ニテハ一月ニ收納相成候ユヘ當地富家ニ仕エ傭工ヲナサントスル也ト官吏云可ル尓是畢竟年少ノ女子ノ親戚無之者ヲ誑惑スル者トテ右婦人ヲ官ヨリ夫々周旋シテ給料モヨクメ金山ノ富家ニ傭工タラシム右不良人ハ利ヲ不得ノ上中國ヨリ四十人ヲ携エ来リシ費ヽテ損亡ニナリ其地ヲ追拂ハレ候由婦人ハ元ヨリ商民迫禍ヒ却テ福ヲ得テ大ニ喜ヒシトソ

同譯

○鶴山縣ト云所ニ黄生某ノ子スコブル風流ヲ好ミ某寺ノ僧某ト莫逆ノ交リヲナシ常ニ互ニ往来ス夫故右寺ノ僮僕モ至テ入魂ニテ迎送トモ一々和尚ニ報ゼズ出入次第ニ〻カス或時黄生某来リテ例ノ如ク案内モセス直ニ和尚ノ卧房ニ入一美妓アリ大ニ驚テ逃ル黄生某心中穏カナラザルニヨリ忽チ帰ラントスレヒ和尚抱キ止メテ不許ニ付不得已坐ニ就ク和尚忽チ卧房ノ関鎖ヲ堅固ニナス様子ユヘ妻手脱レガタキヲ慮テ天ニテカセテ居ル処ニ暫時アリテ和尚右驚キ逃シ美妓ノ外ニ又一妓ヲ携ニ出温頻ニテ頻リニ杯ヲスヽメ右ノ一妓ヲ以テ黄生某ノ心ヲトラントス黄生某ハ心ニ疑懼アルユヘ欲セズ翌日又帰ラン事ヲ求ムレヒ決シテ不許連飲三日ニイタリ和尚ト両妓ノ酔卧セシト僮僕ノ懈リトヲ考ヘ逃走シテ帰ル危カリシ事トソ

○北堀江三丁目炭屋弥吉郎ト云両替渡世ノ者方ヘ當八月中旬夜石割強盗押入候処同町ニ秋山某ト云人早速馳行六尺棒ヲ以六七人ニ敵シ遂ニ右盗賊ヲ追拂候由然ル処右秋山某ノ同居人某右秋山一人無カニテ数人ノ賊ニ敵シ候事ヲ案シコレヲ援ントト跡ヨリ右場所ヘ駈付候途

中秋山某ニ追レシ賊ニ出逢ヒ不斗創ヲ負候趣ナレトモ
療養ハ出来候トカ
評ニ云繁華ハ人猜スヘテ軽薄ニシテ隣家ニ強盗ノ入
シモ不知負ニテ只自分ノ家ヲ守ルノミナリ火災トテ
モ右ノ如クニテ燃上リシ片直チニ近隣ヨリ一同申合
セ駈付テ消シ防ガハ大底ハ鎮リ可申ナレトモ近隣ニ
火災アレハ忽チ我家具等ヲ片付ルニ掛リ居テ消防ヲ
棄置候間大火ニ相成事ナリ右秋山氏ハ炭屋弥吉郎ト
ハ平生別懇故カハ不知候ヘトモ皆カクアリタキモノ也
縦令(タトヒ)飢道未熟ニモセヨ多人数一致シテ取篭ナハ強盗
ノ防キハ商人ニテモ出来ス事ハアルヘシキ歟
○第十編ニ布告セシ鰐谷一丁目ヘ御用ニ相成候貨幣局
狭小ニヨリ南ハ九之助橋通東ハ東堀西ハ竹屋町迄立退
キ被ニ仰付ニ今般御取廣ケニ相成候由
○難波村ニ有之候舊幕府錢鑄場跡地面屠者(エタ)ヘ被ニ下置ニ皮
干場ニ相成候
○東京　御臨幸ニ付當地町人供奉被ニ仰付ニ候者六七
輩有ニ之候趣其内名ヲ聞知セシハ　山中善右衛門
廣岡久右衛門

右御道中御賄役之由右等之外ニモ有之ヤ委細後編ニ出
スヘシ右賄料トシテ一人毎ニ　朝廷ヨリ金千両ソヽ
給ハリ候由　長田作兵衛
殿村平右衛門

○仙臺米沢ノ両藩朝家ヲ叛候様相成候ハ反間之者アリ
謀書ヲ以テ相誘候トク露顕ニヨリテ或縉紳家ノ間諜者
或ハ西国ノ諸侯エ御預ケニ相成候趣
○當八月十五日東京鉄鮑洲ニ開港互市御免ニ相成リシ
トク

○同廿九日　主上泉涌寺并ニ山科　山陵　御参幸
被為在候事
○第十一編ニ布告セシ賀陽宮（中川宮御事也）藝州侯ヘ御預ニ相
成候次第ハ左之御沙汰書ニテ可知

賀陽宮

兼テ御不審ノ筋有之被止参　朝謹慎被　仰付置候処頃
日不軌ヲ謀候趣（正シカラヌ企ノ事）全一已之存意ニテ徳川慶喜等ヘ密使ヲ
差遣シ可内應隠謀及露顕　勅使ヲ以御糺問ニ相成無相
違旨言上慶喜ニ於テハ悔悟恭順愈以謹慎罪在候処　皇
族トシテ不容易所為甚以不届至極ニ付厳重之御沙汰ニ

可被及筈ニ候得共格別之　廉旨ヲ以寛大之典ニ被行親
王弾正尹宣旨二品位記并　御養子被ニ　召上安藝少將ヘ
御預被ニ　仰出候事

右之通賀陽宮ヘ御沙汰ニ相成候間為ニ心得相達候事

行政官

八月

論者云仙臺米沢ノ　朝家ニ奉敵候様ニ相成候ハ謀書
ヲ以テ相誘候者有之故トソ聞シカ慶喜等ヘ密使ヲ被ニ
差遣候トアレハ右同時ニヤ

○美濃大垣戸田侯ヘ今般二十万石御加秩(カツ)有之由春来謝
罪後彼此丹誠ヲ盡シ被抽軍忠候中ニモ當七月北越長岡

城官軍ヘ御取返シニ相成候節ハ殊更盡力有之シ故トソ
スヘテ　朝廷ノ賞ヲ重クシ罰ヲ軽クシ給フ事可見難有
事ナリ又越後ロモ賊徒敗績ニテ追々官軍ノ手ニ属スル
者多キ由左候ヘハ仙臺米澤トイヘ𪜈追々謝罪シテ官軍
ニ降ルヘシ

○八月廿九日先般御延引ニ相成候泉涌寺并ニ山科　山
陵　御参拜被為在候事

彦根ヨリ来リシ人ノ報知

○八月廿四日大津ヨリ米原(ヨハラ)ヘ毎日出帆ノ早船アリ然ル
ニ尾州ノ人某火藥ヲ積ント欲ス然レドモ火藥運送ハ舟

人キラヒシ故ドロギント詐リ数十箱モ積込シニ同船ノ者二十人余モアリホサキノ方ヘハ人ヲ乗セ右火薬ヲトモノ方ヘ積シニ舟師午飡ヲ炊ントスシ火ヲ焚ケルニ其火焔火薬ニ移リハゼタリ舟中ノ者六人即死其余彦藩ノ人等養生不叶者多カリシ由彼積ミ主ノ人ハ自殺セリトソノ硫烟覆天騰所藩ノ詰合ノ士賊徒蜂起セシカト驚キ馳セ出シ由火薬運送ナス者慎ムヘキ事ナリ

内外新聞第十三

海外新聞譯

支那番禺縣ノ属村ニ直村ト云所ニ農人陳氏ト云者アリ兩後近山ニ行シニ中路地忽然トサケ陷ル大ニ駛テ四方ヲ見レハ濶サ數十丈ノ大穴ノ内ニアリ中ニ堂アリ甚黑クシテ何クヘユクヘキ路モ不知無拠右穴口ニ坐ノ居ル陳氏ノ家人夜ニ到レモ主人ノ不帰来ヲ怪シミ尋之テコヽニ到ル穴中ニ人ノ喊聲ヲキク其聲甚タ主人ニ似タリ乃チ縄ヲ下シテ繋出ス歸テ村人ニ委細ヲ述フ好事ノ者明日往テコレヲ觀ル有磚長サ尺餘皆字ヲ刻シテアリ糊

塗ヨク不ル弁詩アリ

痛惜英雄喪水嘔何年運抵轉皇州是誰兵助同心力殺盡謀軍報主仇　余外多不能識○観詩之詞旨似是宋末遺老口氣特録之以奉博雅覧之出香港新報

同訳

羊城ニ一庵アリ老尼姑此ニ住シテ年アリ一美少婦ヲ養フ無子ノ婦アレハコノ庵中ニ到リ祈レハ必ス子種ヲ降スト而メ厚ク其酬謝金ヲ求ム或人大ニ怪テ尼姑ノ他出中両三人相トモナヒ右庵中ヲ探索ス一美少婦アリ大ニ驚キ恐懼スル体ナリ依テ平生子種ヲ降スノ術ナラン事ヲ責督ス少婦泣テ曰ウレ真ノ女ニ非ス五歳ノ時人ノ為ニ拐カサレ此庵中ニ賣ラル十五歳ノ時ヨリ髪髪衣服ヲ皆女粧ニセシメ日々脂粉ヲ施シ言語行止トイヘトモスヘテ女様ヲナサヽレハ鞭ヲトツテ責ラレ彼無子ヲ祈ルト云ハ畢竟我ヲシテ彼婦人ニ媚セシムル也ヨリテ孕モアレハ孕ヲサルモアルヘシ婦人モ已カ身ヲ汚サレシヲ恥テ人ニ不語事ナランヲ聞者大ニ驚テ右礼謝ノ金数ヲ尋レモ皆尼姑獨私シテ不与由ユヘ俱ニ官ニ訟ヘン事ヲ尼姑ニ責ム尼姑重賄ヲ彼数人ニ贈テ其事ハヤミシトソ

編者云此両件ハ前篇ニ布告スル清朝新聞ノ次ニ可出ナレト紙數有限外新聞ノ障ニナレハ當十三篇ノ始ニ出ス孰レモ中外新聞ノ譯ナリイツレノ國モ善悪共人情ハ同キ事可見

○八月十八日因州侯上洛之由

○高松藩兵隊五百人東京ヘ出兵被仰付廿六七日頃京師ヨリ追々下坂續テ出帆ノ趣ナリ

○前篇ニ布告セシ東京鉄鮑洲開港ハ伊斯波尼亜國ヨリ願シユヘトソ

○八月廿七日辰ノ刻御即位ニ付市中休シテ宜敷商賣ハ相休シ例年神祭ノコトク軒提燈差出シ隨分賑敷可致御沙汰ニ付造モノ踊等モ往々有之レト但シ當日公事訴訟モ御廢止天保山ニテ御祝鮑有之

○廿九日薩州兵隊東本願寺拠所ヘ着アリ君侯ニモ近々御登京之由

○九月四日　崇德天皇神靈御還幸當地高松邸御一泊ナリ播州室津ヨリ御上途西國海道十三日天滿ヨリ高松邸ヘ入御

前後供奉高松兵隊

御神櫃

勅使　　中院大納言様
殿上人　　三條西少將様
右翌日　還御京今出川飛鳥井町へ御鎮座　白峯神社ト
奉称候事
○坊城二位様　御親兵ノ惣督トシテ本町搦役所へ御着
兵隊凡六百人斗リトソ是ハ過日賊船近海へ来リレトテ
彼此諸侯ヘ海岸警衛被仰付シ惣帥ノタメカ
九月五日奥羽陣中ヨリ彦根藩へ報知之写
○其後官軍追々討入ヒ相成廿日廿一日迫日々勝利
ニテ猪苗代ヲ越ヘ二里余モ相進シ若松城近ク進撃ニ相

成候ヲ認メ探索方小堀勝之進今一人着致申候其後モ尚
々探索人出置候得共未タ不帰候ニ付確報ニテハ無之候
得共廿三日城下勝戦ニテ四ツ時頃遂ニ落城ニ相成候趣
出張土佐本営ヱ注進有之候ヲ見請帰候ト申者ヨリ傳聞
仕候右様之次第ニテハ奥羽ノ根本タル會津トテモ暫時
ニ落去ト存申候猶又昨夜二本松在陣之参謀ヘ上杉方軍
監重役罷出謝罪降参致候由右ハ是マテ九條殿鎮撫トシ
テ御下リニ候得共
王師ノ御取扱トモ不存候件々モ有之候ニ付諸藩約定防
禦致候得共追々　王師御征討ニ付始テ真ノ官軍御征

討タルヲ存知元ヨリ　王師ニ抗シ候心ハ更ニ無之字
護之儀御許容ニ相成候ハヽ庄内仙臺等説降可申若歸順
不致候ハヽ其節先鋒ト相成進擊可仕候趣申出候由御沙
汰之有無ハ不存候ヘ共右等之次第ニ候ヘハ追々鎮定ニ
可相成存候

大阪新聞

野田新家ノ寺院ニ在留セル福山侯ノ家臣某ヒストルヲ
以テ鉄砲ナリ誤テ同村徳左衛門ノ子某當年十二歳ナル者
ノ胸ヲ貫ヌク其子立トコロニ斃語合ノ諸士扶持シテ蔵
舘ニ還リ懇懃ニ介抱スルトイヘ共終ニ養生不叶シテ没
ス乃重役ノ人々其両親ヲ召ヒ金三十両ヲ遣テ丁寧ニ葬
禮ヲ営ム諸士過半相送ル其親喜ヒ曰誠ニ貧民ノ子ナレ
ト諸君ニ送ラル、事分限ニ過タル大慶尓云此事大阪府
ニ相聞ヘ福山邸ニ令ヲ下シ改メテ百五拾金ヲ賜リシト
ソ

論者云クヒストルハ重寶ノ武器ナレト此器城船来セ
シヨリ勲功ヲ奏スルヲ聞カス誤テ良民ヲ害スル事ハ
往々聞之所持ノ人深ク可慎事ナリ

〇九月廿二日　主上御降誕日ニ付町々神祭ノコトク
軒下ニ釣提灯ヲ致シ辻々ヘハ大提灯ヲ出シ奉祝賀尤モ

所作事ハ何ナリ共存付次第ニ独行ヒ随分川陸ニ賑々敷
可致候尤差障リ無之商業ハ相休ミ可申候由被　仰付候
但シ喧嘩口論并ニ手過チヨリ出火抔無之様可致事
同日七十歳以上之者ハ難波御堂ニオイテ賜モノ有之
候間朝四ツ時ヨリ可罷出之由被　仰出
同日鰥寡孤獨廢疾之者并ニ極貧之者ハ一時之恵ヲ以テ
可遣間町々年寄ニ手元ニテ篤ト相調惣年寄共手元ハ人
員可申出候尤同日右御堂ハ町役人付添ニテ可罷出之由
被　仰出候事
○官橋御普請之儀是迄淺田屋清藏請負被　仰付置候処

此度請負差免向後當府営繕方ニテ取扱候由被　仰出
○勅使平松甲斐權介殿蒸氣船ニテ御歸着安治川口ヨリ
御入阪築島町松平左衛門尉屋敷ニテ御一泊之事
○東京　行幸御出輦来ル廿日御治定之由
○十六日七ツ時　勅使平松甲斐權介殿築島町松平左衛
門尉藏屋敷濱ヨリ御乗船淀川筋御登京之由
○外國人ヨリ金銀品物等ヲ借請自分所持之家屋敷ヲ以
引當ニ約定イタシ候抔此度厳敷御停止被　仰出候事
○前件ニ布告ス　御幸イヨ〳〵廿日辰尅御發輦ニ
テ大津駅ヨリ御鳳輦夫ヨリ御板輿ニテ供奉ノ公卿及ヒ

長州ノ若殿等警衛ノ諸侯凡ソ三十有余ノ武家方ナリシ由

○御誕辰御祝筵ノ當日七十以上ノ者難波御堂ニ集リシ人數凡ソ六千人余木綿三枚土器杯ニテ酒ヲ賜リ肴ハ于ガマス一枚又極貧ノ者凡ソ千五百余名鳥目一貫文ヲ被下又入牢ノ者九ソ八百人余ハ一人ニ付價一貫文程ノ魚物ヲ賜リシ事又乞食ニハ御城馬場ニオイテ鳥目五百文宛賜リシ事

大津縣令所目安箱ヘ投入建白ノ詩并陳情

累連暴雨箋又炀、太湖漲天望悠々、粱田泯沒泥中玉、民屋漂蕩陸地舟、風雨年々山岳壞、流水日夜砂作丘、勢多苑道及大澱、屈曲紆回且長流、漸到衆洽漸平坦、隨攪隨壓孰能收、君不見昇平百年山木屹、桑田成海淵成洲、王政一新別英斷願献芹心欲除憂懇祈湖北開拓策此策由来議未周江北越海總數里半有通川應加修千里運輸三尺水北海近畿始自由劈山何必勞賦役人間豈無蒸氣犂國益增進水害退照鑒神禹濟世籌蒼蠅之鳴冒万死文公

廳前謝叩頭

或評ニ云此詩下作ト雖モ憂國ノ情實詞表ニ膨脹ス何者ノ作トスルヤ咎コレ僕カ拙作ナリ僕ハ俳家專門ニシテ素ヨリ文辭ニ不慣巧拙ノ論ハ姑ク恕セ抑當年夏月以来大雨連々近畿諸所洪水ノ為ニ横荒百般ナリ就中本州眼前太湖古今未曾有ノ滿水ニテ諸民ノ困難挙テ云ヘカラス況田地數十万石水底ノ物ト成公私ノ損亡幾ヲ筭スヘカラス可惜哉實ニ見聞ニ不忍去ル六月江北開拓ノ議ヲ建言シ此憂害ヲ除キ更ニ北海ノ運輸ヲ弁シテ當地ノ商業ヲ盛ニシ湖辺數万ノ田地ヲ得テ國益ヲ増進スルノ策ヲ献芹スト雖モ當縣令府御多端ノ故ニヤ今日ニ及フ迄其議奈何ヲ窺ヒ難シ猶笈月ハ減水ヲ頼ム処アリ月ヲ起テ漸ク相減スト雖モ秋来暴雨不歇且勢多ノ下流土砂依然トシテ流ヲ支ヘ其余周圍ノ百川沙礫ヲ奔發シ湖底隨テ浅クナリ水四方ニ溢易ク頃日再ヒ民屋ヲ浸サントス且冬月是ニ北風ヲ加ヘハ當地ノ危急ヲ計ルヘカラス諸民ノ悲歎呰ニアリ然モ當今賢良ノ諸有司多分他邦ノ方ニテ或ハ本州ノ地勢ヲ實檢シ給ハス故ニ因循ソノ遠度ナキニ似タリ或人カ云子

カ云如然リナンソ再應上言ヲ敢テ命ヲ蒙ラン事ヲ願ハサル咎男子誰カ功名ヲ欲セサラン況ヤ眼前此大恵ヲ觀ルヲヤ唯白首赤脚ノ分ヲ省ミ長嘆ノ已ノミ或人云不可也〳〵方今一新鎖細ノ末論ニ拘泥スヘカラス倘再建猶遲疑アラハ速ニ添翰ヲ申賜リ京都府ニ願出ヘシ採用ノ理アラハ其出身ノ上下ヲ問セ給ハス都テ有戈ニ命シ給フノ秋ナリ事遲延メ發真ノ機ヲ失ハヽ江北ハ雪早シ殆ト手ヲ下ス事難カルヘシ子努力セヨ咎諾ス至愚庸劣ト雖モ辱ク此大命ヲ蒙ラハ一員ノ主幹ト一箇ノ撿監ヲ奉請シ兼

テ同志ノ輩ト共ニ死ヲ以テ周旋盡力速ニ成功ヲ奏セハ特リ國民ノ幸ノミニアラス國家ノ幸ニノ天下永世ノ洪福ナリト云ヘシ依テ不顧恐拙作并素志ヲ陳ノ奉驚大廳速ニ寛仁ノ大英断ヲ偏ニ奉懇願候

慶應四年戊辰八月

正風庵乙也謹拜

右之投書御開キ即日ニ召出サレ奇特ノ建言御満足ノ由深ク御褒賞ニ預リ追々御採用ニ可相成猶又其外大小何事ニヨラス善言微サセラレルニヨリ不憚忌諱申立ヘキ由ノ命ヲ蒙レリトヤ世外人ニハ珎ラシキ建白ナリト上下挙テ称讃ス故ニ早速申通シ候

内外新聞御社中宜ク賴上候

仙臺直書之寫

○會津追討之命ヲ奉シ出兵候降伏謝罪之廉相立諸藩一同及歎願候ヘ共　御許容不相成終ニハ庄内無名之追討ヲ加ヘ候始末九條殿下之思召ニハ無之候ヘハ叡慮ニテ尚更無之奸徒　朝廷ヲ誣罔シ政權ヲ竊詐謀殘忍ヲ以テ私ヲ成候ニハ無紛依テ奥羽州ノ藩々盟約大議ヲ伸禍乱ヲ除キ　皇國ヲ維持候事予カ志ニテ大小之諸臣ハ申ニ不及庶民ニ至ル迄此志ヲ謝シテ予ヲ助ケ勉励シテ怠ル事ナカレ委細ハ奉行共可申也

風聞

○靜寛院宮様御剃髮之由

右ハ　大總督宮御逢有之

○薩藩森金之丞ト申者亜米利加ヨリ一昨十六日歸阪同國至テ無事民部大輔様同國御滯在之由且日本情態能相分右金之丞六月十八日迄ノ形勢彼地ニテ聞得歸候由

越後路ヨリ早追ニテ来ル人ノ報告

○元来越後之諸侯ハ寂初ハ不得止賊軍ニ隨ヒ居候方モ有之共追々官軍并ニ仁和寺宮様御出馬ニ相成直ニ軍門ニ降狀ニ相成候尤越後芝田侯ハ賊庄内ヨリ呼ニ来リ候

ニ付出陣ニ相成候処途中ニテ百姓共凡六百人斗リ黨ヲ
結ヒ通行ヲ差留全ク百姓ノ為ニ朝敵ノ名ヲ下ヌカレ
シトノ事

○當時芝田城ニ仁和寺宮様御在陣之事

○越後長岡城ハ官軍ヨリ打取既ニ屯集有之候処又々賊
之手ニ入候トノ風聞有之ハ全ク再ヒ目ノ焼失ハ賊ヨリ
女ヲ以テダマシ付火ヲ致サセ候由

○會津城ハ全ク先月廿三日ニハ丁斗リ隔テ官軍ヨリ發
炮ニ及ヒ段々苦戦ニ相成両方ニ死傷人數出来候ニ
付官軍一先十六丁斗リ引退キ小高ヶ山ニ屯集シテ大炮
ヲ以テ攻城ニ及終ニ落城イタシ候由是ハ全ク其場ニテ
見受候由即日若松ヲ發足致サレ候テ途中ニテ差リ候ニ
ハ弥城主ハ降伏有之候由

○庄内ハ最初ヨリ攻口ニ不相成候処越後口白川口両道
之人數合シテ攻撃ニ相成候ニ付不遠落城ニ可相成哉勿
論上杉ハ軍門ニ降伏ニ付便利ヨク道ヲ通行ニ相成庄内
之頗ル要地ヨリ攻入候由

○舊幕府老中小笠原壹岐守事改名シテ庄内勢ニ入テ惣
督イタシ居候トノ事

○仙臺ヨリモ謝罪歎願之由

南部ヨリ秋田ヘ書面之寫

○一筆啓上仕候然者此度庄内御再討被　仰出候儀ハ何故ニ可有之哉先達テ總督府ヨリ御達ニハ德川家恢復ノ儀主トシテ取斗且薩邸ニ暴動イタシ候段庄内ヘ罪狀被仰出候得共是ハ君臣之分無余儀次第ニテ深ク可憚次第ニモ有之間敷

朝廷ニテ精實御憐察被成下候ハヽ御容恕之道モ可有之ト先達テ仙臺表ニテ御同盟之上尊藩并ニ弊藩トモ庄内征討之兵解之儀ニ御坐候且九條殿盛岡御滞陣中尊命ニテ此上兵力ヲ不用奥羽御鎮撫御歸京被遊候肯寡君ヘモ

度々御直命モ有之拙者中迚難有感佩罪在候然ル処久保田表御轉陣無故再討被　仰出候ハ全ク九條殿御底意ヨリ被為出候儀ニハ有之間敷左右執事之私念ヲ以被　御出候儀哉ト疑惑罪在候然ル処尊藩ニテハ右ヘ御同意被成過日仙臺表御同盟之信義ニ背カレ剰ヘ仙臺之使節ヲ暗殺梟首被致候段何等之御處置ニ可有之哉難落着候庄内ニテハ暴動之兵飽迄モ相拒ミ仙臺米沢始メ各藩尊藩ヘ前書問罪之兵差向候儀ニテ應援兵朝夕催促ニ及ヒ弊藩ニモ無余儀此度両藩角ヘ出兵御境内ヘ臨ミ居候併シ尊藩ト弊藩トハ旧来御隣交之御國柄且宗祖兄弟之御續

ニモ有之候ヘハ干戈ヲ交候儀實ニ祖先ヘ對シ残念至極之儀ト奉存候隨テ前後篤ト御深考之上御改心御解兵奥羽同盟之御處置ニ御立戻リ奸邪ヲ除キ民ノ塗炭ヲ御救ヒ天下之為真ニ勤王ニ御歸リ被成候効驗相立候ハヽ強テ迫リ可申筋無之亦不及御同盟之向ヘ幾重ニモ周旋之致方モ可有之奉存候此段御隣柄ニ付右得御意候以上

八月

秋田中將様御内
茂木筑後様

盛岡中將内
白井藏人
猶山佐渡

内外新聞第十五

海外新聞譯

○羊城蔣撫ト云人知事トナリシヨリ嚴重ニ賭博ヲ禁ス羊城ノ内外弊絶風清蔣撫任ヲ去ニ及テ瑞督又復嚴禁メ城廂ノ内外ニ在ル衙裏及ヒ店中散子等ヲ悉ク擲棄ス亦更ニ一律肅清ヲ見ルトソ

同譯

○上海城廂ノ内外孤子貧民多クアリ朱氏九人縣令トナルニ及テ施スニ柴布粮米ヲ以テス又極貧ノ者ノ親族ニ可靠ナキ者ハ皆收養スル事一月ニ限ル因テ貧民德政ヲ

蒙り人々奈谷ノ春ヲ回ス心地スルトソ
編者云此両件ハ我邦モ御一新ノ後弊風ヲ改メ清風ニ
及ヘル事尽多シ又貧民ヲ恤ミ給フモ十三篇ニ布告ス
如シ其政體ノ変革スル事万里ヲ隔ルモ同シ是時運ノ
然ラシムルカ人力ノ然ラシムル乎

岩倉殿ヨリ鎮西西山ノ寺院ヘ御達ノ写

○今度　御東行御用ニ付金五万両急々其宗門近畿鎮
西西山之向々ヘ申付上納可有之尤為融通猪幣五万両當
殿ヨリ相渡候事

八月

華頂御殿ヨリ御達之写

○今般　御東幸被仰出候処僧徒ニ於テ相當之勤
王可申上者勿論之處即今右　御東行急務為御用弁近
畿一宗内寺院ニ於テ金五万両上納被仰出候當節柄師
檀トモ精々申諭盡力可有之就テハ出格之訳ヲ以猪幣五
万両御下渡被成遣候間山城丹波近江大和之國未寺又末
寺舎ニ至ル迄不洩様急卒ニ相達上納可有之此段厚
頼　思召候事

辰九月

一心院　末寺共江

○二條左府公　鷹司右府公　近衛左府公

徳大寺右府公

右今十六日被為召候何等之御用邊ニ候欤難奉量候へ共

御留主等之御用ニモ可有之哉ニ兼リ込申候此段御知セ

申上候以上

九月十六日

九月十二日着伊州ヨリ京邸へ書面之写

○一筆啓上仕候幹吉太郎儀八月廿日於奥州表戦死仕候

此段彼表出張之荒木御氏并鉄吉ヨリ申来候ニ付此段為

御知申上度如斯御坐候恐々謹言

九月六日　野口文吾

藤先生様　秀興

荒木氏ヨリ参候趣

○八月廿日仙臺領濱手今泉戦争暁ヨリ暮テ味方帯刀

以上百七十人程敵方千人斗ト夕ニ至リ追打凡百人程打

取

味方打死

鉄炮頭　服部作左衛門

組士　野口吉太郎

岡本勇組　田中芳三郎

右打死之外深手浅手ニ惣ノ共ニ四十一人名前記シ有之候ヘ共届書面々有之候ニ付畧之

服部作左門組　小西角次郎
同　石崎吉二郎

右之通何レモ必死之戦争小勢ニテ大敵ヲ打破リ申候吉太郎儀既ニ大敵進ミ来味方玉薬乏敷既ニ手詰ニ及ヒ敵二人進ミ来候処一人打伏申候ヘ共一人逃去候処追撃又討取二ノ首ヲ左ノ手ニ持立上リ候処九五十目斗リノ玉胸先ヘ飛来リ候天晴ノ打死扨々目覚敷事一紗恐感之至リニ候御愁歎之程ハ奉察候乍去實ニ抜群之御働末代迄ノ御功名呉々モ勇々敬感涙ニムセビハ納棺御葬送乍不調法私万事引受無滞夫々為相渉申ハ尤御上ヨリ厚々御賄ち下ハ迚難有可ち思召ハ謹言

鉄吉ハ直ハ右死骸御取片付ち成ハ処敵次第ニ進ミ来十町程味方引ヌハ成敵ハ土手境ニテ喰留メタ七ツ頃ニ持堪ヘトハ然ハ長州兵敵ミ裏手ヘ廻リ大洲兵少ミ前面ニ加リハミ付味方大ニ力ヲ得進ミ追打ニ相成敵百人斗討取ハ乍併味方モ死傷四十余人扨々残念之事ニ御坐ハ鉄吉ニハ敵追打ハ如又敵一人後より組付短刀ニテ脇腹下ヲ忍ぐりハミ付少ミ手負ハ〻其中後より神谷善

次郎進ミ来右敵ハ打留中ハ深手ニ御座ニハ相成ハ〳〵た
格別ニ儀ニも無御座ハ万一無拠変代ニ相成ハ〳〵ハ是
ニも御同行御帰ニ相成ハ格別ニ可仕ハ万一安堵可ニ成ハ
右之余ニ儀ハ畧之ハ是丈ケニ事ニ外ニ〳〵ハ一切不申上ハ
ハ〳〵ハ御坐ハ故太中上ハ先年御熟
情御世話ニ頂りハ刀ヲ帯て参りナハ
鉄吉ハ吉太郎之弟藤先生ハ右兄弟ニ剣術ニ師也当時
在京なり

三日月藩より聞取書写

○八月九日長岡二里ニ手前御袋ノ陣屋名より出立ニ内七月
廿九日ニ長岡城官軍より来取ふ相成ハ処廿四日夕より
廿五日ニ撃戦ふて敵より取返ス双方共戦死手負多分有
之ハ由打続き廿六七八九日ニ砲発ニ処廿九日ふ官軍取
返シ追々敵兵ハ引色ニ相成当月朔日より四日迫追打凡
十里余ニ攻撃官軍次第ふ勢を得ハ由廿四日より廿五日
ニハ長岡藩ニ女扶市中ニ官軍より差養居ハ処陣屋并
市中ニ放火ハ〳〵弾薬並器械過半焼失仕ハ兼ふ内通い
さ〳〵有ニハ事ニハ故火ニ上りハを相図ふ打入ル策
之由是迫軍御懇愛を蒙り右扶ニ始末ふて老少男女ニ差
別なく切殺されハ八九通りニ可有ニ死骸山を成ス血

ハ拾うも測を落るがごとく其さ数日と雖ども強に有
て由是と會兵信濃山の向へ陣取に翌朝日後ハ追々引入
れ由新潟も惣ゐ官軍こゝに渡り此節ハ大勝利のよし北
越ハ雪深さ例ゝ後うて最よ山口ハ雪降るゐ初雪を丸め
道路ゐ賣居れ由各藩士も發炮し外一人ニて凡六百発も
相発れゐ殺傷お掛りれよりこれ一つを共四五人ゝ無一人
も怪我ゝ兎角玉ハ中りがゝきものなり右七日以来ゝ
戦争も戦ハ打ゝ有ゝ由長岡取返し後ニ敵兵器械もお捨
れよりゝ分捕ハ都ゐ焼失いたゝ山より多く有之趣有之共
四日夜より其地いろ〳〵有之れ一つを畧之

九月二日岸和田　朝裁

流罪　岡部一夢
相馬逸老
永禁錮　宮崎舎人
慎隠居　岡部要人
隠居　久野弾正
無構　蜂屋宗兵衛
同　月岡男也
同　佐々木惣左衛門
同　安井蔀

同　　戸田健次郎

右於鞫獄司御糺問之上　御裁判ニ仰出ル事

一右ニ付岡部筑前守差扣伺出ル処日数七日差扣ニ仰付候

大垣藩届

○八月廿一日薩長土大村藩玉乃井殿軍石蹉ヨリ出ル廿所ニ賊兵備居ル乃討散し支ラり會津二本松領分境方戚峠中頗る高山の嶮ヨリ賊徒四ケ所も臺場を築奮戦ス然に五藩の兵互ヨ先登を争ひ雑ちく方戚乃要地を奪ス甚夜ハ方戚峠ヨ野陣ス

内外新聞第十六

大垣藩届之写

○八月廿二日六字嶺上より猪苗代を指て発向ス猪苗代ハ會津領三万石ク陣屋ヨイて往古芦名氏の古城跡なり由會賊より陣番相詰居ル処定りて防戦あるべしと思ひしヨ左ハ無ク官軍至ル已前ニ少ク放火後し逃去ル

一同廿三日三字猪苗代を発し會城をさして押寄猪苗代會津領五重途中ハイナ湖ク汀こして十六橋を落し有ク候ハ木等ヨて俄ヨ仮橋拵け滝沢峠ニて一戦し大砲二ツ分捕

いたゝハ字に會城三ノ郭迫討入ヲハ支より賊も必死と
成て防戦にハ万中ゝ一附ゝハ責落ゝ難ゝと其夜ハその
侭篭陣も
附たり同日會城三ノ郭ヲて押入戦争ゝ処城下へ入三
四丁往来へ賊山中より突出ゝ一旦往来を防切ハつゝ
城中へ押入居ハ土藩并ハ藪藩ゝ兵少ゝ繰出ゝ一戦ニ
忽ち散乱いたせハ
一同廿四日早天より又ゝ猛烈ハ攻立ハ城中更ニ弱
る事色もなくハ故官軍會議いたゝ三ノ郭内放火いたゝ
官軍不残町家ニ引揚げ其四方を厳重ニ固め其夜同所

二宿陣ヲ
一同廿五日暁天に賊兵大勢ゝて越後口より寄来る此所
長州藩藩合兵守禦ゝ場処故一戦ニ忽ち追落ゝヲハ支ル
同日十二字と四字と同所へ賊兵襲ひ来る両藩共頑る苦
戦いたゝ薩土ゝ應援も有ゝハ故忠く討散ゝヲハ外追
手口馬場町ヒ大町ロ等より討て出ハ一せ悉皆討散ゝ城
中へ逃込ヲハ官軍ゝ死傷も夥敷有ゝ又賊ゝ死傷も如ゝ
ハ有ゝ其幾千と云事を知ゝず
一同廿六日賊兵不討出唯遥ハ遠くより不絶炮発すゝめ

一同廿七日暁賊兵少〻越後口田畑より襲来ル ニ付炮戦
ニおよび終日相散ヤル
右之通去月廿一日より廿七日迄會城ヘ討入〻戦狀出
先より ヤ越ル尤藩死傷別紙〻通ニ御坐ル旧藩御屆
ヤ上ル以上
九月十二日　壯合渚之助
軍務御役所

一同廿三日討死上下六人　姓名略之 私ニ
一同　傷上下十一人　同
一同廿五日死　二人　同
一同　傷　十八人　同
一同廿六日　二人　生死不相分二人
右ハ會城ヘ討入ル ニ付藩死傷書面〻通ニ御坐ル以
上

○去月廿三日より昼夜〻合戦〻て大小炮〻音ハ山岳〻
ひゞきて雷鳴のごとく城市の燃る火ハ半天を焦ゲ
其勢色十四五里の外つもえ渡りしが越後白川路ハ其
外所〻へ防禦として罷出居ル賊兵多くハ此三四日の内
ニ城中へ引取しかゝん白川路ハ賊兵も戦ハすして引退
さ肥前肥州尾州兵も此口より進軍廿五日ニ會津へ到着

なり

一城中ニ肥後若狭其外保科来名長岡父子共在之ヨリ

右等ハ走ヲ不なく四方敵ニ包まれ只々ひて ハ窮鼠

の勢ひなるゆへ一時ハ難雖くとも早竟自刃ヲ伏

して亡るか或ハ甲して降伏ヲ致ス多数

哉右是迄ニ豈場中上ハ尚委細ハ追て可申上ハ以上

八月

一薩州　甲賀町より三日町まて

一肥州　三日町より天寧寺町口まて

一土州　甲賀町口より大町口まて

右町口より挂林寺町口迄越後口米沢口共長州大垣藩ニ

て固めヲハ処廿五日夜より米沢口辺火け備前兵固めに

相成ヲハ

右ハ出先ニ者より書中ヲ越ハ侭書技者所迄入ハ保混

乱中ヲ越ハ儀ニ付書損ヲも可有御坐ハ郡此段ヲ上ハ

以上

九月十二日　大垣藩

○八月廿九日賊兵多く城中より出て挂林寺町口より西

の越後口迫所ニ杉林又ハ拈芦田畑ニ内より長藩并ヲ藩

藩持場へ向け必死ヲ成ニ襲来銃兵鎗兵ニも進撃互ニ先

を争ひ両注く弾丸を不恐進み来に付右三藩く兵大小
炮を以烈敷打立防戦すといへども賊兵少しも退く色な
く頻りに塹場近く進み来り既に塹場に鎗も入るべき場
合に成り処簇賊ハ散弾を以打撃単賊ハ小銃を以狙撃し遂
に尖進し其鋭鋒ハ取挫ぎやうに然れども賊く本隊不退尚追
く寄来る処に長州并肥藩く兵桂林寺町口辺より烈敷攻撃
ふおよび是ゆて賊兵乱れ驚ぎ城中をさして引退き斯り
処へ薩長の應援驀地に来り倶に城際まて追討し三字に
ゆくゆく兵を引上凱哥高唱へて此日討取大略数百有余人
尤藩死傷別紙く通に御坐候有り越候由申上候

以上

九月

一討死　姓名略之　都合五人
一傷受　同　十人

右ハ去月廿九日會津城下ゆて戦争く藩死傷書面
ミ通に御坐候以上

八月土州藩報知

○八月廿日薩長大垣大洲御國五藩之惣勢一列し會口之
進撃五ツ時に二本松を發し（今日先鋒玉の井郡へ八時に
着玉の井郡ハ二本松領也不存ト云）本陣此所に宿し山入と云所ハ賊五百斗屯

集し由を以て直接長藩御國し藩氏而て大垣大洲各四小
隊斗探出賊の正面に當り戦争終て賊敗走其夜三藩し兵
隊此所に陣を
同廿一日惣出兵（今日先鋒石蹉より不知ト云）ヨナリ峠ヨリ賊
一番二三番と炮臺を築さ一番炮臺ヨリ賊し兵に出會暫
く戦争雖あく打破り二し臺場に至り戦争是又同様打破
り城敗走也三の臺場に至るに実に堅固にして山路し炮
臺といへを二し臺場を奪取し勢ふ恐れ逃去り戦又ずし
て官軍異儀なく通り此而て御ほし手らも外藩へも多
捕数多有し且諸藩手負ハ不少由トナリ峠し至り日も暮

野陣を
一廿二日未此所を發し（今日先鋒ふ致ト云）猪苗代と云小城に進
撃（猪苗代し小城とハ賊を含屋乃家老なり）賊を人も及へず戦ハずして悉通行
を
一廿三日御國先鋒會津へ進撃城下入口ヨリて戦争ありな
く討入八ツ時に城内へ攻入諸藩共大に苦戦をとりへ共
終に賊城中ハ引大勝利を此而法藩共死傷不少京中所し
を焼本丸一ケ所残り城外を固居に事
一廿八日迫炮声絶へ賊よりも打し発炮すると云
一家中不残官軍し手うて焼拂残り有しも日し火を付共

八月廿七日火気絶へすと云
一布中ハ一人も殺し民家を捨何方へか逃去り城へ
籠るとも云
一白川口より聖至堂通尾紀肥く三藩進撃聖至堂く到る
如是ハ大坂固く所ハ本営より進撃く各藩会津ハ迫りしを
知り聖至堂く要地も賊勢乱いしく成右三藩も戦ハす
して廿九日会城ハ入る各藩とも城下を固め乗し事
右注進
會城く落着追く後巻ハ発揮せ無しと云

内外新聞第十七

辰九月會津降参之始末

○廿二日十字城内より降旗を立ル
右ニ付御使番より各藩固め場来也し矢比相達し事
一十二字御軍監中村某軍曹山縣十太郎御使番唯九十九
大手門内降参場へ罷出し
右場ハ別紙繪図面之通幕く外座配ハ後ニ記ス
然る所秋月悌二郎外ハ一人斗麻上下着無刀ニて出
迎後しハニ付薩州土州二小隊右場ハ殺害固いくしし事
一軍監始より秋月悌二郎其外ハ廉く手受書をハ渡ニ

相成い大意

一肥後父子何時此切所へ罷出い哉

一父子滝沢村妙國寺へ相退き潛居罷在い候家来ニ浪

ル同ジ

附ケり父子供廻り廿人家族ハ十人ニて相退き可

レ申自然吏代ハ跡しい兵ハ妻兵方へ相達い西かこ護

兵相附可申い

一惣家来ハ廿三日猪苗代ニ方へ立退い候

附ケり廿三日一日関屋より食用お弁翌日より御

扶持渡シ事

一病人之儀ハ廿三日春木村へ立退い候

一婦女子年六十歳ハ上十四歳以下勝手次第明廿三日

より立退い候

一重役菅野權ニ湯槙京平馬儀礼服ニて右場所へ罷出

肥後父子ハ袴羽織出可申旨御受ト上其坐ニ相居在い

引続父子礼儀ハ刀ニて圓面ニ通着坐いたしい ニ付

軍監始めヲ〻ニ堂を進ミ ト家肥後より自分歎願書

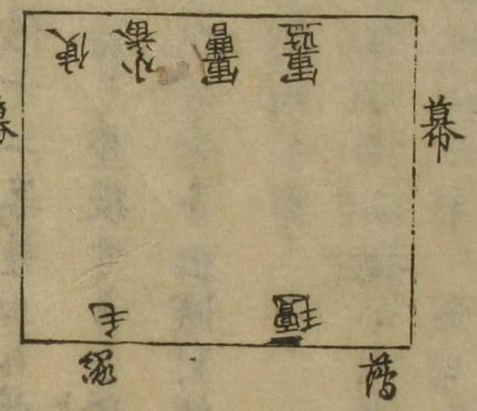
差出冥ニの口上ハて礼儀いたしい山縣小太郎儀

之中村其相達ト い故右ハ敦お源父子一先城中へ引

取後ニ退散ニ相成い、

附ケリ父子羅出ル可供廻十人斗リ幕外ニ相扣父子
刀袋ニ入持セ
一肥後父子引取ル上臣下一同ニ願書ニ儀も此場ニて
表上ル可然哉と重役より相伺ル則場所ニ而御
受取ニてお成と軍監始より御お養ニ付右願書ニ出
御受取ニ相成ル事
一同 最前ニ場所出張ニ相成ル処肥後家来重役ニ者居
ル父子出城ニ緩急相伺候ニ付ニ付有ラお暮ル二付
追ニ父子駕籠近ニ相進ル一ツ父子一應下来挨拶ニ上
不快ニ付来輿ニ乗ラ山縣ニハ跨馬ニて駕籠先ヘ

羅ル薩土二小隊前後護衛滝沢村妙国寺ヘ参入ニ相
成ル
附ケリ家族ハ男女三十人斗リ少ニ附添同寺ヘお越
ル事
一器械ニ儀十二字差出ル哉ラお達ル一ツ取調不行届
ニ儀も有ニ重役せより猶後ラ下ケ出ルニ付其通御
聞届ニ相成父子出城引渡ニ舞ニ付各藩より人夫を以
運取ニ相成ル事
薩州 小隊 軍曹 山縣小太郎切捧駕籠松平肥後供廻袋入刀持
松平若狭 袋入刀持 供廻リ 軍監 中村某長持二掉二掉土州一小隊



右江戸より九月廿七日出ニ力越ル

會も仙米庄三藩及心〻為實効滅亡ス由廿二日報知ス旨

右等条考ル〻ともに廿二日十字降旗を立て降伏を示

ルよりの手続ニてハ十二字に退城ハ手廻しゝ早過ル

事ハ仙米庄ホより説ふくめ降伏前以其手続

双方より調整ル而表向如法降旗を立られルと為られ

ルとあり

十月四日〻急報軍務官へ入る

但シ北越より直ニ達す

○去ル九月廿一日若松城降旗を建て降を乞ひ同廿二日

ニ會津肥後父子髮斗目麻上下無刀徒跣ニて陣前ニ降伏

を捧て罷出ル降伏之大意

先年在京之砌重き

天朝之御厚恩を蒙りあうゝ今日ゝ次第何共可ㇾ上様
無ゝ不將ゝ至此上如何体ゝ嚴科ゝ被ㇾ変ㇾとも一言之
ㇾ分無御座ㇾ趣をㇾ立ㇾ
右ニ付罪ゝ次第御譴責ゝ上城下寺院へ引下り謹慎ゝ後
命を待可ㇾ申旨被ㇾ仰渡ㇾ夜城中へ引取其上切棒ゝ篭ゝ柴
り寺院へ引下り即刻城中御改め兵器ㇾ市取上ゝ相成ㇾ
処左ゝ通

大炮　六十門　弾薬添
小銃　二千挺ㇾ
鑓　幾筋

士分之戦兵　二千人余
歩卒ゝ兵　三千人余
〆五千人ㇾ
手負病人　五百人余
婦人小児共　六百人余とゝ
兵外後篇ニ布告ゝ〆
○今般蒼生御安撫ゝ為ゝ　御東幸ㇾ為ㇾ在ㇾと付ㇾハ
賑恤ゝ場をゝ〆御廻米を被ㇾ為ㇾ設置ㇾ　思召を以別紙
ゝ通石数御買上ゝ　仰付ㇾニ付六藩ㇾ合速ニ東京船路
運輸可ㇾ致ㇾ事

九月

但し代料ハ後ち弐箇年上彼地一ヶ月平均相切ヶ御渡可相成ハ万此度可おん得事

玄米二万石　肥後藩　　同一万五千石　筑前藩

同　一万石　肥前藩　　同七千石　久留米藩

同　五千石　柳川藩　　同五千石　中津藩

右ハ通六藩御用米廻船ハ伐ニ付心得方件〻

一御船印之儀ハ兼ず御規則御定無ハ〻ニ付御用とお紀ー

幟可相用ハ事

一大阪府兵庫縣へハ夫々御達ニ相成ハ事

一東京着之上鎮将府へ可届出ハ事

尤鎮将府へハ兼テ御通達有之ハ事

九月十三日　　辨事

○箱館表之仙臺陣屋ニ罪人左ハ裁判所御発之情〻人数七月上旬〻須脱走

一同南部美濃守同断人数八月十二日暁陣屋へ火を掛凡人数三百人斗ゲ〻ル玉込抜身〻ブリキトンヒ〻異人より蒸気船雇ひ入不残乗込箱館沖出帆是誠の脱走ありとゝ

○九月二十日の事ありしか　伊勢神宮の花表故ありく

して折れし由なれば何ある事乃地方や人々恐を性むべ
き事なり

○淡路町にて有る女の髮結婚幣千両拾ひ一改らの事を
早速公廳へ訴へ申上しに其始末御安堵しに成る如
ふ落しなる主漸し後より公廳へ同訴へしに兼相し故
方嚴敷御叱し上入牢仰付しもの事

○旧冬来神籤或ハ佛札ホを降下させ人民を逐しに如又
と成ふ至り右様し事有し由是全く曲者し任業故変り
信用祭奠いさ様なるべ有ぬと御弱渡し成る世人
尤深く慎べき事なり

弘通所

大坂心斎橋南一丁目

同　安土町　敷賀屋九兵衛
同　同　河内屋和助
同　北久太郎町北　河内屋喜兵衛
同　北久太郎町四丁ノ　河内屋新次郎
同　心斎橋本町北入　河内屋忠七
同　北久太郎町四丁ノ　河内屋清七
京都四条河原町西入
同　三条御幸町角　山城屋勘助
同　御幸町姉小路上ル　吉野屋仁兵衛
同　三条寺町西入　菱屋孫兵衛
同　富小路四条上ル　吉野屋甚助
同　寺町姉小路上ル　丁子屋榮助
錢屋惣四郎

37
1
9